

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著

『ドイツ伝説集』（一八五三）試訳（その十）

鈴木 満 訳・注

\*凡例

1. ルートヴィヒ・ベヒシュタイン編著『ドイツ伝説集』（一八五三）（略称をDSBとする）の訳・注である本稿の底本には次の版を使用。

*Deutsches Sagenbuch von Ludwig Bechstein. Mit sechzehn Holzschnitten nach Zeichnungen von A. Ehrhardt. Leipzig, Verlag von Georg Wigand. 1853. Reprint. Nabu Press.*

初版リプリント。因みに一〇〇〇篇の伝説を所収。

2. DSB所載伝説の番号・邦訳題名・原題は分載試訳それぞれの冒頭に記す。

3. ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟編著『ドイツ伝説集』（略称をDSとする）を参照した場合、次の版を使用。

*Deutsche Sagen herausgegeben von Brüdern Grimm. Zwei Bände in einem Band. München, Winkler Verlag. 1981. Vollständige Ausgabe nach dem Text der dritten Auflage von 1891.*

因みに五八五篇の伝説を所収。

なお稀にはあるが、DSの英語訳である次の版（略称をGLとする）も参照した。

*The German Legends of the Brothers Grimm. Vol.1/2. Edited and translated by Donald Ward. Institute for the Study of Human*

Issues, Philadelphia, 1981.

4. DSB所載伝説とDS所載伝説の対応関係については、分載試訳冒頭に記すDSBの番号・邦訳題名・原題の下に、ほぼ該当するDSの番号・原題を記す。ただし、DSB所載記事の僅かな部分がDS所載伝説に該当する場合はここに記さず、本文に注番号を附し、「DS\*\*\*」と詳しい」と注記するに留める。
5. 地名、人名の注は文脈理解を目的として記した。史実の地名、人名との食い違いが散見されるが、これらについては殊更言及しないことを基本とする。ただし、注でこれが明白になる分はいたしかたない。
6. 語られている事項を、日本に生きる現代人が理解する一助となるかも知れない、と、訳者が判断した場合には、些細に亘り過ぎる弊があるうとも、あえて注に記した。こうした注記における訳者の誤謬へのご指摘、および、このことについても注記が必要、といったご高教を賜ることができれば、まことに幸いである。
7. 伝説タイトルのドイツ語綴りは原文のまま。
8. 本文および注における「」内は訳者の補足である。

- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その一) 一—— 六〇 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第一・二号  
 一七〇—二三五ページ、平成二十四年十一月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その二) 六一—— 九〇 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第三号  
 四六三—五三〇ページ、平成二十五年二月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その三) 九一—— 一三四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十四巻第四号  
 七五—一七六ページ、平成二十五年三月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その四) 一三五—— 一八四 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第一・二号  
 一五七—二八五ページ、平成二十五年十一月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その五) 一八五—— 二二五 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十五巻第三・四号  
 九五—一八〇ページ、平成二十六年三月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その六) 二二六—— 二八八 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第一号  
 二〇九—三三〇ページ、平成二十六年十月
- 『ドイツ伝説集』(二八五三) 試訳(その七) 二八九—— 三三九 所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六巻第二号

『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その八)

三四〇——

三九四

所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第三・四号

一〜九八ページ、平成二十七年三月

『ドイツ伝説集』(一八五三) 試訳(その九)

三九五——

四四四

所収「武蔵大学人文学会雑誌」第四十六卷第三・四号

九九〜一九六ページ、平成二十七年三月

\*本分載試訳(その十)の伝説

四四五 シュールハウゼンの泉 Mühhäuser Brunnen

四四六 ヴィンフリートとシュトゥムル Winfried und Sturm. \*DS181 Der heilige Winfried.

四四七 シュトゥツフエン山 Der Stufenberg. \*DS182 Der Hülenberg.

四四八 ヘルマン・フォン・トレンフルト Hermann von Treffurt. \*DS580 Hermann von Treffurt.

四四九 乙女の帯 Der Gürtel der Jungfrau.

四五〇 エルベル Der Elbel.

四五一 ヴァルトブルク築城のしだこ Wie die Wartburg erbaut ward. \*DS553 Wie Ludwig Wartburg

überkommen. / \*DS582 Hungersnot in Grabfeld.

四五二 ルーラの鍛冶屋 Der Schmied in Ruhla. \*DS556. Der hartgeschmiedete Landgraf.

四五三 貴族の畑 Edelacker. \*DS557 Ludwig ackert mit seinen Adligen.

四五四 生ける城壁 Die lebendige Mauer. \*DS558 Ludwig baut eine Mauer.

四五五 鉄方伯の葬儀 Des eisernen Landgrafen Begängniß. \*DS559 Ludwigs Leichnam wird

getragen.

- 四五六 ラインハルツブルン修道院が保護されたしたん Wie Reinhardstrum geschirmt ward.
- 四五七 魂ヘーネー・ハクテ哭山ハクテの話 Von dem Hørseelenberge. \*DS174 Der Høselberg.
- 四五八 鉄方伯アイゼン・ヘー・ハルツバーの魂 Des eisernen Landgrafen Seele. \*DS560 Wie es um Ludwigs Seele geschaffen ward.
- 四五九 ヴエーヌスの奥方と荒れダス・ウィルデ・ヘー狂同勢ヘーの話 Von Frau Venus und den wilden Heer.
- 四六〇 高貴な騎士タンホイザーの話 Vom edlen Ritter Tanhäuser. \*DS171. Tannhäuser.
- 四六一 ちいぢやな帽子小人 Das kleine Hütchen.
- 四六二 ヴァルトブルクの合戦 Der Krieg auf Wartburg. \*DS561. Der Wartburger Krieg.
- 四六三 名匠バスタークリンゾルの星スタートウ Meister Klinzor weissagt aus den Sternen. \*DS561. Der Wartburger Krieg.
- 四六四 ハンガリアからやうて来た小ぢやな許嫁ヘンゲル Die kleine Braut aus Ungarn. \*DS563. Die Vermählung der Kinder Ludwig und Elisabeth.
- 四六五 聖女エリーザベト Die heilige Elisabeth.
- 四六六 聖者方伯ヘー・ヘー・ハルツバールートヴィン Der heilige Ludwig.
- 四六七 ソフィーアの手袋 Sophia' s Handschuh. \*DS565. Frau Sophiens Handschuh. / \*DS564 Heinrich das Kind von Brabant.
- 四六八 頬カに噛みつく Der Wangenbiß. \*DS566. Friedrich mit dem gebissenen Backen.
- 四六九 噛まれ傷カのフリーゼリヒの洗ワシ礼レイ騎行 Friedrich des Gebissenen Taufritt. \*DS567 Markgraf Friedrich

- läßt seine Tochter säugen.  
四七〇 神秘劇 Das Mysterium.  
四七一 郷士イェルク Junker Jörg. \*DS62. Doctor Luther zu Warburg.  
四七二 修道士と修道女 Mönch und Nonne.  
四七三 呪われた娘 Die verfluchte Jungfer.  
四七四 インゼル山の話 Vom Inselberg.  
四七五 ヴェネチア人 Der Venetianer.  
四七六 カール五世 Karles quintes.  
四七八 綿毛に化けた夢魔 Das Alp als Flaumfeder.  
四七九 ヴイットゲン殿 Der Wittgenstein.  
四八〇 ちっちゃな富籤壺 Das Löthöpfchen.  
四八一 麵麩焼き竈洞窟 Das Backfenloch.  
四八二 ガイスバインスロツホ 山羊脚洞窟 Das Geißbeinloch.  
四八三 スレープ 蛇の羹汁 Schlängensuppe.  
四八四 ライフシユタイク山の斜面 Die Reifsteigshalde.

## 四四五 ミュールハウゼンの泉

ミュールハウゼン<sup>(1)</sup>、近郊および市内には幾つも泉源があり、これらは遍く有名である。泉の一つはブライトジュルツエ<sup>(2)</sup>といい、町から北西へ半時間、ヘルプスト山麓<sup>(ベルグ)</sup>にある。伝説にいわく。現在アントニウス施療院<sup>(ホスピタール)</sup>があるところに昔修道院が建つていた。ここのある修道士(さ)にあらず、ライフエンシユタイン修道院<sup>(3)</sup>所属の修道士なり、との説も)が町に秘かに愛人を持っていて、夜毎通う際、この巖<sup>(いわ)</sup>を潜り抜けた、といまだに人が指差す。とうとう事が明るみになると、坊<sup>(くた)</sup>さんは逮捕されて鷲塔<sup>(アトドットアルム)</sup>に禁錮、死刑執行を待つ身となった。ところでかねてから町の飲用水は充分ではなく、件の修道士は上水工事技術を心得ていた。そこで町よりもずっと奥まったブライトジュルツエの泉から水を引くなら、自由の身にして遣わそう、と申し渡された。難事業に着手した修道士は、ヘルプスト山<sup>(ベルグ)</sup>、トーン山<sup>(ベルグ)</sup>、カルプ山の周囲をうねくね迂回<sup>(うかい)</sup>させた七千六百と十歩の水路を構築、行程およそ二時間半、水が山を登っているかに見える箇所も少なからずといった具合だったが、泉の水を町へ供給することに成功、かくしてめでたく釈放されるに至つたらしい。

これまたその道に長けた修道士によって成就した細流ライネからの導水を語る極めてよく似た伝説がゴータ<sup>(5)</sup>にある。

ミュールハウゼン市西方にあるポツペローデ(廃村)<sup>(6)</sup>の泉は素晴らしく美しい。大きな源泉で水底まで鏡のごとく明澄である。泉の水の精<sup>(ニンフ)</sup>は尽きることなく恵みを授け続け、水は二つの池を満たし、十二の水車を回している。げにありがたきことかな、と毎年謝辞と敬虔<sup>(けいけん)</sup>な讃歌<sup>(3)</sup>が捧げられ、若い男女が二重祭典<sup>(ドッペルフェスト)</sup>で祝う。いと歳古りた何本か

の科リンデンバムの木の下にしんと鎮もっている噴泉池ベッケンのすぐ傍に塔の附いた風変わりな園亭アザマヤがあり、その涼しい堂内には昔も今も数数の碑文が記されたし、記される。これらの碑文の内最上最美の詞ことばは漆喰しっくいで塗り潰されてしまったが、ここに再現してみよう。

岡象女みずのはめらが頭かしらをば光の花冠が飾るよう、

泉おもての面を差し覗のぞき、汝なれの面を葉叢はむらで飾(8)れ。

ブライトジュルツエの泉にはまだこんな言い伝えもある。これはかつてさる修道院の泉だった。大方の修道院のように、この修道院の近くにも教会があった。教会に隣接する鐘楼には三つの銀の鐘が下がっていた。ミュールハウゼン戦争当時(9)修道院は破壊され尽くした。そこで銀の鐘を敵手に渡さぬため、一修道士がこれらを泉に沈めていわく「三人の者が泉を浚さらい、一人が泉の中で命を落とさぬ内は、鐘が日の目を見ることはない」と。

随分昔になるが、アンメルン(10)の村塾の先生が夢を見た。ブライトジュルツエへ行け。すると泉の畔ほとりに綱が一筋見つかるだろう。この綱を引け。そうすれば、かの三つの銀の鐘が揚がって来るだろう、と。この人は三度同じ夢を見たので、ブライトジュルツエへ出掛けて行った。泉に近づくに従って、銀の鐘の麗しい響きが聞こえて来た。泉の畔に着くと、何もかも夢に見た通りだった。綱を引くと、なんとまあ、三つの銀の鐘が徐徐に揚がって来るではないか。とその時騎馬の男が通り掛かり、「好ツい朝テン・メルゲンでありますように、お師匠さん、好ツい朝をお祈テン・メルゲンりしますすじや」と声を掛けてよこした。挨拶された方がしごく愛想良く「これはまた忝かたじけのうござる」と言葉返すと——途端に恐ろしい響きとともに鐘は水中に沈んでしまい、二度と再び日の目を見ることはなかった。

## 四四六 ヴィンフリートとシュトゥルミ

聖者ヴィンフリートとシュトゥルミ<sup>(13)</sup>は異教徒を改宗させようとヘッセンの邦<sup>くに</sup>にもやって来た。当時カール大帝〔II シャルルマーニユ〕はデーメルラント<sup>(14)</sup>で戦っており、イルミン柱<sup>ソイル</sup>——カールはこれを破却——のあったエレス城<sup>ブルグ</sup>とデーゼン山<sup>ベグ</sup>なる二つの堅固な城塞を占領した。率いる軍勢がデーゼン山<sup>ベルグ</sup>麓で猛暑のため渴き死にしそうになった時、カールは神に祈ってブラー<sup>ブラー</sup>の泉を噴出させた。この泉は今日に至っても潺湲<sup>せんぜん</sup>と湧き出ている。ヴィンフリートは異教徒の聖所が置かれてあるある山に来て、これを破壊、その場所に最初のキリスト教会を建立させた。これこそあのクリスト山<sup>ベグ</sup>あるいはクリステン山<sup>ベグ</sup>であり、今日に至っても人人は、ヴィンフリートが聖なる熱狂に駆<sup>か</sup>られてどんと踏み付けた、という足跡が刻まれた巖<sup>いわ</sup>を示す。山の別の場所だが、大帝の幕舎と軍勢の屯営が長らくあつたヴェーザー川を見下ろす高みには、カールが裁きを行った際に坐<sup>すわ</sup>つた灰色の古巖<sup>いわ</sup>があり、カールが凭<sup>もた</sup>れた腕の重みで凹んだ痕<sup>あと</sup>が残されている。ここには後にヘアシュテレ城と現在のヘアシュテレ行政区<sup>(17)</sup>が置かれた。

ガイスマーリなる農場<sup>ホフ</sup>——その名は後世それから発展した都市ホーフガイスマールに残っている——から行程一時間、今日のエーバーシュツツ村に、デーメル川右岸を見下ろす険しい巖壁<sup>いわかべ</sup>がそそり立っている。その最高所、巖壁で囲まれた地点を懸崖<sup>クリフ</sup>と称する。異教徒はこの高みに連中の一件〔II 神〕を祀<sup>まつ</sup>っていた。そこへ巡礼杖を携えキリスト教の祭服を纏<sup>まと</sup>つた、だれ知る者としてない老人がやって来て、異教徒たちにキリストの生誕、生涯、苦難と死、復活、昇天、再来を説いた。これを聞いた異教徒たちは、荒唐無稽<sup>こうとうむけい</sup>で信じがたい話と思い、老人を脅した。ところが老人は杖を地中に突き刺していわく「わしがそなたらに告げた報せ、永久<sup>とこしえ</sup>の福音がまこと真実であれば、唯

一にして真の神の全能によりこの杖が芽吹き、葉を付け、花開くこと必定である」。——そして双手を天に挙げると、奇蹟が起こった。杖は緑となり、芽吹き、枝を伸ばし、葉を付け、花開いた。かくして異教徒たちは信心し、洗礼を受けた。かかる奇蹟を行ったのはヴィンフリートの敬虔な弟子シュトゥウルミだった。

大ファルゲーラ村の伝説は全く同じである。もっともこちらの方では、杖の奇蹟をなしたのはヴィンフリート  
 Ⅱボニファチウスその人であり、更にこの奇蹟の木は椰子のごとき異国の樹型で、長らくこの地に立ち、尊崇された、との付け加えがある。

#### 四四七 シュトゥウツフェン山

エツシュヴェエーゲとヴァンフリート地方に一座の高山があり、毎年夥しい巡礼が、とりわけアイヒスフェルトから訪れる。ヴィンフリートはかつて山上に一字の礼拝堂を建立したが、建築の途中、見知らぬ男がしげしげとやって来て、壁工と大工らに、一体何ができるのか、と訊ねたもの。——そこで職人たちは「納屋でさあね」と答えた。男はそのつどこう聞かされては帰って行ったが、とうとううっかり納屋なるものの中に足を踏み入れてしまった。——するとなんと内部には祭壇が設えられていて、祭壇上にはキリスト磔刑像が懸かり、納屋なんぞではなくキリスト教の教会だったのだ。そして扉がばたあんと閉まり、男は外へ出られなくなった。ぎゃあつ、男は大恐慌。いやもう、こやつ自身が悪魔でなかったら、てっきり悪魔になっちゃった(「Ⅱ気が触れちゃった」ところ。僅かな隙間があった破風に死に物狂いでばりばり穴を開け、屋根の上へと遮二無二脱出した。この穴だが、その後どうやっても塞ぐことができなかった。逃げた悪魔はそれからシュトゥウツフェン山の胎内に潜り込み、ここにも穴

を残した。この穴はシュトウツフエン洞窟（洞窟本）という名である。時折この洞窟から煙霧が立ち昇るそうなる。これなんかつて悪魔が流した冷や汗の名残（なごり）だとか。

ハールツ山地の麓にある町ゲルンローデ（ロ）の傍にもシュトウツフエン山（ベルク）なる山がある。頂きには園亭（あずまや）があり、かの悪魔（トイフェルスマウアー）の壁やクヴェードリンブルク、ハルバーシュタットの絶景を楽しめる。

ところでヴァンフリート近くのシュトウツフエン山（ベルク）山上にポニファチウス聖者が建立した礼拝堂は聖ゲヒュルフエンと称し、これに因（ちな）んで山もヒュルフエン山と呼ばれることがある。救難聖女礼拝堂を聖キュンメルニスという者も少なくない。苦難聖女はその昔素晴らしく美しい王女だったが、クヴェードリンブルク修道院を創立した女性と同じ事態に追い込まれた（DSB三三二）ので、主なる神（し）に男のような髭（ひげ）を生やしてもらい、譬（たと）えようもない美貌を台無しにした。ドイツ諸邦にはこうしたヒュルフエン（キュンメルニス）礼拝堂がたくさん存在する。ザールフェルト近郊にあるその内の一つで彫像に関する特別な伝説があるものについてはいずれ詳しく述べよう（DSB五三二）。

#### 四四八 ヘルマン・フォン・トレフルト

ヴァンフリートの向こうに位するトレフルト近郊（近）、ヴェラ川左岸に巨大な山が聳（そび）え立ち、ヴェラ河谷へと険しくなだれ込んでるのが遠くからも見える。その名はヘラー（シュカイン）巖、またノルマン（シュカイン）巖ともいう。昔トレフルトにヘルマン・フォン・トレフルトなる敬虔な騎士が住んでいた。彼はまことによくできた御仁だったが、たった一つ欠点——これをしも欠点と申すならだが——があった。女色を愛（め）でることに關しては極めて融通無碍（ゆううずうむげ）、ご婦人方

が、だらしない悪いひと、と仰せになる度合いがいつも甚だしかったのであって、これを彼は神に感謝した。さてこの雄雄しき騎士は、およそ情事の火種が転がっているところならいつどこへでも、聖処女マリアの祈禱を唱えて——なにしろマリア様はトレフルト騎士ヘルマンが崇め尊ぶ唯一の処女だったのでね——馬を走らせるに吝かではなかったし、また事実随分と出掛けたもの。ある晩騎士は騎馬でクロイツブルク辺りかなにか、ま、いずれにせよ氣立ての好い麗人がいる場所に赴いた。けれどもこの御仁、騎士タンホイザーよろしく近場のヴェーヌス山をご訪問あそばした(「色事を愉しんだ」ばかりではなく、酒神山にも立ち寄った(「飲酒にも耽った」)ので、馬上でこつくりこつくり。ために馬はゼルマンズハウゼンを過ぎると左手の脇道に逸れてしまった。左側とか左翼なんてのはなんでもそうだけれども、お蔭で由由しい事態とあいなった。馬は河谷に入ってごく近くのトレフルトを指す代わりに、巨大なヘラーシュタインに登るかなりの迂回路沿いにご主人を乗せて進んで行ったのである。ずんずん行く内に遂に例の断崖の縁に出た。そこでもちろん馬はびっくりして立ち止まり、跳びすさった。この衝撃で艶夢からはっと目覚めた騎士は、この莫迦馬、なんだってわしを起こしおるのだ、と考え、罰として馬にしたたかに拍車を掛けた。その結果馬は、ザーレ河谷に屹立するギービヒェンシュタイン城の高さのおよそ三倍はあろう恐ろしい断崖の底へ躍り込んだ。敬虔なヘルマンは突然自分がもう騎行ではなく飛行しているのに氣付き、ルートヴィヒ跳躍伯と同様「助けて、聖なるマリア様、そなたの僕をお救いあれ」と叫んだ。すると温かく柔らかな女性の腕に抱かれ、受け止められ、鞍からそつと持ち上げられたような氣がした。かくして彼は細い血管一本、小骨一本損なうことなく助かった。馬はといえば顛落死し、騎士の劍は落下のため鞘の中で硝子のように粉粉に砕けた。こうして罪にまみれての急逝を奇蹟的に免れた騎士は、その後世俗と肉欲の快楽からすっかり縁を切り、従前にも増して信心深くなり、クロイツブルクとヴェーヌスベルクの間にあるアイゼナハに行って修道士となり、その

腕で抱き留め、持ち上げてくださった聖処女にひたすらまめやかに祈り、かしずいた。かくして、福音書にあるあの美しい罪の女のごとく、大いに愛を捧げたので、大いに許されたいのである。

#### 四四九 乙女の帯

蒼古たるハルシユタル一族の殿たちが今なお栄えているミール対岸、ヴェラ河谷のクロイツブルクを見下ろす位置にその昔ミュンスタールキルヒエンという壮麗な修道院があった。豊かな資産と装飾に恵まれたこの修道院には幾つもの高い丸屋根と塔が聳え、素晴らしい鐘があり、その響きは広く谷のそちこちで聞こえた。さりながらテューリンゲンの邦を荒廃させた数々の戦争のためミュンスタールキルヒエン修道院は廃墟と化し、ミールの建物はほぼ修道院の石材で作られた、という話である。とどのつまり緑なす低い丘陵が後に残ったに過ぎず、ヴェラの流れが大きな弧を描いて囲い込み、しばしば氾濫して水没させるその場所は「砂地」と呼ばれるのみ。けれども教会の大祝日の折、信心深い巡礼たちが河谷をゲヒュルフェン山へぞろぞろやって来ると、地中深くミュンスタールキルヒエンの巨鐘が鳴り渡るのを耳にしたものである。この鐘はエアフルトの名高い最大の鐘と同じく、栄光ノマリあなる名だった。さて、砂地の縁にある共有牧草地で貧しい若い娘が羊の番をしながら、ヴェラ河畔の榛の木林で寝入ってしまったことがある。そして、獐猛な様子どうもうの二人の男が例の近くの丘の上で闘い合うのを見、加えてあの地中に沈んだ鐘が鳴り響くのが聞こえた、という夢を見た。目を覚ますと、二頭の若い牡牛が激しく争い合い、地面を踏み鳴らし、土塊が周囲に飛び散るほど穿り返していた。そこで娘はそこへ急ぎ、格闘している獣たちを追っ払って喧嘩を止めさせたが、なんとまあ、牛どもが掘り返した場所の土から鐘の耳が突き出しているのだ。乙女は驚喜

して帯を解き、一方の端を鐘に、もう一方を近くの灌木かんぼくに結び付け、牡牛どもを丘から追い払い、川向こうのミールア走って、何を見つけたか知らせた。そこで町中が拳こぶつてやって来て、ミュンスタールヒエンの美しい巨鐘を厳かに掘り出し、町へと運んだ。これが現在ミールア最大の鐘である。どうやら乙女の帯は魔力を行使したのである。さもなければ鐘は再び大地に沈んでしまったに違いない。クロイツブルクとアイゼナハの中程にあるベルカベルカでも教会の鐘楼に立派で大きな鐘が吊られている。これは町を見下ろす山で遊んでいた子どもらが見つけたもので、今なお、ここがその場所、と示される。土地の者はだれもこの言い伝えが本当であることを疑わない。この牧師さんいわく「この鐘にも銘文があります。しかし、これまで随分学者先生が来たのに、読むことができませんでした。つまりですな、訳の分からぬ文を読み解くのに長けた学者は多いのですけれども、ドイツ語は不得手でいらっしやるようで。と申すのは、この銘文、ちゃんとドイツ語で鐘に鑄込まれていて、易易オヤオヤと読めるのですから」。

#### 四五〇 エルベル

ミールア周辺およびミールア自体で荒れ狂うデア・ウイルデ・エーガ獵師はエルベル(30)と呼ばれる。このこと、ドイツ神話にとつて大いに意味深長である。エルベルは廃村ヴェルナースハウゼン——ここはかつてフォン・ヴァンゲンハイム一族の居城であり、彼らは今日に至るまで練達の獵人である——の背後に聳そびえる巖いわの裂け目に棲すんでいる。更にウンシュトルト河谷とヴェラ河谷およびヘールゼル河谷の間に長く伸びている山地ハイニヒへと登って行くと、エルベル巖シタインとエルベルの説教壇カンツェルがある。エルベルとその狩獵隊はハイニヒ山地とその周囲を轟轟こうこうびゅうびゅうと荒れ回る。ここが繩張りの獵区なのである。三十年戦争当時ミールアに居を構えていたハルシュタルの殿お抱えの獵師でひどい荒くれ

者がいた。ただしその名はマックスでもカスパールでもなく、ヘルツァーコプフ(3)といった。この男がある時犬を連れて狩りしているとエルベルとその狩猟隊に出くわした。追われているのは髪を靡なびかせた美しい乙女で、全速力で飛ぶように逃げていた。ヘルツァーコプフはこの乙女が大いに気に入って自分もすぐさまエルベルの仲間に加わりたくなつた。こうした獲物は殺したくなかつたから、彼は荒れ狂う狩猟隊が轟轟と傍を通り過ぎる時、めくらめつぼうに銃を発射した。すると、なんと、この射撃が大成功、というのはこれまでお目に懸かつたこともない見事な牡おすのろ鹿が弾丸に中あたつて繁しげみを押し分け、彼の足許あしもとにくずおれて息を引き取つたので。以来、ヘルツァーコプフは撃てば必ず大物を仕留めるようになった。そこで彼はエルベルが仲間になりたいという願いを叶えてくれたことが分かつた。ある日、主人とともに狩りに出掛けたヘルツァーコプフは坐すわり込んで、朝飯に取り掛かつた。ハルシユタルの殿はもつと先へ進みたかつたので、機嫌を損じ、どういうつもりだ、と詰なつた。「のんびりなさいましよ、ご主人様」とヘルツァーコプフ。「犬どもを放しませうや。でもあたしらがくたびれることありません。て」。——こう言うなり、猟犬たちを放し、ぐいと一飲みすると、銃の撃鉄を起こし、空中へ発射した。するとなんと素晴らしい殿様牡角鹿エーデルヘルシユスがほほ肩胛骨けんこうこつの間を射たれて跳びはねて来た。するとヘルツァーコプフはハルシユタルの殿に猟刀を差し出して「ご主人様、この十六又角鹿セヒツツェーシエンダウに止めをお刺しになつたらいかがで」と言つた。——「いや、きさまは妖術使い、魔弾の射手(3)になりおつたな」とハルシユタルの殿は叫び、渡された鹿猟用猟刀ヒルシユフェンガーを投げ捨てた。なにしろ信心深いお人だつたので。「きさまには暇いとまを遣わす。今後はエルベルに仕えるがよからう。このわしではなくな」。——「お許し忝かたじけなく頂戴ちやうだいつかまつりました。あたしもそれが望みでさあね」。ヘルツァーコプフは傲然ごうぜんと言ひ放ち、帽子を被り、銃を主人にぽんと抛ほうり、もう一度飲んでから、持った酒杯を投げて壊し、別れの挨拶も世話になつた礼も抜きにして歩み去つた。それ以来、この猟師はまさにエルベルの眷属けんぞくとなり、エルベル巖シユクダシ

上の待ち伏せ場でエルベルの傍らに立っているのがしばしば見られるようになった。今日、アイゼナハとミールからミュールハウゼンへ通じる新道が中央を貫通しているハイニヒ山地でもさして狩りは行われないうし、魔弾の射手たちも滅多にいなかった。ただしヘルツァーコプフの類はいまだに夥しい。いや全くの話が。もつともありがたいことに連中は妖術使いではない。

#### 四五一 ヴァルトブルク築城のしだい

古伝承によれば、悠久の昔アイゼナハをギウンターなる王が治めており、その息女クリームヒルデにフン族の王エツツエルが求婚、この地で盛大な華燭の典を挙げたそうだが、近隣の山山全てを凌ぐ巖だらけの峰が町の背後に突兀として聳え立ち、その頂きにはめつたに人が足を踏み入れなかつた。その頃既に一連の城郭がテューリンゲンの邦をぐるりと取り巻いていた。なにしろ、フランク族諸王の古いデイスパルグムの数数が異教の神所の聖所があつた高み——キフハウゼン、デイスブルク、メルヴィスブルク、シャイドウンゲン等々にあつたし、ヘルトブルク、コーブルク、ゾルベンブルク、ルードルフスブルク、エツカルツブルク、フライブルク、ギービヒエンシュタイン、ザクセンブルクといった砦が、貴族一門の揺籃の地グライフェンシュタイン(ブランケンブルク)、シュヴァルトツブルク、ケーフェルンブルク、グライヒエン、ブランケンブルク・アム・ハールツ、アンハルト、マンズフェルト、シュトールベルク、フランケンシュタイン、フランケンベルク、ヘンネベルク等々と同様、少なからぬ王家君侯の居城と並んでテューリンゲンを防禦していたので。アイゼナハを見下ろす山地の向こう側にフランケンシュタインの殿たちがこうした城塞を持っていた。その名はミッテルシュタイン。もつとも一族発祥の城は

ヴェラ河谷の上流山地に聳えていたのだが。さて、ルートヴィヒ髭もじや伯爵の子息で後に跳躍伯と添え名されたかのルートヴィヒ伯が居城のシャウエンブルクからヴェラ河谷——ここに彼はやがてラインハルツ泉修道院を建立する（その場所に不思議な小さな焔を見た陶工ラインハルトに因んでそう名付けられた）——へ騎馬でやって来た。猟獣の跡を跟けながらヘルゼル河谷に沿って進んでいると、不意に円錐状の巖山が見えた。巖山は陽光を浴びて、谷谷に垂れ籠めていた霧から高く突き出ていたのである。若き伯爵は駒を止め、しばし黙想し、高らかにこゝう叫んだ。「山よ、待つておれ、おぬしをわしの城にいたそうぞ」。そして扈從の者たちが追いつくの待った。ところが狩りの一行にいた年輩のだけかれから聞かされたのは、その山の持ち主は彼でも彼の父親でもなく、所領を接するフランケンシュタイン一族だ、ということ。けれども伯爵は怯まず臆さず妙計を案出。まず近くにある父親の領地から夜陰に乗じてこっそり土を幾籠も幾籠もかの山上に運び、その地表へ一手幅の高さに拡げさせ終わると、次いで壘壁の築工と地所の掘り返しを開始した。フランケンシュタインの殿たちは、もう手遅れとなつてから、ミッテルシュタイン城を見下ろす位置にだれかが断りもなく築城をしているのに気付いた。殿たちは堪え忍びたくはなかつた。なかつたが、可憐な蕃薇を手折つた唄のあの少年と同様、堪え忍ばなければならなかつた。なにせ、彼らが伯爵を攻撃しようものなら、伯爵の方は高みから真ん中石城の真ん中に荷車一台分の石を投擲することだつてできたのだから。さて、こうした築城が行われた一〇六七年は折しも惨憺たる飢渴に見舞われた歳だつた。葡萄酒がろくすっぽできないので、聖餐式にも事欠く町村が少なくないという有様。まことに恐ろしいことだつた。そうした時はテューリングンの伯爵が城塞を築いている、との噂を聞きつけた在在所の貧民たちは大挙して押し寄せ、切石を曳くやらなにやら工事の手伝いをした。それもただ日日の糧を得て餓死せずに済めばよいというだけのこと。なにしろこの時代にはこんな話もあつたのだ。グラープフェルトから妻といとけない子どもを

連れてテューリンゲンの築城現場へと志した男が、途中で子どもを殺し、その肉を喰おうとしたのである。もし神が、丁度牝鹿を引き裂いている二頭の狼を男にお見せにならなかつたら、兇行に及んでいたところ。男は狼どもをその獲物から追い払い、牝鹿を取り上げて餓えを満たすことができた。

とにもかくにもフランケンシュタインの殿たちは、伯爵が我らの所領に築城しております、と皇帝ならびに帝国に訴え出た——当時にあつてももう裁判沙汰は延延と時間の掛かるものと決まっていた、現代に至るまでこうした傾向は司法官および弁護士たちが大儲けするように極めて賢明に維持され続けている——が、そうこうする内築工はほぼ完成、伯爵は、城山を初めて遠望した時に叫んだ自分の言葉に因み、新城をヴァルトブルクと命名した。そして誓言が成就するように、伯爵はフランケンシュタイン一族に対し、築城した土地は彼らのものではなく、自分のものであることを証明する、と申し出、当時の習俗に倣い、地所に關し誓いを立ててこれを確証する十二人の宣誓補助人を選び、これられつきとした人士とともに築城現場に赴いた。宣誓補助人たちは剣を抜いて土が撒き散らされた地面に突き刺し、伯爵と一緒に、自分たちが伯爵所有の土の上、すなわち彼自身の土地の上に立っている、と声を揃えて誓った。こうした宣誓補助人の宣誓にはいかなる異議申し立ても甲斐無く、フランケンシュタインの殿たちは正義を明らかにするはずの裁判のこの上ない不正を甘受せざるを得なかつた。ヴァルトブルク城はこうして築かれ、命名されたのである。近代になって城の瓦礫の下深くにひどく錆びた十二本の大きな鉄剣がぶつちがいに横たわっているのが発見された。これはルートヴィヒ伯の宣誓補助人の帯剣で、土地をより堅固にするため埋め込まれたものと思われる。

## 四五二 ルーラの鍛冶屋

ヴァルトブルク城を築き、アイゼナハ市を市壁で囲み、ラインハルツブルン修道院を建立、同修道院で修道士となつて贖罪を行つたルートヴィヒ伯は、やはりルートヴィヒという子息を残した。皇帝はこの人をテューリンゲン方伯に任命した。彼は若年の上、温良な性格で、貴賤の別なく臣下に対しごく寛大かつ謙虚にふるまつた。こうした為人は配下の封臣たちに弱さ、愚かしさと受け取られた。彼は処罰を嫌い、訴訟沙汰を耳にするのも好まず、万人に心からの信頼を寄せ、貴族たちが民草を手ひどく圧制し、都市の市民も田舎の農民も夥しい暴力沙汰を忍ばざるを得ないでいるのを知らなかつた。数数の哀訴嘆願が主君に伝わるのを側近の者たちが妨げたのでなおさらである。

ある日の夕べ、馬で狩りに出た若き方伯は森で踏み迷い、やつとルール村の近くに辿り着いた。そこで野鍛冶の明るい炉の火の輝きを夜の闇の彼方に見つけ、そちらを指し、鍛冶屋に一夜の宿りを求めた。鍛冶屋はこの青年がだれだか分からず、素性を訊いた。「わたしはそなたの主君、方伯の狩人の一人なのだ」。「ええ、方伯の、だと」と鍛冶屋は叫んでべつと唾を吐き、口を拭つた。「あれの名を言えば口を拭かにならん。その名で汚れんように。悪お情け深い莫迦殿様めが。まっことわしがあなたを泊めるのはあなたのためではないぞ。ささ、あなたの馬を納屋へ牽いて行きなされ。それからこつちへ来て坐るがええ。有り合わせを飲み食いして薬の上で休むだな。なにせここにはあ寝道具などありませんで」。方伯にしてみれば、こうした荒っぽい文句がなんと臍に落ちなかつたが、黙つたまま乗馬を屋根の下に入れてやり、それから鍛冶場に戻つた。鍛冶屋はもうろ

くすつば彼に構わず、鑪を動かして火を煽り、かつかと燃え立たせて鉄を灼熱させ、じゅつと水に漬けると、再び灼熱させ、鎚で打ち始めた。そして打つたびに絶えず「ルートヴィヒ方伯、堅く〔＝厳しく〕なれ、堅くなれ」と叫び、火花が飛び散るほどに重い鎚で打つにつれ、臣民の悲嘆困苦のありつたけをずらずら物語り、このテューリッゲンの邦で起こっているあらゆる罪過、あらゆる非道は方伯のせいだ、と決めつけ、方伯が地獄の奈落へ落ちるように、と呪い罵って止まなかった。それからまた、物知らずな癖にこの身は賢いと自認、仕える君侯に、ご領邦ではなべて事もござりませぬ、と思い込ませる自惚れ屋の相談役衆について昔ながらの唄を歌った。それでいて後から欺瞞が明るみに出、暴動の火の手が上がると、この結果生じる不幸は悉く君侯の責任にされるのである。こうした鍛冶屋の厳しい言葉から己に対する民草の意見を聞き知った方伯は心底驚愕し、配下の貴族たちが犯した不法に恐怖で決着を付けよう、と決心した。とことん堅く鍛えられた彼は、露まどろむことなく夜を過ごし、ルーラの野鍛冶の許を去った。彼の柔和な精神は鉄のように堅く変じた。統治の手綱を我が手に握ると、これをぐいと引き締めたので、貴族なる馬どもは泡を吹き〔＝激怒し〕、歯ざしりし、棹立ちになった〔＝逆らった〕が、民草はほつと安堵し、方伯に好意を寄せるようになった。なにしろ封臣の騎士輩はもはや民草を虐待・搾取することが許されなくなったからである。

#### 四五三 貴族の畑

さて、かの雄雄しき方伯は民草の側に立ち、その相談役や役人たちの押し付ける賦課を軽減した。この連中について例の鍛冶屋がこう語って聞かせたのである。あの衆は狡賢い狩人で、赤狐——これすなわち金貨のこと——を

己が財布の中に追い込んで、と。配下の貴族たちは挙つて大いに方伯を怨んだ。主君の行為は前代未聞の改悪だ、と思われたので。そこで彼らは反対同盟を結成、もうかようなことには耐えられん、と鳩首談合した。これら従おうとしない封臣たちが自儘気儘に我意を通そうとしている、との密報を受けた方伯は鉄の鎖帷子を着込み、軍勢を率いてフライブルクを見下ろすヌームブルクに進発、叛乱を起こそうと徒党を組んでいた輩を悉く捕らえ、城を見下ろす平地へ連行、そこで彼らに一場の演説を行った。その中で方伯は胸の裡にあることを全て彼らに述べた。いわく。汝らは忠誠の誓いを破つた謀叛人であり、本来なら汝らの首は足許に落ちていたのだ。されど余は、己の家臣たちを殺した、と譏られたくない。汝らに償金を課したくもない。また、汝らが行つたように、臣民の有地を取り上げたくもない。しかしながら処罰せずに釈放はせぬ。さよういたせば、今後余の怒りを汝らがせせら囓う所以となろう。そこで余は後代への戒めとして範例を示すつもりだ、と。そして端綱と頭絡を準備させ、貴族たちを四人一組にして一台の犁に繋いだ。これを操作するのは従者たちで、方伯は農夫のように鞭を持つて後ろから歩きながら貴族たちを駈り立て、長い溝を犁き返した。そして溝が一筋できると、向きを変え、また別の貴族たちを犁に繋ぎ、こうして馬どもを使ったように畑全体を耕した。それから耕地の周囲に大きな石柱の標を置いて永久の記念とし、これを一種の避難所と定めた。その後方伯はこの地所を「貴族の畑」と名付けた。これは今日なおそう呼ばれており、古いヌームブルクの近く、背後の開けた丘の上にある。さて、かようにしたたかに辱めを受けた封臣たちは改めて臣従の誓いを立てねばならなかった。さもなければ主君の怒りが嵐のごとく襲い掛かるに違ひなかつたからである。

## 四五四 生ける城壁

方伯ルートヴィヒが取ったこうした処置についてその後テューリンゲンの邦では論議しきりだった。輓馬にされた者たちは恥じ入ってひっそり吐息をつくばかりだった。その場に居合わせなかつた連中は、そんな侮辱を堪え忍ぶよりいつそ死んだ方が増しだて、と喋喋した。巷間最も悪評を立てられたのは役人たち。どこかの邦で君侯と民草との間に不和・争鬪が発生すると必ずそうだが、彼らは贖罪の山羊となり、全ての責めを負わねばならなかつた。怨恨を募らせて主君の闇討ちを企んだ輩も幾らかある。しかしながら神の御手が方伯を加護し、暗殺者どもは浅ましい最期を遂げた。方伯は常に従者たちを傍に置き、行住坐臥鉄の鎖帷子を身に着けた。このこととその峻厳な仕置きぶりから彼は鉄方伯と添え名された。——この方伯の義兄は帝国最高の世俗君主、すなわちフリードリヒ赤髭帝だった。(33) フリードリヒが程遠からぬ居城キフハウゼンからヌームブルクを訪れたところ、この城にはまだ城壁が繞らされていなかった。(35) 皇帝はこの「新たな城塞」が気に入りはしたものの、「惜しいのう、城壁がないとは。堅く防備を固めるべきであるうに」と言った。「はっは」とルートヴィヒ。「城壁の心配は要りませぬ。欲しければすぐ出来いたしますので」。(36) 「どれほどすぐにかな」と皇帝は訊いた。「三日とは掛かりませぬ」。(37) 「さようなことは誓ってあり得ぬ」と赤髭帝。「よしや帝国中の壁工を集めたとしてもなあ」。——こうした遣り取りの後皇帝は食事に赴いた。すると方伯はすぐさま全邦に急使を送り、武装をこの上もなくきらきらしく調べ、ごく少数の兵をとめない、即刻フライブルクを指して進発するよう、配下の伯爵と貴族たちに下命した。これは封臣たちの服従ぶりを試す良い機会でもあった。彼らもこれに気づき、時刻を違えず挙って参集した。三

日目の夜明け、悉皆しつがい思い通りに準備を終えた方伯は義兄の部屋に行き、「陛下、城壁が完成いたしました」と言った。これを聞いた皇帝は十字を切つて、これには悪魔サマが手を貸したに違いない、と考え、部屋から出て、びつくり仰天した。なにしろ城の周りを甲冑かこうと武具を輝かせた軍兵から成る生きている城壁が囲んでいるのを目の当たりにしたからである。塔のあるべき場所には伯爵が一人位置し、その前には方旗ハナキを護持する旗手が控え、その間に連なっているのは殿輩とのぼらと貴族の面面。爽やかな朝風に色鮮やかな美しい旌旗せいき——シユヴァルツブルク、ケーフェルンブルク、グライヒェン、ホーンシユタイン、シユトールベルク、マンسفエルト、ラインシユタイン、オルラミュンデ、アールンスブルク、バイヒリンゲン、グライスベルク、ロープダブルク等々の伯爵たちの方旗ハナキ、それからアポルダ、ブランケンハイム、ヘルドルンゲン、トレフフルト、クラニヒフェルト、ロイテンベルク等々の夥しい高貴な殿らの軍旗——が翩翩へんぱんとたなびいていた。広大な封土を支配しているわけではないが、堂堂たる城郭を構え、地所をたつぷり持っている無数の下級貴族のそれは言わずもがな。そこで皇帝フリードリヒは叫んだ。「まっこと、朕ちんはかほど高貴で得難い、価値ある堅固な城壁をいまだかつて目にしたことはない。義弟殿、礼を申すぞ。かような城壁を見せてくれたことをな」。

#### 四五五 鉄方伯の葬儀

末期が近づくのを感じながら、ノイエンプルク——かつて周囲を生ける城壁で囲ませた城——で病の床に臥していた鉄方伯デアアアセルネ・ラントラフ ルートヴィヒは、己おのれに叛旗はんきを翻した前歴がある騎士輩ばらと封臣たちの内まだ存命の者を召し寄せ、ように手配し、命が惜しければ、この身が世を去った暁には屍かばねを卿けいらが肩に担いで鄭重ていじゆうにフライブルクからライン

ハルツブルン修道院<sup>(64)</sup>まで運ぶように、と命じた。そこで貴族たちはよんどころなく方伯の手に接吻<sup>くちづけ</sup>してそれを誓い、好むと好まざるとに關わらず実行した。なにせ方伯を畏<sup>おそ</sup>れ憚<sup>はば</sup>ること悪魔より甚<sup>は</sup>だしかつたし、また、もしかして方伯は自分たちを試みて、生きてゐるのに柩<sup>ひつろ</sup>に納<sup>い</sup>まつて運ばせ、運ばなかつたら、柩<sup>ひつろ</sup>から出て来て激怒し、処罰を下すのかも知れない、と考えもしたからである。そこで方伯が逝去すると、忠実に誓言<sup>ちかじま</sup>を遵守<sup>じゆんしゆ</sup>、怯<sup>おび</sup>え戦<sup>いくさ</sup>きながら十哩<sup>マイル</sup>以上の長く遠い道のりを、休み場所<sup>やすみばしよ</sup>で何度も交替して担いで行つた。こうして柩<sup>ひつろ</sup>を教会内に安置すると、方伯の靈魂のために祈りを捧げた。方伯の靈魂には代理祈願<sup>だいりせんげん</sup>が必要、と思つたので。ラインハルツブルン修道院における方伯の葬儀は盛大だつた。ドイツの諸侯が大勢これに参列するためやつて来た。マクデブルク大司教ヴィークマンが方伯のための死者弥撒<sup>みさ</sup>を執り行つた。ルートヴィヒは修道院附属教会の聖なる十字架が飾られた祭壇脇に埋葬され、墓の上には彼の彫像——生前世人が見慣れていた完全に甲冑で身を固めた姿の——が置かれた。

#### 四五六 ラインハルツブルン修道院が保護されたしだい

鉄<sup>デア</sup>方<sup>アイゼルネ</sup>伯<sup>ランツグラーフ</sup>は長男——これまたルートヴィヒという——を後に残したが、この他にもまだ子息が三人——ヘルマン、フリードリヒ、ハインリヒ——がおり、ユツタなる息女<sup>ラントグラーフ</sup>がいた。若き方伯<sup>ラントグラーフ</sup>ルートヴィヒ<sup>(65)</sup>の為人<sup>ひととなり</sup>は、その父親が人間の性悪さと横暴さをとことん思い知らされるまではやはりそうだつたように、穏和かつ善良で、在所の修道院を崇敬し、寄進を惜しまなかつた。本拠<sup>ほんこ</sup>はたいいていヴァルトブルク城<sup>(66)</sup>だつたが、後に皇帝フリードリヒとともにアプリア地方<sup>(64)</sup>に赴いたことがある。この時とばかりザルツァのある殿<sup>(65)</sup>がラインハルツブルン修道院の領地内なるアルテンベルク山上<sup>ベルクフリート</sup>に主塔<sup>ケムナーテ</sup>と煖房居館<sup>(66)</sup>を築き始めた。さて方伯が帰還すると、ラインハルツブルン修道院

長はとある土曜日にこのことを訴えた。すると方伯はただちに最寄りの封臣たちと家人らに通牒を發し、日曜日の早晩にはもう騎士・騎乗兵を従えて修道院に參着、弥撒を聴聞した。それから、自分が部下とともに戻るまで盛儀弥撒に移らぬよう院長に命じると、攻城用具を充分整備した軍勢を引き連れ、静まりかえった森を騎馬で駆け抜け、新城が建っているアルテンベルクにひそやかに登った。城ではザルツアの殿が太平楽にくつろいでいたが、何事も企めぬ内に城は急襲・占領され、自身は部下諸共虜囚となつてラインハルツブルン修道院に連行された。そしてここで盛儀弥撒が始まると、キリスト磔刑像の前を歩み、未来永劫復讐を断念するとの誓いを立てねばならなかった。翌日には城は根こそぎ破却されてしまい、木材と石材は修道院のものとなつた。修道院の坊さんたちはまだ訴え事があった。彼らはかねて極上品を産出するヴェルツブルクで荷車一台分の葡萄酒を購つたが、これをテューリンゲン山地へ運ぶ途中、街道から程遠からぬ城に住むフランケン<sup>(67)</sup>の騎士がこの酒と荷馬車と六頭の輓馬を、それがしも喉が渴いておる、との理由で略取したのである。方伯は告訴を聴くと、この騎士に返還を命じる書を遣わしたが、騎士の方は、へへん、ちゃんちゃらおかしいわ、テューリンゲン方伯とやつの喉を渴かした坊主どもなどおれさまの知つたことか、とせせら笑つた。——しかしある朝、テューリンゲンの旌旗の教数がフランケン騎士の城塞のぐるりに翩翻と靡き、城は取り囲まれて猫の子一匹出入りできなくなつた。方伯自身陣頭に出馬、ラインハルツブルン修道院所有の葡萄酒で喉の渴きを恣に鎮めた廉によりかの騎士を飢え死にさせてくれよう、と誓つた。そこで騎士は百方陳弁にあいつとめ、我が身と憐れな魂を救わねばならぬ仕儀となり、どうすればよろしいかご下命くださいと、と方伯に申し出た。かくして、カノッサにおける皇帝ハインリヒ四世のように馬巢織りの懺悔襯衣を纏い、頸の周りには一本の綱を巻き付け、抜き身の劍の切つ先を喉元にあてがつた騎士は、徒歩で方伯の前に進み出て、命ばかりはご宥恕を、と懇願する羽目になつた。荷馬車と輓馬と葡萄酒は自分自身が馭者兼護衛

になつてラインハルツブルン修道院に返還、これで漸く生命と城を安堵され、その後は別の方法で酒にありつくよう心懸けた。

#### 四五七 魂哭山の話

テューリンゲンの邦の真ん中、ゴータとアイゼナハの間に、遠くから見ると棺桶そっくりの、高く険しい禿げ山がある。この山のすぐ麓まで鉄道が延びていて、ゼッテルシュテットという名の村を分断している。この山はもう大昔から魂哭山と呼ばれた。山の中から異様で不気味な唸り声がよく聞こえるからである。とりわけ突兀と聳える峰の下、アイゼナハに向かって開いている巖の裂け目の傍で。地底を落下する水の轟音と吹き荒ぶ風の吼え声の他に、魂の啼き叫びが聞こえるとされた。それゆえこの山の名はラテン語で啼き叫び山とも。ヘールゼルという小さな溪流の名もこの山に因む。現今、古のヘールゼーレンベルクはヘールゼルベルクと呼ばれる。この山については今日に至るまで不思議な伝説が夥しく伝えられている。山は雷雨停滞帯でもある。周りを大気現象の焰が包んだり、樹木一本ない頂きを稲妻が閃閃と取り囲むことがよくある。かつて晴れた日にアイゼナハ近郊で三本の巨大な火柱が立ち、暫く空中で燃え熾っていたが、次いでくつついたり離れたりし、最後には三本ともヘールゼーレンベルクの胎内に入つて行つた。

昔英国のある王が出自こそ卑賤ではあるが典雅な婦人を配偶にした。その名はラインスヴァイクとかリンスヴィーガとか。間もなく王が亡くなると、ラインスヴァイクは主にして背の君なるひとを深く悼み、王の靈魂が煉獄の火から救われるよう、盛んに祈禱を行わせた。そうしたある夜、彼女は夢うつつの内に背の君の声を耳にし、

背の君の姿を目の当たりにした。そして王が遙かなテューリンゲンの邦のある山の奥底で他の憐れな魂たちと共に苦患を味わっており、海の彼方で彼女が挙げさせている代願も祈禱も役に立っていない、と聞かされた。そこで妃は金銀財宝をありつけたけ持ち、腰元の乙女たちや従者一同を従え、ドイツ目指して渡海した。辿るべき道筋は王の幻影が教えた。やがて妃は緩やかにゴータに向かつて流れ下って行く溪流の畔に着き、そこにささやかな教会と修道院風の家屋を建てた。彼女は自分にも苦悶する魂どもの声がしばしば聞こえると思つたので、そこを悪魔の地と呼んだ。この周りにやがて人人が入植すると、後にゼッテルシュテットとなつた。信仰深い妃はその辺り一帯に更に幾つも礼拝堂を建立、侍女たちと共に熱心に祈りを捧げて神に仕えまいらせたので、とうとう夫の魂をへールゼルベルクの煉獄から救済することができた。やがて彼女が逝去すると、腰元の乙女たちは、ルートヴィヒ・温良方伯の息女アーデルハイト姫がアイゼナハにニコライ修道院を創建していたので、そちらへ引き移り、この修道院でベネディクト派修道女として生涯を終えた。

## 四五八

## 鉄方伯の魂

鉄方伯の子息ルートヴィヒ・温良方伯は、なろうことなら父君の魂がどんな巡り合わせになつていくか知りたいたい、と思つていた。鉄方伯は配下の貴族輩の抑圧から民衆を救つたのだが、その冥福を祈る者はいない、と聞きおよんだからである。なにしろ至れり尽くせりの御仁でも決して民衆に気に入られることなどありやしない。神様ですらその通り。そうした主君の望みのある騎士が宮廷で聞き及んだ。騎士には弟が一人いて、これはアイゼナハで司祭になつており、黒魔術に通曉したのである。そこで兄に命じられた司祭は悪魔を召喚、方伯様の魂

はいずこにおわす、と訊ねた。——悪魔は、おぬしがおれと同行するならば、方伯の魂に会わせてやろう、と言い、身の安全を保証した。司祭が承知すると、悪魔は司祭を背負い、瞬く間にヘールゼーレンベルクの胎内へ直行——というのも遠くまで行く必要はなかったし、こやつ、蒸気機関車よりずっと速かつたから。司祭は責め苦拷問の数を目撃、身の毛がよだつ思いだった。それから悪魔の仲間が坑の一つの金でできた蓋を開け、坑の中目掛けて青銅の喇叭を吹くと、全山、全世界が震動するほど鳴り響いた。すると坑から火花と硫黄蒸気が濛濛と立ち昇り、その後から先代方伯の姿がせり上がって来た。悄然と窶れ果て、さながら影法師同然。そして、自分は修道院や司教座に辛く当たり過ぎた、我が息子は、この身(鉄方伯)が彼らから奪って忠実な家臣たちに与えた領地を返してやらねばならない、そうすればこの身をかかえる苦患から救い出すことになるのだ、と告白した。司祭いわく「やつがれがさような話をお伝えいたしますれば、皆様は、それはそのほうのでつちあげだ、とおっしゃり、そもそも坊主がお供物を返してよこすなんてことがあるのか、とお訊きあそばしましょう」。すると憐れな魂は「余はある秘密を徴としてそちに教えよう。そうすれば彼らは信用いたすであろう」と言った。そしてだれも知らない徴を事細かく告げ終わると、再び坑へと沈められた。その光景に司祭さんは目の前が緑やら黄やらになり、「||目がちらちらし」、悪魔によって元の場所に連れ戻された後も、肌は黄色く皺ばんだままだった。さて司祭は目の当たりにした一部始終を陳述、例の証拠をありのままに呈示したのだが、領地を接収した者たちはそれでも信用せず、これを一向手放そうとしなかった。そして、何もかも嘘つばちさ、ありやあ坊主づくりの悪戯に過ぎん、とそらうそぶいた。——しかしながら司祭はもはや黒魔術に手を染めず、聖職禄と采邑を返上、フォルケンローデ修道院の一修道士となった。

## 四五九 ヴェーヌスの奥方と荒れ狂う同勢の話

ヘールゼーレンベルクの中に異教の女人が呪封されてもいたことは過去の時代でも有名周知だった。この女人はさまざまな人人の前に典雅な魅力の限りを尽くして出現、艶治な愛の魔術を駆使して山の胎内に誘い入れるのであった。そこでフルダと呼ばれた。この妖女はヴェーヌスの奥方、すなわちなべての愛の女神に他ならぬ。上辺は歓楽、実は永劫の苦患に導くため山の奥底に封じ込められているのだ。なにしろ溫柔な悦楽に慣れ親しんでいる当の絶世の美女が酷寒の冬の夜夜、おぞましい形相をした己が情人たちや眷属どもを悉く引き連れ、妖怪と化し怖いホレの姿となって山であれ森であれその上空を、ほほうほいほいと荒れ狂う同勢の物凄い喚声を挙げながら、狩りに猛進して行かねばならなかったのである。自分の頭を小脇に抱えた斬首された者たちも見える。車輪に〔手足を〕編み込まれた連中が、異教の神話のイクシオンさながら、ごろごろ回転。うなじに顔のある者、胸に顔のある者、蛇の尾を付け、蜥蜴の爪を持つ連中も少なくない。一本足で跳ね踊って行く者たちもあれば、物乞いの若者がやるように筋斗返りを打つ者もいる。そしてありとあらゆる野獣や獵犬が狩りに加わっていた。同勢の先頭に立つのは白杖を携えた老人で、行く手で出くわす人人が危ない目に遭わぬよう、道を避ける、脇に寄れ、と命じたもの。これぞ人呼んで忠実なエツカルト。そういうしだいであの言い回しができたのである。「忠実なエツカルトだな、おまえは。だれにでも注意する」。フルダ夫人あるいはヴェーヌスの奥方はヘロディアスと呼ばれることもままある。洗礼者ヨハネの首を要求し、かの歩きづめのユダヤ人のごとく呪われて永遠にさすらう身となったヘロデの娘のことである。雪が降るたびテューリーングンの子どもたちは「ホレのおばさんが羽布団を振るってるんだ」と

言う。配下の魑魅魍魎<sup>ちみもろりょう</sup>どもは彼女の名を取つてフレレンベル<sup>フレンベル</sup>の群れと呼ばれる。やはり荒れ狂う女狩人であるベルタあるいはペルヒタと同様、ホレ夫人はよく働く娘たちには褒美を与え、怠け者は罰する。物臭女<sup>ものくさ</sup>中の下裳<sup>スカト</sup>を引きむしたり、もみくしやにしたりすることもある。忠実なエツカルトは、荒れ狂う同勢が進発しない時には「ヴェーヌスの」洞窟の外に座を占め、神に配置された人間の姿の天使さながら、中に入らないよう諸人に警告する、と信じられている。

#### 四六〇 高貴な騎士タンホイザーの話

テューリンゲンのルートヴィヒ温良<sup>ゲルムイルグ</sup>方伯は十字軍に参加、近東の地で死去し、子どもを残さなかつたので、その封土は弟ヘルマン<sup>(兄)</sup>のものになった。この時代ドイツ諸邦では宮廷恋愛<sup>ミンネザンク</sup>歌が咲き誇り、王侯貴族もこうした歌を詠むのを嗜<sup>たじな</sup>み、またこうした歌を聴くのを好んだ。方伯ヘルマンはヴァルトブルク城に開いた絢爛<sup>けんらん</sup>たる宮廷に大勢の歌人を集めた。これより後のこととなるが、フランケン<sup>クニ</sup>の邦に一人の恋愛<sup>ミンネザンク</sup>歌人がおり、その仲間の多くと同様旅寝暮らしだった。この歌人がヘールゼーレンベルク<sup>クニ</sup>の山裾を通り掛かると、こよなく典雅な女性<sup>にょしょう</sup>が彼を引き留めた。これぞまさにヴェーヌスの奥方自身に他ならず、山の中へ随<sup>つ</sup>いて来るよう招いたのである。かの忠実なエツカルトはやはりそうせぬよう戒めたが、騎士は抗<sup>か</sup>うすべもなく洞窟に入り、ヴェーヌスの奥方<sup>あや</sup>の妖かし<sup>から</sup>に絡め取られて、丸一年というものの山の胎内に滞在したそうなる。やがて騎士タンホイザーは悔恨に襲われ、鬱鬱<sup>うつうつ</sup>と物思いに耽<sup>た</sup>り、山を出て人の世に戻りたい、と熱望するようになった、と古謡の数が歌い、語っている。これを聞いたヴェーヌスの奥方は、誓いのお言葉をお忘れ、と詰<sup>な</sup>つたが、タンホイザーはその麗しいかんばせにじつと見入りながら、そんな

「覚えはない、と言いつ切った。するとヴェーヌスは、他のお相手を差し上げましょう、と申し出たが、こちらは「さような所業に及ぼうなら、一夫多妻の廉かどにより地獄の灼熱の焰ほのおで未来永劫焼かれねばならぬ」と応じた。するとヴェーヌスは高笑いしていわく「どうして今更地獄の灼熱の焰などと他愛ないことをおっしゃるの。このわらわの許もとでよくよくそれを味わったではありませぬか。わらわの紅い唇がいつもいづもそなたに笑い掛けたでしょうに」。

——「こないさかいがまだ暫しばらく続いたが、とうとうタンホイザーはヴェーヌスの奥方から受けた愛と情けの種くまぐまを恩知らずにも忘れ果て、奥方を、女悪魔、と罵ののした。そこで遂にヴェーヌスは腹を立て、そんなことをおっしゃった償いをさせます、と言いつ放った。タンホイザーが、この女から我が身を救いたまえ、と聖母マリアに大声で祈ると、ヴェーヌスの奥方は毅然きぜんとして、それではどこへなりともおいでなさい、あの老人〔「忠実なエツカルト」に暇乞いをなさるがよろしい、と告げた。タンホイザーは悔恨かいこんに苛いらまれながらヴェーヌスの山ヤマを出て、ローマなる教皇ウルバヌスのところへ巡礼の旅をし、自らの罪業を懺悔ざんげ、ヴェーヌスという女人の許もとで一年間過すごしたことを打ち明けた。教皇はローマ二重十字架の付いた法杖を手に取り、悔やんで止まぬ恋愛愛歌人に向かつて、悪魔の愛顧あいこんを蒙まもつたそちが、神の愛顧を享うけけられるくらいなら、この乾涸ひからびた杖が緑滴りょくたる葉を付けようぞ、と言いつ渡した。

——タンホイザーは、何年でもけっこうですから贖罪じやくざいを課かしてくださいまし、と懇願こんがんしたが、徒勞とらうに終わった。そこで懊惱おうぼうに満ち満ちて再び永遠の都ローマを後にし、教皇の厳しい宣告せんこが天界の麗人たるマリア様から自分を永久とこしよに引き離れた、神は自分を迎え入れてくださらないのだ、と悲嘆ひたんに昏くれ、我と我が身を呪ののってヘールゼーレンベルクなるヴェーヌスの奥方の許もとに引き返した。ヴェーヌスは待ち受けており、高笑いして文字通り悪魔のように騎士を嘲弄ちょうりやう、「まあようこそ、タンホイザー様、愛いとしのあなた。いらつしやらないので寂さびしくてなりませんでしたわ。わらわの可愛い、可愛い色男さん」と言葉ことばを掛けると、もう一度哄笑こうしょう、洞門どうもんを開き彼を山の胎内たいない深く拉らし去った。

ところが、三日後、教皇の杖が緑の葉を付け始めた。そこで教皇はタンホイザーが立ち寄りそうなありとあらゆる邦へ使者を遣わしたものの、騎士は邪な情人の棲処に戻っていたのだ。それゆえ教皇ウルバヌス四世も永劫に呪われることになった。古いタンホイザーの歌の結びにこうあるように。

かくて教皇ウルバン四世、

これまた永遠に破滅する羽目。

さればこういふしだい。この御仁自身、教皇になる前、リュツティヒ司教区でエーファという女と、彼女が迷信から無為の裡に閉じ籠もっている庵で殊の外親密な語らいに耽り、女への愛のためにご聖体の祝いを司つてやったもの。また三年もの間激しい流血への渴望に駆られ皇帝党と教皇党を互いにけしかけた。また蝗の王さながらの托鉢修道会諸派にこの上ない自由を賦与した。三箇月に亘り異様に巨きな彗星が夜毎不気味に空に輝き、教皇ウルバヌス四世が死んだ夜、現れなくなった。

#### 四六一 ちいぢやな帽子小人

ヘールゼーレンベルクの山陰の村に帽子小人たちがいる。彼らはちいぢやな家精ですこぶる人間の役に立つてくれる。けれどもすぐに痲癩を起すきらいがあった。ある農夫の百姓屋敷にもう何年もこうした帽子小人が一人棲み着いていた。見えないようにして仕事を手伝うのだが、姿を現すこともときどきあった。農夫の富はみるみ

る増えたが、持てる者ほどもうこれで充分ということがないのがおおよその通例で、この農夫もご多分に洩れずそうだった。ある時農夫はちいぢやな帽子小人ヒュートヒュートがせつせつせつと体を動かし、一本の長い麦藁わらをおつそろしく重たそうに大骨折つて屋根裏への階段を引き揚げているのを見た。農夫はこんな無駄で役に立たない仕事に腹を立て、「こりやまた何をやつとるんだ、このろくでなしの役立たず」とがみがみ怒鳴りつけた。——途端にちいぢやな帽子小人は消えてしまったが、階段には男が四人がかりで運ぶのがやつとのでつかい穀物袋が転がっていた。これすなわち藁しべの正体だったのである。帽子小人はその後もはや二度と姿を見せず物音も聞かせなかった。そして暫くすると、金持ち農夫の家はぎつしり詰まった穀物納屋もろとも火事で焼けてしまい、家畜たちはばたばた斃死へいじした。農夫はありとあらゆる不幸に見舞われて零落し、赤貧の境涯になった。

#### 四六二 ヴァルトブルクの合戦

方伯ヘルマンと方伯妃ゾフィーエが宮廷を開いているヴァルトブルク城に、一二〇六年、名人上手で聞こえた宮廷恋愛歌人が群れ集った。すなわち、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ(88)、ラインハルト・フォン・ツヴェッツェン(89)またの名ライマール・ツヴェーター(90)、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ(91)、ハインリヒ・フォン・オプターディング(92)、名匠ピテロルフ(93)、そして徳高き書記と添え名されたハインリヒ・フォン・リスバハ(94)である。この最後の御仁は方伯の尚書で騎士でもあった。これら六名は互いに歌競くわべを行うことにした。彼らは、諸君侯、とりわけ客もてなしの篤いテューリンゲン方伯ヘルマン、ヘンネベルク伯ポツポや賢明伯ヘルマン、それからまた「矢ミスト、デム、ファイを持てる」と添え名されたブランデンブルク辺境伯オットー四世——自身宮廷恋愛歌人だった——

の頌歌を作った。ヴォルフラム・フォン・エツシエンバハとハインリヒ・フォン・リスバハを騎士に叙任、軍馬と戎衣を下賜したヘンネベルクの伯爵たちは格別な存在で、右のハインリヒ、ピテロルフ、ヴォルフラム・フォン・エツシエンバハはこの人たちを讃えた。ハインリヒ・フォン・リスバハはテューリングン方伯をも褒めそやした。しかしながらオーストリア人(もつとも古文獻の数はアイゼナハ市民としている)にして、かつ、多くがかの誉れ高きニーベルンゲンの歌の作り主と信じているハインリヒ・フォン・オフターディングンはオーストリア公レオポルトを讃美、爾余の君侯にいや増す存在であり、その輝きは星星の前の日輪のごとし、と詠唱した。かくして歌合戦は深刻激越となり、歌人たちは、敗者は刑吏の手に掛かって死ぬこととする、と決するに至った。一同はハインリヒ・フォン・オフターディングンに瞋恚の焰を燃やし、テューリングンの宮廷から消えてなくなれ、と思つたのである。そこで全員がこの一人を相手取つて歌合戦をしたので、遂に彼は敗北した。追われた歌人が纏つた方伯妃だけが、助命を懇願して足許にくずおれた歌人を纏つていた外套で覆つて庇つた。ハインリヒ・フォン・オフターディングンは一年の猶子を乞ひ、この地を旅立ち、自分よりえらい名匠を連れて来て、その人に審判を委ねたい、と言つた。より優れた名匠とは宮廷恋愛歌人にして同時に魔法使いである世にも名高いハンガリアのクリンゾルのことだつた。オフターディングンはヴァルトブルクを出発、彼が讃美したオーストリア公の許を目指し、更にそこからジーベンビュルゲンのクリンゾルのところに向かつた。クリンゾルはテューリングンへの同行を承諾し、オフターディングンを滞在させ、詩作、詠唱、その他もろもろの気晴らしで時を費やした。こうしていつの間やらその歳も暮れ、とうとうオフターディングンは、期限までにはヴァルトブルクへ戻れないのでは、と心配になつた。そこでクリンゾルに哀訴すると、クリンゾルは安心するよう慰めて「我らには遅しい馬どもと軽駕の用意がある。必ず間に合う」と言い、日が暮れると眠り薬を飲ませ、寝込んだ相手を革の敷物に横たえ、自分もそ

れに乗ると、駆使する精霊たちに命じ夜を籠めてアイゼナハの最上の旅籠はたごに静静と運ばせた。当時これは半月屋ツキグサや芸香花環亭ゲイカクワエンテイではなくて、聖ゲオルク門ゲオルクメンの左側（町を出る場合）にあったヘレグラーフエン館ヘレグラーフエンカウだった。物見塔の見張り番が喇叭らっぱの吹鳴で夜明けを告げると、オフターディングンは目を覚まし、早朝弥撒ミサへと誘いざなう聖ゲオルク教会の鐘の音を聞き、「わたしはいつたいどうしたのだろう。聞こえるのはあの鐘か。わたしはアイゼナハにいるような。あれは聖ユルゲン門ザンクトユルゲンメンではないか」と叫んだ。クリンゾルはにっこりして「なあ、きみ、きみは夢を見ているわけではないよ」と言った。二人の名匠歌人マイスターシンガー来着の知らせがヴァルトブルク城に届くと、歌人たちは打ち揃そろって町へ挨拶に降りて来て、それから一緒に城へ上った。二人は方伯夫妻と宮廷人に盛大な歓迎を受けた。

#### 四六三 名匠クリンゾルの星占い

アイゼナハの町に泊まっていた名匠クリンゾルマイスターがある晩宿の庭すわに坐すわっていたところ、晩酌を愉たのしもうとやって来た方伯の宮廷に仕える人人やアイゼナハの名士たちが、遠国おんこくの種種しゆしゆの逸事を聞かせてくれ、星占いで読み取った新事実を心得ている歌人に懇たごろに挨拶し、競まってその周りを囲んだ。そしてまたしても、耳寄りの話を教えて欲しい、と頼んだもの。そこでクリンゾルは一同からいくらか離れて星空を仰ぎ見、戻もって来て、こう告げた。「今宵、我が殿、ハンガリア王アンドレーアスに姫君がご誕生あそばし、いずれおてまえがたのご主君、方伯様のご子息と婚約なさるでござろう。してまたこの姫君は聖女となられ、その誉れはあらゆるキリスト教国あまねに遍あまく弘ひろまることとあいなりましよう」と。——この報せが方伯および方伯妃の許もとにも齎もたらされると、夫妻は御感斜ぎよかんめならず、改めてクリンゾルをヴァルトブルク城での饗宴うたげに招いた。宴が果はてると、諸侯、諸卿、歌人うたびとたちは、クリンゾルに歌人たち

の争いを調停してもらおうとそそり立つ居館パラスに赴いた。ハンガリアの名匠マイスターはこれをうまく成し遂げたが、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハとの歌合戦は容易ではなかったので、クリンゾルは自身の代理に精を一柱——名をナジアスといった——召喚した。ヴォルフラムはこの精に対しても独り敢然と立ち向かい、天界に関する崇高な事柄についても至極通曉しているところを見せた。そこで精は胃かむを脱だがざるを得なくなり、これに驚嘆したクリンゾルは、ヴォルフラムは騎士歌人ではなく、実は司祭なのではあるまいか、と疑った。ヴォルフラムはやはりアイゼナハの町の麵麩プロイトマルクト市場に面した市民ティツエル・ゴットシャルクの家に逗留とまりしていたので、クリンゾルは夜更けにもう一度使役精ナジアスを送り込んだ。見るからにおぞましい風貌のナジアスはヴォルフラムに幾つも大変な難問を出したので、こちらは解答できず、口を嚙つかんでしまった。すると精は悪魔のように大笑いし、指先で壁石の一つにそれがさながら柔らかな蠟ろうであるかのようにこう書き込んで、消え失せた。

きさまは無学な物知らず(96)

この字は壁に刻まれたままとなり、夜ともなると火のように赤赤と輝いたので、この家へ我も我もと野次馬が押し寄せ、ぜひとも石を見ようとした。家の持ち主のゴットシャルクはこれに腹を立て、壁を壊して石を取り出し、ヘールゼル川(97)に投げ捨てた。

歌人たちに仲直りさせたクリンゾルは方伯シュツツに暇乞いをし、数数の被け物かづを頂戴ちやうだいして城をあとし、再び例の革の敷物に乗って元の土地へと飛び去った。

四六四 ハンガリアからやって来た小さな許嫁いよめ

テューリンゲン方伯ヘルマンと方伯妃ゾフィーエの若君——その名はルートヴィヒ——が十一歳、ハンガリア王安ドレーアスの姫君が四歳になると、方伯夫妻はハンガリアに使節団を派遣、穉い王女を子息の配偶に、と申し入れた。この使節団はやんごとない身分の諸卿、上臈、令嬢がた、および扈從の面面相成り、四輜の馬車に分乗、四十頭の馬匹を持つて行つた。ハンガリア王の宮廷に到着すると、一行はいとも豪華なもてなしを受けた。縁談を持ちかけられた王は名匠クリンゾルに方伯の宮廷、方伯の若君、そして方伯領について諮問した。独自の観照力で全てをよくよく心得ていたクリンゾルが方伯の宮廷、領土、領民を褒めそやしたので、ハンガリア王と王妃は心動かされて、結婚の承諾に踏み切つた。もつともそうなることはクリンゾルが天界の定めとしてかねて星図から読み取っていたのである。けれども使節団はその他にまだ殊の外重要な用命を帯びていた。これは彼らの主君夫妻の際だった思慮分別の証となるもの。すなわち夫妻は、我らが子息の幼い許嫁にして未来の花嫁御寮をハンガリア流ではなくドイツ流に育て上げたい、との希望だったのである。これは後世のドイツ諸侯の弊風とは正反対。あの方方と来た日には、子女にフランス式の教育を受けさせるものだから、その結果彼ら彼女らは異国の容儀を金科玉条と心得、おのが祖国をふふんと鼻であしらうに至るのだ。さて、ハンガリア王と王妃は、方伯夫妻のこうした願いは尤も至極、と考へた。なにしろ一国の主となりたければ、その国をよく識り、愛することが不可欠。して新たな故郷に対する愛情は一夜の内にひよいと芽生えるのではなく、徐徐に養われ育まれるものだからだ。そこで王女の双親はこれも承諾、夥しい嫁資を持たせ、無数のきらびやかな供回りを付けて、可愛い小さなエルジエーベトを

手放した。テューリンゲンの使節団は四輦の馬車でやって来たのだが、テューリンゲンに戻った時は十三輦を連ね、方伯への贈り物である壮麗な什器じぶきを積んだたくさんの駿馬を伴っていた。というのはお互いに多くの馬を贈り合うのが往昔の君侯や民草の習慣だったからである。たとえばかのテューリンゲン王イルミンフリートないしヘルミンフリート(註)は、アマルバーガに求婚する際、東ゴート王(テオデリヒ)に高価な雪白の駒を少なからぬ数贈っている。今日では馬を一頭ないし二頭献呈すれば、まあ大層な、と驚嘆されるが——。さて、小さな許嫁が教え切れない従者と共にアイゼナハに到着すると、ヴァルトブルク城では大喜び、方伯と方伯の奥方、それからその宮廷の人人は挙げて町に降りて来た。そして王女を歓迎、盛大にお祝いすると、さながら凱旋行列がいせんのように山上の館へと連れて登った。

#### 四六五 聖女エリーザベト

王女エリーザベトはヴァルトブルク城でいとも典雅、敬虔けいけん、徳高く生い育ち、衆人の喜びとなった。彼女の婚約者である方伯の若殿も同様。こちらは早くに父君を亡くし、家督を継ぎ、許嫁いよめをますます愛するようになった。もっともエリーザベトはその信心深さと謙讓さのゆえに嘲り譏そしりを堪え忍ばねばならないことも少なくなかった。これについては頗る多くの話が伝えられている。方伯がエリーザベトと華燭かしよくの典を挙げた時、二人の高貴なテューリンゲンの騎士——かつて彼女をハンガリアの地からテューリンゲンへと連れ帰ったミュールベルク伯ラインハルトとファルグーラ騎士ヴァルター——がこの上もなく絢爛豪華な宝飾をつけた乙女を聖ゲオルク教会に導いたのだが、若妻となった敬虔な方伯妃は、おそらくはその夫があらまほしく思う以上に慈善事業や贖罪しよざいに打ち込み、極上

の衣装の数を切りこまざるか、あるいは人にやってしまい、行住坐臥ぎょうじゅうざが、簡素かんそで見窄みすぼらしい恰好かっこうで過すごしたのも。もつとも必要とあらば、神ご自身みづかみが彼女に豪奢ごうしゃな身なりをさせたもうたが。

敬虔な方伯妃エリーザベトは窮民たちの真の母ともいふべき存在で、全く度が過ぎるほど惜しみなく喜捨きせつを与えた。そこでかかることですらあれこれあげつらい、非難する連中が出た。さてひどい時世が到来、見る見るうちに困苦欠乏が拡がり、貧民の群れが膨れ上がったことがある。そうした折エリーザベトは、日頃と同様、食物と施物を携えて、蹇者あじなえや瞽者こしゃなど困窮した民衆が集まる場所へ出掛けた。その途中方伯にばったり出逢った。方伯はこのたびは厳しい表情だった。お妃様はなにかも恵んでおしまいあまで、と讒訴ざんそされたばかりだったからである。方伯は穏やかとはいえない口調で「そなた、何を運んでいるのだ」と声を掛けた。その様子に不機嫌の暗雲が垂れ込めているのに気付いた妃は震え上がり、かほそい声で「薔薇ばらでございます、御前ごぜん」と呟つぶやいた。「見せなさい」と方伯は怒鳴り、籠の覆いをまくった。すると、なんと、籠には薔薇ばらその他咲き誇る花花が一杯入っているだけだった。そこで方伯は羞然しゅうぜんとして立ちすくんだらしい。それからというものの、召使いのだれかれがまたしても奥方の優しい気前の良さを悪し様あつさまに告げ口に来ると、方伯はこう応えるのだった。「あれのよいようにやらせておけ。あれは施しをするのが楽しくてならぬのだから。ヴァルトブルクとアイゼナハとニウヴェンブルクをやってしまったとなれば別だが」。このやんごとなく敬神の念篤い喜捨者の手を経ると全ての施物がなんとも不思議なことに嵩かさを増すのだった。身に纏まとう衣装もまた濡れたり損じたりすることはなかった。方伯ルートヴィヒの妹アグネスがオーストリア公と婚儀を挙げた時、ヴァルトブルク城は賓客で満ち満ち、だれもかれもが晴れ衣装で着飾っていた。ところがエリーザベトは城門の傍らを窮迫した哀れな老翁ろうやうが一人、半裸でうろついているのを目にした。この年寄り、露わな肌を覆う着物をなんぞくださいまし、とせがんだのである。そこで方伯妃は纏まとっていた外衣アウゼントを与えた。と、すぐ

宴席に就くことになったので、方伯は奥方に「そなた、外衣はいかがいたしました」と訊いた。——祝祭の折には軽い外衣を羽織るのが当時の上臈衆の慣わしだったので。どきりとした奥方は低声で「お部屋にございます」と返答した。そこで方伯がお付きの乙女の一人を取りにやると、なんと、王妃の御衣などよりも美しい、金糸で縫い取った細かい図柄を一面に鏤めた紺碧の外衣が部屋に吊されていた。物乞いの老人の姿はもう見えなかった。こんなこともあった。エリーザベトが癩風患者を介添えして居館内にともない、自分たちの寝台に寝かせてやったのである。お蔭で彼女の姑——もう食欲なんでもあらばこそ——の許では嫁女に対して一大物議が持ち上がった。ところが、この病人を抛り出そうと城の者どもがやって来ると、夫妻の床に横たわっていたのはこよなく巧を凝らした素晴らしく美しいキリスト磔刑像だった。これは残念ながら今日ではもはやヴァルトブルク城には遺されていない。これを目の当たりにして、いやがうえにも敬虔な妻の敬虔な夫は熱い涙を流した。さて、エリーザベトが懇ろに看病した病人の名はエリといい、やがて病が癒えると、その後更に長い間ヴァルトブルク近傍のごく狭い巖穴で暮らし、森棲まいの隠者の食べ物として知られた草や根っこで命を繋いだ。この洞窟はいまだにある。

ある日、アイゼナハの教会に参詣した優しいお妃は、教会の玄関の前で一群の物乞いに取り囲まれた。彼女は施せる物があるうちは恵んでいたが、その内とうとう所持の貨幣が底をついてしまった。しかしつこい老いた貧民が一人、喜捨をせがんで止まず、教会の中まで追って来て付き纏った。そこで鷹揚な奥方は、かわいそうに、と銀糸で刺繍した手袋の片方を外して、頑として引き下らない執拗な年寄りに差し出した。丁度教会に入って来た一人の騎士がこれを見て急いで歩み寄り、その手袋の代償として多額の金子を老人にやった。その後騎士はその手袋を胃飾りとして己が胃にしっかりと付け、聖地へと出征、かの地で雄雄しく闘った。手袋は護符のように彼を守護したので、無事に故国へ帰還することができた。以来騎士はエリーザベトの手袋を紋章に描き入れたのである。

神の嘉よしたもう聖なる生涯を送った信心深い方伯妃エリーザベトの行いと奇蹟は数数の書物にぎつしりと記されている。それゆえ、彼女は死後聖人に列せられた。

#### 四六六 聖者方伯デア・ハイリゲルトヴィヒ

いとも若年にしてもテューリンゲン邦の支配権を継承した方伯ルトヴィヒ(伯)は敬虔けいけんかつ善良、その気象は配偶のエリーザベトの崇高な性格とおおかたのことで一致した。また妻に対して黄金のごとく誠実を守り、誘惑に駈かられて不貞を働くことはなかった。こうした点に掛けてはあの頃も当節と違いはなく、よりご立派というわけではなかったのだが。温良篤信ではあってもこの君侯は法の守護者としては峻厳しんげんであり、常日頃細民らを擁護、慰藉いじしを与えた。ある貧しい小間物商人が自由通行権(伯)を申請すると、これを下付したばかりか、テューリンゲンの全ての市町村で関税免除(伯)にしてやった。そして「そちは自分の小間物をいくらと見積もるな」とにこやかに訊たずねた。小間物屋が「殿、十シリングでございます、一切合財で」と答えると、「さようか」と方伯。「それでは協同で商いをいたそうではないか。そちには十シリング分の品物がある。余は現金で十シリング出す。そちは商いに努める。で、儲もちけが出たら余は半分貰もらう。そちが損をしたら、余はその分を償たごうてやる」。恩恵を授かった男は欣然として旅に出た。商売は繁盛、結構な利益が上がると、正直に勘定を付けた。品物の仕込みもますます増やすことができたので、全部を自分の背で運ぶわけには行かなくなり、驢馬ろまを一頭手に入れると、これを連れてヴェネチアにまで脚を伸ばし、かの地で硝子類ガラス、金属器具、象牙製品象牙、珊瑚細工さんご、さてはまた指環ゆびわ、真珠、宝石といった値打物を買ったり交換したりで手に入れ、再び故郷に引き返すと、ドイツの都市から都市へと行商して歩いた。こうして司教のお

膝元ヴェルツブルクにもやって来たところ、金を払わずに物をせしめるのが好きという数人のフランケン(10)の騎士が件の豊かな小間物に目を附けた。彼らは道中で積荷ごと驢馬を没収、テューリンゲン方伯発行の自由通行証も行人が身に付けていた方伯のお仕着せも尊重しなかった。かくして小間物商人はしょんぼりと帰郷、殿様にこの不法行為を訴えると、方伯は言った。「まあ待つておれ、相棒、余はきつと我らの驢馬と品物を取り戻してみせる」。そしてただちに部下の將兵に出動を命じ、即時「ヴェルツブルク」司教に私闘を宣言、フランケン地方にさながら電風のごとく突入し——ためにもちろん数多くの無辜の民がひどい目に遭わざるをえなかったのであるが——、司教に「余は余の驢馬を搜索中なり」と伝えた。かくして例のフランケン(11)の騎士たちは——以前この連中の先駈けともいふべきあの御仁がルートヴィヒの伯父に葡萄酒を返却したように——驢馬と商品を返却し、更に方伯および司教の臣下に損害賠償をしなければならなかった。

この方伯は大商人たちに関わる案件でも——臣下の大商人たちが拘留されたので——軍を率いてポーランドへ進攻、かの地でルブシユ城を占領、破却したことがある。

方伯ルートヴィヒの妹アグネスがオーストリア公と結婚した時、オーストリア公は義兄への珍奇な贈り物として一頭の生きた巨大な獅子(12)を土産に持参した。この獅子は、当節狐などをそうするように、ヴァルトブルク城の中庭で養われることになった。ところがある日の早暁こんな事件が起こった。方伯が——祈りを捧げるためか、清しい黎明を楽しむためか——軽羅を纏っただけの全くの丸腰で中庭に降り立ったところ、かの恐ろしい獅子がのんびり自由の身で不意に方伯の前に現れたのである。番人が迂闊にも檻の扉にちゃんと錠を下ろしておかなかったの(13)で、獅子はこれまた、清しい大気を味わおう、かなんかで外へ出て来たしたい。尊貴な両者——片や百獣の王、片やテューリンゲン方伯——は相對峙して、互いに見交わす顔と顔となったが、方伯が毅然たる勇氣を示し、拳骨

を相手に振り付け、きつく怒鳴りつけた。すると獅子はびっくり仰天、地面に這いつくばり、尻尾をパタパタ振った。主君の叫びに辺りは騒然となり、獅子がよく馴染んでいる番人が駈けつけて、猛獣を檻に戻した。——これは、方伯が約束の地〔＝聖地＝パレスティナ〕への渡航を企て、遂に帰還することはなく、聖女エリーザベトの大層な苦惱、不幸が始まった一年前のことである。

#### 四六七 ゴファイアの手袋

方伯ルートヴィヒが聖地へ向かう途次没し、聖女エリーザベトがその子どもらもとも義弟ハインリヒ・ラスベにより恥知らずにも追放され（だからといってハインリヒ・ラスベがその後盛運に恵まれたわけではない。三人も配偶者を持ったのに嗣子無しに終わったので）、それから彼自身も物故してしまうと、テューリングン＝ヘッセン邦の主権を争って一大抗争が勃発した。聖女エリーザベトの長女ゴファイアはブラバント公に嫁いでおり、公との間に息が一人あつたが、既に寡婦となつていた。彼女は息を養育するために彼女の母堂が受け継ぐべきだつた遺領を正当に要求したのである。一方、聖者方伯ルートヴィヒとハインリヒ・ラスベの姉の一人ユッタはマイゼン辺境伯ハインリヒ高貴伯を配偶としていたのであるが、このハインリヒが自分と自分の嗣子のためにテューリングン邦を既に領有してしまつた。ゴファイアはヘッセン邦に赴き、強力な支持者を獲得した。加えて神聖ローマ皇帝空位時代であり、これに乗じて擾乱しきり。特にテューリングンではそうだった。そこでアイゼナハで和議が開かれることになった。交渉にはハインリヒとゴファイアがみずから現れ、この件については今後選出される神聖ローマ皇帝が、テューリングン方伯の息女の子息ないし姉の子息のいずれが方伯領相続により権利を有するか、決

定するに委せよう、と双方意見が一致しそうになった。すると主馬頭(しゅまのかみ)ヘルヴィーク・フォン・シュロートハイム(シュ)ならびに幾人かの他のテューリンゲンの貴族らがハインリヒ高貴伯に向かつてこう進言した。「殿、過分のお約束はご無用。さようなことですと、殿は片足を天に、もう片足をヴァルトブルクに置くことになられますぞ。片足を天から下ろし、ヴァルトブルクを両足揃(そろ)えてお踏まえにならねば」。——そこでハインリヒは、改めて熟考を、と退席、その後聖女エリーザベトの肋骨にかけて二十人の宣誓補助人(し)とともに、余はテューリンゲンに領有権を持つ、と誓った。そこでブラバント公妃は怒りの涙を流し、片方の手袋を外すと、これを空高く抛(ほう)り上げて叫んだ。「取るがよい、あらゆる正義の敵たる汝(なんぢ)——汝と申すは悪魔めのこと、汝この手袋を取れ(し)。更にまやかし者の相談役ども皆もな」。この手袋は再び空から落ちてこなかった。それからかの相談役たちや宣誓補助人らのいずれもがまともな死に方をしなかつたそう。彼らが聖なる遺骨を冒瀆(ぼうとく)し、あのような誓いを立てたからである。かくして救いようのない戦役が勃発、テューリンゲン全土が破滅した。ある時ブラバント公妃は再びアイゼナハに入市しようとしたが、市門は開かれなかつた(し)。そこで公妃は斧(おの)を手に取り、ゲオルク門(ゲオルクゲントア)の柏(かしわ)でできた門扉に数度打ち込んだので、その傷痕は二百年後に至つてもまだ見られた。この戦役で辺境伯ハインリヒはフランケンシュタイン一族の美しい古城ミッテルシュタインおよびヴァルトブルク城周辺の他の数城を破却したし、それから忠誠かつ法律に通じたある市参事——その名はハインリヒ・フェルスバハ(し)——が頑強に彼に逆らつたので、これを虜囚(とりこ)にすると、大きな投石機を用いて空中高くアイゼナハへと投げ込んだ。弩砲(どほう)から舞い上がったこの男は高潔にもなお「テューリンゲンはどうしたつてブラバントの子どものもんだあ」と叫び、それはだれにも聞こえた。——戦役は九年間にも亘(わた)つて続いたが、結局のところ、戦争などしなくても一致し得たであろう結果、すなわちテューリンゲンとヘッセンの分け合いということで落ち着いた。ヘッセンはゾフィーアの子息——ブラバントの子ども——に帰属、従つて

この人が初代ヘッセン方伯、以降のヘッセンの君主全ての始祖となった。一方何人もの子息のいた高貴伯ハインリヒは、自分と次男デイトリヒのためマイセン辺境伯領を保持、総領アルブレヒトにテューリンゲン方伯領を与えた。

#### 四六八 頬に噛みつく

ハインリヒ高貴伯の子息アルブレヒトは皇帝フリードリヒ二世の息女マルガレーテを妃に迎えた。かくして長く続いた戦争の騒乱の後漸くヴァルトブルク城に祝祭のさんざめきが反響した。しかしながらうら若き方伯妃は夫に何人もの子息を与えたにも関わらず、美しい女官という形で家に不幸を持ち込んでしまった。この乙女は辺境伯にして方伯の大のお気に入りとなり、それがいや増す内、とうとう不義の兩人は卑劣な裏切りを計画、マルガレーテを抹殺しようとした。城の驢馬を使役してアイゼナハの町から諸種の必需品をヴァルトブルクへ運び上げる下僕が秘かに命じられ、化け物の装いをして夜方伯妃の部屋に入り込み、彼女の頸を折ることになった。男はだれにもこの企みを洩らさない、と誓わされた。しかし下僕は良心に苛まれ、ただもう優しい奥方と敬うばかりの、宮廷ではごく下っ端の自分のような下僕風情にもこやかに挨拶してくれる、何の罪もない無防備な女性を、寝入っている時に殺害するなどという非道極まる言語道断の所業をやつてのけられようとは思えず、長いことためらい、とつおいつ考え続けた。これに気付いた方伯はある晩遠回しに、しかし厳しく「そのほう、余が指図した刈り入れは済ませたか」と詰問した。狼狽した下僕は「殿、済ませるつもりでござります」と応えた。そして内心「こうしなげりやならん——神の思し召のままに」と考えた。さて夜も更け渡ると、男は方伯妃がたつた独りで眠っている

寢室に入り、寢台の傍らに跪き、「奥方様、命ばかりはお助けくださいませ」と呼び掛けた。マルガレーテはびつくりして目を覚まし、「だれじゃ、そちは何者じゃ」と訊ねた。——そこで下僕が洗いざらい打ち明けると、方伯妃はこの上もなく愕然としたが、気を引き締めて「急いで家令の献酌侍従ルードルフ・フォン・ヴァルグラをここへ呼んでまいれ」と言った。下僕が言われた通りにしている間、マルガレーテは臥床から跳び起き、急いで身仕舞いをした。献酌侍従が参上すると、奥方は激しく涙を流しながら、どうしたらよいか、と問うた。そこでフォン・ヴァルグラは「お運びになれる宝飾品と金子をお纏めください」と手短かに告げ、次いでごく秘やかに奥方の女官頭と女官の一人を起こした。彼女たちは急いで寝間着と敷布を長く帯状に切り、これらを結び合わせることにした。それからマルガレーテは主塔の脇にある彩色された館——ここに彼女の息子たちフリードリヒとデーヴィンマンがやすんでいた——へ上がって行き、彼らの寢台に身を投げると、熱い涙を降り注ぎつつ二人に接吻し、愛しさで激しい苦惱がこみあげるまま長男のフリードリヒの片頬に血が出るほどに噛みついた。それから二番目にも覆い被さり、同じことをしようとしたが、献酌侍従がこれ押し留めた。すると彼女は泣きじゃくりながら「わらわは、この子たちが生涯この別れを忘れぬように徴を附けたのです」と言い、子息たち——フリードリヒは三歳、デーヴィンマンは一歳半——に心から辛い辛い別れを告げ、例の下僕と二人の婦人ともども現在の騎士の館——これは城の外郭にあり、今は司令官の宿舎になっている——沿いの歩廊にある窓の一つから出て、暗夜を幸い高く陰しい城壁を吊り下ろしてもらい、更にこごしい巖山を攀じ降り、逃げ延びた。それから南西に向かって広大な森を夜もすがら抜け、白白明けにザルツング近郊のクラインベルク城に辿り着いた。これはフランケンシュタインの殿たちに帰属していたが、当時は半ばがヘルスフェルト修道院長のものでもあった。城の者は一行を迎え入れ、それからフルダなる修道院長の許へ護衛を付けて送り届けた。修道院長は皇妃の尚書長官だったので、皇帝の姫君をこ

の上もなく鄭重ていじゆうにもてなし、護衛を付けてフランクフルトのある女子修道院に送り届けた。彼女はそこでもうその翌年懊惱おうれう心痛のため死去した。

#### 四六九 噛かまれ傷のフリードリヒの洗礼騎行

アルブレヒトデア・エントアルテろくでなし方伯の不実極まる所業の結果、テューリンゲンの邦くににいかなる鬭争、戦役、不幸が起こったか、まことにもって筆舌に尽くし難い。なぜならマルガレーテの子息たちは、成年に達すると父親に刃向かい、父親も子息たちに戦端を開いたからである。方伯アルブレヒトはその寵妾と結婚、邦を正当な子息たちから取り上げ、私生児のアピッツ(10)に授けようとした。一度は長子を虜囚とりことしてヴァルトブルク城の塔に長いこと閉じ込めさせたが、彼は結局秘かに助け出された。とうとうアルブレヒトはテューリンゲン全邦を皇帝アドルフ・フォン・ナツサウ(10)に二万銀マルクで売り渡した。若い辺境伯ら(「フリードリヒたち」)は騎士階級総すべてとともに皇帝に對抗、こうして苛烈な戦乱が新たに幾つも勃発、皇帝軍はテューリンゲンで略奪暴行の限りを尽くした。こうした軍勢の一部がラステンベルクで修道院を破却し、修道女たちを辱め、その報復としてテューリンゲンやヘッセンの人人に去勢された顛末てんまつを歌った古謡が今に伝えられている。そうこうする内、アルブレヒトの寵妾クンネ・フォン・アイゼンベルク(10)が死に、その子アピッツも同年母の後を追った。するとアルブレヒトは息子たちへの面当てにアルンスハウク伯の裕福な寡婦かアーデルハイトとだけ早く結婚した。この寡婦には娘が一人いるだけ、名をエリーザベトといい、こちらは父親の城に留まっていた。年齢としは十四、大層淑やかで優雅な乙女だった。頬に噛まれ傷のあるフリードリヒ(10)はこの娘に一目惚れし、暫しばくすると不意に拐かどかしてゴータにある自城、要害堅固なグリーンメ

ンシュタイン城に連れて行き、エリーザベトを妻に迎えたい、と継母に手紙を書いた。なにせ、その身が既にフリードリヒの手中にあること、エリーザベトとの結婚が拒まれようはずもなく、フリードリヒはかくして両親の義理の息子となつた。もつとも、だからといって、抗争や戦いが延延と続く妨げとなつたわけではない。戦争の間にハインリヒ高貴伯の築いたアイゼナハの抑え城クレンメは破壊され、聖母教会フラウエンキルヒの美しい二つの鐘楼は鐘を奪われたあげく、引き倒された。その後間もなく方伯フリードリヒはヴァルトブルク城から、内応する、との通信を受け、たつた十五人の豪の者を引き連れただけで、城近くの谷の傍にある樹木に覆われ巖いわに囲まれた洞ほら——これは今日なお「方伯の洞窟」と呼ばれている——に一旦身を潜め、それから城山を攀よじ登り、城の搦め手——現在塔が立っている——に達した。ここには既に何人かの兵が待つていて、一同が城壁を越えるのに手を貸した。かくしてフリードリヒは血を見ることなく父親を捕らえ、エアフルトに送つた。ただし方伯妃の方は城の義理の息子の許もとに留まり、婿殿は若い奥方を急いで呼び寄せた。しかしフリードリヒはヴァルトブルク城こそ占拠したものの、テューリンゲンの邦を手に入れたわけではない。邦はまだ父親ないしこれを金で買った皇帝のものだった。それにアイゼナハの市民ですら若い方伯と関わりを持ちながらなかつた。そこでヴァルトブルク城はかつてないほどひしひしと包圍され、猛攻を受けた。城のぐるり一円には小規模の望楼、堡壘、哨所たぐの類が幾つも幾つも作られ、城と外部の交通は悉く遮断された——城方にとつて最も困つたことがこれ。というのも、いくら攻撃を重ねても城はびくともせず、投石機を用いても大したことはできない。ヴァルトブルクは敵陣全ての遙か高みに屹立きりつしていたからである。こんな時期若い奥方エリーザベトはヴァルトブルクで女の子を出産した。ところが城塞には司祭がいなかつたので、この子に洗礼を施すにはどうしたものか、と思案投げ首。なにしろその頃には、聖職者の祝福を受けられない場合、ご当節のように、神聖な洗礼式の挙行を、まあしかたないや、とばかり四週間から六週間、場合によつて

はそれ以上も引き延ばし、のんびり構えているなんていう慣わしはなかったので。果断でなにごととも即決を好んだ方伯は、嬰兒を抱いた乳母を馬に乗せ、大胆不敵な兵を十二人選抜、騎馬で城山を降り、アイゼナハの町を迂回、ガウルアンガーを通過、ゼンゲル川を越えた。この時漸く哨兵が一行の馬蹄の音を聴きつけ、警報を吹鳴した。フリードリヒと部下たちは谷間の道沿いにテンネベルクへ向かって馬を疾駆させた。ところが突然乳母が、乗っていた小さい側対歩馬を跑足に戻し、騎手たちを傍に並ばせた。子どもは泣きわめいている。方伯は乳母の横に駒を留め、「いかがいたした。そちはなぜ急がぬ。子どもはどうしたのだ。黙らせよ」と言った。「御前様」と乳母。「御子はお乳を欲しがっているのです。お黙りにはなりません。お乳を吸わせればよろしいのですが」。すると方伯は部下たちに向かって叫んだ。「者ども、止まれ。急ぎの旅ではあるがこの間余の娘に何一つ不自由はさせぬぞ。たとえテューリンゲンの邦を失おうともな」。——そこで、もし敵勢が接近したら、生死を賭して子どもと乳母を守ろうと、全員が乳母の周りに集まった。フリードリヒはそれまで追つて来る馬蹄の響きをほぼ二哩後ろに絶えず耳にしていたのだが。かくして騎馬の一隊は子ども・乳母ともども無事にテンネベルクに辿り着き、城近くにあるラインハルツブルン修道院の院長が呼びにやられ、息女に洗礼を施し、母親に因んでエリーザベトと命名した。その後フリードリヒは救援を受け、ヴァルトブルク城に必需品をたっぷり補給、攻囲軍を果敢に防ぎ、テューリンゲンの伯爵たち、殿たちを悉く味方に付けた。そこで皇帝アルブレヒトは激怒し、テューリンゲン邦に再び軍勢を率いて侵入、同時期スイスを制圧しようとしたように、強権を振るおうと考えた。すると彼の全ての意図が実の甥シユヴァーベン公ヨーハンの弑逆の凶手によって挫かれるという不測の事態が起こった。そしてその後この邦は類に嚙まれ傷のある方伯フリードリヒ——楽天方伯との添え名もある——のお蔭で安穏な平和を回復したのである。

## 四七〇 神秘劇

こうして平和と喜びがテューリンゲン邦、とりわけアイゼナハにもまた立ち戻って長い年月が過ぎた。この町は以前まことに情けない有様で、中央広場には半肘尺も草が生い繁っていたものだが、「泰平の世になったので、」ドミニコ会修道士たちは当時の慣わしに従い、主の憐れみの日曜日の前晩、ここで神秘劇を上演した。これは芝居もし、唄も歌う演劇で、演じられる舞台は跣足修道士の修道院と聖ゲオルク教会の間だった。楽天方伯フリードリヒとその宮廷全員およびアイゼナハの最も名望ある市民たちが観客となった。舞台は前景とそれよりも高い背景に分かれ、まず後者に天界の人人——キリスト、マリア、天使たち、天使の合唱隊が登場して演技した。叙唱で行われる語りおよび合唱はあるいはラテン語、あるいはドイツ語で起草されたものだった。合唱は概ね諸教会で一般的な交誦と応答歌で構成。キリストの「偉大なる尊さ」へと招く天使たちを先触れとしてキリストが登場。十人の乙女たちが前景に出で立ち、天使たちは彼女らに「まことの信仰のために燃える洋灯を携えるよう」命じ、神の召命を遂行して、退場。乙女たちは利巧な五人と愚かな五人に分かれ、それぞれ思いに耽る。利巧な乙女らは信心深く、愚かな乙女らは浮き世の快楽を満喫しようとする。それから後者らはいかにも楽しげに踊りながら退場。利巧な乙女らの一人が姉妹たちに信仰の励みになる言葉を語り聞かせている内に、片方の袖幕が下りる。と、愚かな乙女たちが宴席の傍らで眠りこけている場面となる。しかし彼女らの一人が、起きて、と声を掛ける。一方利巧な乙女たちは携えている洋灯に油を満たし、点火する。すると利巧でない方は舞台中央に駆け寄って、利巧な姉妹たちに、油を貸して、と懇願する。貰った返辞は、どこかで油が手に入らないか、探しに行きなさい、という結構な忠

告。そこで利巧でない方は、なんとかか油が買えないか、と舞台をうろろしながら、悲痛な声を挙げる。天使らが黙るよう命じ、天界の合唱が「見ヨ、花婿来タレリ」を歌い始める。この唄が終わると、壮麗な栄光に輝く救世主が、聖母に先導されて登場。利巧な乙女たちの合唱が二人を祝婚歌で迎える。マリアは彼女らに会釈をして、乙女らの頭を素晴らしい冠で飾り、こんな言葉を掛ける。

選ばれし我が子らよ、ごきげんよう。云云。<sup>(18)</sup>

すると乙女たちは「聖ナルカナ、聖ナルカナ、聖ナルカナ」とどっと歓喜の合唱を始め、それから天使たちが「栄光ト誉レノアランコトヲ」を歌い、満堂が信仰のおののきで溢れる。それからキリストが聖なる食事を撰るとになり、利巧な乙女たちは明明と燃える吊り洋灯を手に宴席が設えられている背景へと上がって行く。しかし利巧でない方は「前景の」舞台に取り残され、嘆き悲しみながらキリストに懇願し、キリストの苦難の死を介して乞い求める。<sup>(18)</sup>

我らの愚かしさを赦したまえ。

我らを汝の大きいなる恵みに与らしめたまえ。

汝の御母マリアムが

我ら憐れなる者らをして汝の尊さに加わらしめんことを。<sup>(18)</sup>

キリストはラテン語の聖書の文句を用いて厳しく拒絶する。それからそれをドイツ語でこんな具合に解説する。すなわち「然り、然り、汝ラニ告グ、我ハ汝ラヲ知ラズ」。

わたしはそなたらが何者なるや知らぬ。

そこで五人の乙女らは手に持っていた燃えていない洋灯を床に投げ捨て、今度は聖処女に一心不乱に嘆願する。「何人にも憐憫を拒んだことのないあなた様ゆえ、そのご子息に対して、わたくしどもに赦しを与えるよう頼んでくださいまし」と。しかしながらマリアはこう答える。乙女らもつと早く自分ないし自分の息子のために何かして欲していたらよかつたのだが——自分が共に頼んでも甲斐無いのではないか、と心配だ。でも、我が子が恩赦を与えてくれるかどうかやってみましょう、と。そしてマリアは神なる息子に向かって恭しく膝を曲げ、「憐レミタマエ、憐レミタマエ、憐レミタマエ、ソナタノ民草ヲ」と歌って、全ての聴衆の心を深く揺り動かし、それから救世主に、自分が彼のために堪え忍んだあらゆる困苦を思い出し、この憐れな娘たちを赦免するという形で、今自分に報いて欲しい、と言う。すると峻厳な審判者の口から雷鳴のような宣告が鳴り響く。「天地ハ移ロイ行クトモ、我ヨリ出シ詞ハ永久ニ続カン」と。——ために耳にした者全てが戦慄し、下の舞台にいる利巧でない乙女らにおぞましい恰好をした二体の悪魔——ベールゼブブとルシフェル——が近づき、これら呪われた者たちを地獄へ連れて行くとする。悪魔ともいわく「我ら悪魔の勧めに従って、こやつらは義務をないがしろにしたのだ」と。そしてキリストは叫ぶ。

正しき裁きは行われねばならぬ。

呪われたる者どもは我が許より去り、

深き地獄に落ち、

悪魔どもの仲間となるがよい。

すると地獄の全ての悪魔と劫罰を受けた者どもの喚声が高高と響き渡る。

プレレ、ヘレ、プレレ!

これは「主よ、やつらを捨てよ。やつらを捨てよ」ということ。「プレレン」prellenなる語は「送り帰す」「跳ね返す」の意。そこで冷え冷えとした驚愕が棧敷に漲り、方伯は深く嘆息する。——この時再びマリアが膝を屈め、前よりも更に言葉を尽くして代願を繰り返す。キリストは穏やかながら聖母に「お母上様、お黙りあれ」と言い、またしても拒絶し、責める身振りで乙女たちに向き直り、この上もなく激しい言葉使用で、永劫の火の中へ落ちよ、と見放す。一方悪魔たちは大きな鎖を引きずって来て、乙女たちの体を床から手荒く掴み起こして、鎖を巻き付ける。第一の乙女が悲痛極まる、骨髄を揺り動かすような絶叫を挙げる。そして、母が自分を生んで、打ち殺してくれなかった、と母を呪う。キリスト教徒(「人間」)にならずに、犬になればよかった、あるいは、洗礼の前に絞め殺してくればよかった、そうすれば、今こんな辛い思いをせずに済んだろうに、とかきくどく。また、父が自分を愛情細やかに育てた、と父を呪う。そしてただただ墓蛙に、だからも爪弾きされるあんなおぞましい代物

になりたい、そうすれば汚らしい泥沼に這い込んで、地獄からおさらばできるのに、と言う。姉妹たちの一人が高い絶望の声を振り絞ってこの娘を遮り、びっくりするような言い種を滔滔とまくしたて、髪をかきむしり、あんなは高慢だった、とか、その他諸諸の悪徳を並べ立てて罵る。すると三番目の娘が喋り始め、死に呼び掛け、なぜあなたはあたしを殺してくれないのか、と言う。どんなに惨めな死に方だって、こんな凄まじい、容赦無い苦しみに較べればありがたいのだ、と。四番目は観客の方を向き、自分たち愚かな娘たちは、あなたがたにとつていわば鏡に、恐ろしい戒めにされたのです、と語る。最後に五番目の乙女が今日というこの日を呪い、それからなんとも遣りきれない問いを投げ掛ける。マリアの代願ですら何の役にも立たないなら、彼女らは一体どんな代弁者に依頼すべきだったのか、と。あの最後の審判の聖歌「怒りの日」が「イカナル庇護者ヲ捜シ求メルベキヤ」と訊ねているように。方伯は——既に老齢だった——頭を振り振り、憐憫ヲ、憐憫ヲ、ともぐもぐ呟く。そうこうする内大勢の群衆が舞台に出て来る。愚かな乙女たちは今度は、悲嘆に昏れて胸を打ち叩きながら、ぞつとするような激しさで彼らに縋り、一人一人改めて自らの苦悩を縷縷と語る。群衆の合唱は、苦しげな声音で単調に「哀しいかな、哀しいかな」と歌うだけ。乙女たちは群衆に贖罪と懺悔を勧め、罪を犯さないよう警告し、修辞技法に関してはこれまでの対韻から離れ、叙事的韻律を採用して、このように述べる。

いでや諸人よ、我らがイエスの見張り(「大天使聖ミカエル」の忘れざりしことを、  
憐れなる者らのために悼め。

我らの罪は我らを大いなる心痛に陥れ、

我らは地獄で大いなる苦しみを耐え忍ばねばならぬ。

汝ら女たちよ、我らの不幸を泣き、善事を行うようよく注意せよ。<sup>(前)</sup>

こうして長いこと愁嘆場が続く内、キリスト、マリア、天使たち、それから五人の利巧な乙女らは奥の舞台の巻き上げられた幕を潜<sup>くぐ</sup>って見えなくなる。この幕にはどうやら業火が燃え熾<sup>さか</sup>る地獄の状況が描いてあったらしい。そして最後の乙女が結びの科白<sup>せりふ</sup>を、代願も弥撒<sup>ミサ</sup>聖祭も自分らを救えなかった、と絶望しきって

死人<sup>しじんと</sup>の方がむしろ教会への寄進の役に立つのではないか。

我らが神の怒りを受けるのは当然<sup>当然</sup>！

と叫ぶと、姉妹たちと全ての民衆は悲嘆の合唱、悪魔<sup>こおと</sup>らは雀踊<sup>せうぶ</sup>りして歓呼の合唱をする。

かくて我らは／おまえらは永遠<sup>とこ</sup>に破滅<sup>めつ</sup>ぞ！

すると男の叫びが聞こえ、その直後ひどい事故が起こった。方伯が失神して椅子から転げ落ちた——卒中にやられたのだ。心を掻き乱してやまぬこの劇、煮え滾<sup>な</sup>る狂信の熱情の限りを尽くして演じられたこの劇が、方伯にあまりにも激しい衝撃を与え、悔悛<sup>かいじゆん</sup>やら懺悔<sup>ざんげ</sup>、信心やら祈願やらでは、さてはマリアが代願なさってさえ、罪人<sup>つみびと</sup>どもが——聖書の教えによれば、他ならぬその罪人らのためにお亡くなりあそばした——かの御方<sup>おかた</sup>にお赦<sup>いした</sup>しを戴<sup>いた</sup>くことができないなら、一体全体どうしたらいいのだ、という惑乱した様様の想念<sup>せんねん</sup>が脳を駆け巡って過熱させたらしい。

——なるほど方伯はその後恢復した。恢復して暫く生き長らえた。しかしながら樂天的な活力は衰え、以前あれほど瑞瑞しかつた精神は暗い雲に混沌と閉ざされ続け、恐ろしい伎倆で瀆神の劇を上演した坊主どもは方伯を彼らの思うが儘にしてのけた。

#### 四七一 郷士イエルク

時が経ち、男が一人ある晩ヴァルトブルク城に連れて来られた。その頃既に方伯家はもはやここにはおらず、住んでいたのは守備隊長兼領地管理官のハンス・フォン・ベルレプシュと、彼とともに男を拘引してここに連れて来たブルクハルト・フント・フォン・ヴェンクハイムである。フォン・ヴェンクハイムはテューリンゲン山地の向こう側の町アルテンシュタイン(DSB七四三)に所領があり、ザクセン選帝侯のゴータにおける領地管理官だった。兩人は共通の主君である選帝侯から、メーラよりアルテンシュタイン近くの森を経由、ザクセンに向かって街道を辿るある男を、森の真ん中で捕らえ、嚴重な監視の下、しかしながら危害を加えずに、ヴァルトブルクへ拉致し、城に留めてよく世話せよ、その男が纏っている修道士風の身なりの代わりに騎士の衣装と剣を与えよ、との命令を受けた。それから囚われの男は郷士イエルクと名乗ることになった。これすなわち——かの教皇ウルバヌスが憐れな騎士タンホイザーに、またかのアイゼナハのドミニコ会修道士らが樂天方伯に与えたような絶望を数多人人に齎す坊主づくりの瞞着惑わしという龍に彼が騎士「聖ゲオルク」のごとく英雄しく立ち向かったからである。そして郷士イエルクは高みにそそり立つヴァルトブルク城で——これまで(キリストを除いてだが)一個の男子が成し遂げた——最大の精神的武勲を挙げた。すなわち彼は神の言葉、救いの唯一の言葉、聖書をドイツ語に翻訳した

のだ。かかる事業は悪魔をひどく憤慨させたので、こやつは学識ある騎士なる博士の周囲を底意地悪くブンブン飛び回り、博士を惑乱させようとした。夜毎熟睡させもせず、博士が寝台の下の袋に入れて置いた胡桃をがさがごそこそ掻き回した。また博士にあてがわれた騎士の館リッターハウスの小部屋の前の廊下や狭い回廊でどたばた騒ぎ散らした。しかし博士は「好きなようにしろ」と言い放つただけ。——もつとも、博士が元氣を出して再び熱心に仕事に掛かると、悪魔が丸花蜂だか雀蜂だかに化けてこれまたしつこく身边を飛び回ったので、さすがの博士もとうとう痲癩かじやぐを起こして墨汁壺イインクを押っ取り、悪魔に投げつけたものである。そこで壁に大きな墨汁の染みができ、以来悪魔はヴァルトブルク城でルターを構わなくなった。染みの方は思い出のよすがとして残り、壁が塗り直されるたびに、新たに出現した。さりながら結局のところ、これを拝観に及んだ連中がだれもかれも、記念の徴しるしに壁石のかけらを持つて帰ろうとしたので、当然ながら消滅せざるをえなくなり、現在壁には染みではなくて穴が空いている。

#### 四七二 修道士と修道女

ヴァルトブルク城の向かい、破却された名家の城郭ミッテルシュタイン——今日ではメーデルシュタイン——の廢墟はきのすぐ近くに二つの巖いわがある。これらはいずれも相手の方に傾かいでいて、頭部がほとんどくつつかんばかり。修道士メシヒと修道女メシヒと呼ばれている。その昔アイゼナハにまだ幾つも修道院があった頃、それらの一つに修道士が、また一つに修道女がいて、相思相愛となり、この高みの、町からは見ることできない場所で、忍び逢いを楽しもう、と約束した。二人は抱き合い、接吻くちづけを交わし、永久に両者を隔てている宗規を呪い、恋人たちの常として、永遠に傍にいられたら、永遠に接吻くちづけし合えたら、と願った。彼らがいかに切切とこうした願いを口にしたので、そ

れが叶かなえられ、二人は高い巖いわに変わった。その姿は遠望され、人間のような形を持ち続け、お互いに接吻くちづけを交わし合っているように見える。

#### 四七三 呪われた娘

ヴァルトブルクの近くダス・ニアフルーテ・イン・グネルロフに呪われた娘の洞窟なる名称で通っている巖穴いわあながあり、伝説が少なからず語られている。アイゼナハに並外れた美貌の乙女がいた。髪は、昔の画家たちが好んで描いた絹のような黄金色こがねいろ。この少女はその髪、その縹きり緞ふがおっそろしく傲慢ごうまんで、髪を梳くしり、化粧をし、鏡に顔を映し、わたしはなんてすてきな美人なんだろう、と嬉うれしがる以外のことはほとんどやらず、敬虔けいけん、敬神けいじんの心はとんと忘却。着る物がみすばらし過ぎたので、弥撒みさに行きたがらず、そのため母親に呪詛じゆそされて石になったバルテンシュタインのあの女の子(DSB二五三)とは正反対で、このアイゼナハの乙女は、持っている衣装が多過ぎ、立派過ぎて、おつくりが決して終わらなかつたものだから、教会にお詣りまいせずじまい。そこで彼女の母親は——石になれ、ではなく——、豪華な服やら装身具やら持ち物一切合切と一緒にあの古い巖穴に入ってしまった。このように呪詛された娘は七年に一度姿を現し、坐すわり込んで涙を流す。絹の衣装がふんわりとその体を包み、黄金こがねなす髪がその上に波打つ。彼女は波打つ髪を——ライン河畔のあのローレイのように——黄金こがねの櫛くしで梳すくのである。洞窟どうくつの前には決して草の生えない場所がある。乙女の坐る場所だから。そこはなんとも不気味な雰囲気である。赤茶毛あかぢまの小さい犬が一匹、娘の傍に侍っているのが時々見掛けられた。ある羊飼やぎかひいが番をしていた群ぐんれがここで恐怖おそに襲おそわれ、全部がばらばらに走り出し、二十四頭にじゅうよんづつもが絶壁てんらくから顛落てんらくしたことがある。夫に弁当べんどうを届けに来た牧人の妻が乙女を目にしたところ、

髪を梳いてくれるよう頼まれた。牧人の妻は乙女の美しさを賞讃し、自分も以前はとても綺麗だった、と自慢、上手にこんな唄を歌った。

あいさ、あたしはまだ若くつて、

やさしく素直できりよのええ

あまつこだったもんだから、

だれもがあたしに惚れたんさ。

すると乙女は、あなたが気に入ったからたつぷりお礼をしましょうね、と言ひ、洞窟の中へ案内、持っている財宝を欲しいだけ取らせた。けれども牧人の女房が立ち去ろうと振り向くと、巨大な犬と鉢合わせしたので、いやもうびつくり仰天、何もかも落としてしまい、こう叫んだ。「ああ、主イエス様、こいつあ噛むだべか」。途端に宝も乙女も犬も全てが消え失せた。「おやまあ、この呪われた娘の洞穴たら」と牧人の妻は叫び、逃げ去った。その後、この同じ女の子もがこの辺りの森の中で迷子になり、一週間というもの行方不明だったことがある。とうとうその父親が森の繁みでこの子がびんびん元気にしているのを見つけた。一体どうしてこんな長い間無事でいられたのか、と訊かれた子どもは「綺麗な女の人が来てね、食べる物や飲む物をくれてさ、お布団も掛けてくれたの」と答えた。——街道を馬車で通っていたある駟者が、峡谷の高みで大きくしゃみがしたのを耳にした。そこで駟者は上を向いて、「神様がお助けくださるよう」に怒鳴った。——するとまたくしゃみ。「神様がお助けくださるよう」。もう一度くしゃみ。「神様がお助けくださるよう」。こうして実に

十一回もくしゃみが連発され、気の良い馭者はそのたびに「神様ゴがお助けトくださるルように」と叫んだ。ところが十二回もくしゃみが聞こえると、さしもの馭者もゴット・ヘルフを唱えるのにうんざりして、マリーエン谷中タルムの巖という巖からツタが返って来るような勢いで鞭をびしりと打ち鳴らし、「くそつ、こりやまあんたるんだ。神様にお助けただけねえなら、悪魔に助けてもらいな」と怒鳴り上げた。すると高みから女の声で耳をつんざくような苦痛の絶叫が降って来た。つまりこれはあの呪われた娘だったのである。もし馭者がもう一度だけ「神様ゴがお助けトくださるルように」と祈ってやったら、乙女は救済されただろうに。

#### 四七四 インゼル山ベルグの話

インゼルベルク(世)はテューリンゲン山地ツァーレト最高の山の一つである。往古にはその名をホインゼルベルクと記し、これはホイネン、つまり巨人ヒューネンたちに由来する、と主張する者が少なくなかった。エムゼンベルクとの説を立てる向きもあった。細流エムス川がその峰の近くから流れ出ているから、というのだ。もつと当たっていそうなのは孤立山アインゼンベルクと呼んだ人たち。理由にいわく。その高い頂きは近隣の全ての山を抜いて独り孤立して聳そびえている。いや、しばしば峰の周囲に渦巻く霧の海に島嶼とうしよのごとく浮かぶ。かつてテューリンゲン全土を覆った洪水から最初にこの山が頭を突き出したかのように、と。この山を越えて、全テューリンゲン山地を何哩ワイルにも何哩にも亘わたって延びる古い丘陵街道——レンシュタイク、レンシュテーク、レンヴェーク、リンネヴェーク(世)と呼ばれる——が通っている。テューリンゲン方伯はだれでも、政権の座に就いたらすぐさま、配下の騎士たちを従えてこの道を騎馬で踏破しなければならなかった、との言い伝えがある。インゼルベルクの近くではその昔ハールツからやって来た鉦夫たちが

採鉱を始め、タバトルツだかザバルツだかのようにその名がいかにも珍しい異国風な響きの村を幾つも建設した。遠方からの移住者らはどうやら山懐に他にも山村を数数作ったようで、これらの村民は言葉遣いといい服装といい、本来のテューリンゲン人と顕著な相違がある。その後たくさんのヴェネチア人が山岳地帯に入り込んだ。土地の者は彼らを粗金ちびすけとか南国者とか呼んだ。この連中は豊かな富を少なからず持ち去った。なにしろインゼルベルク鉱坑、不気味な谷間にある熊採鉱場、シェーンライテ河畔、更にはルール川に至るまでの沿岸、細流のルール川の中その他、それからバックシユタインス洞窟にも、かつては砂金があったのだ。カルフォルニアほど多くはなかったものの、それでもかなりの人間を豊かにした。南国者が来てからこのかた、もはや何も見つかからない。

#### 四七五 ヴェネチア人

ある南国者がラウハ谷に毎年やつて来た。この男、インゼルベルク山麓でさらに聞かれる諺「牛飼いはよく牝牛よりずっと値打ちのある石を牝牛に投げる」がある」は本当なのだ、と心得ていた。ザバルツだかタバトルツだか出の若者がこの南国者に案内人として雇われた。この若者はその後——かのヴェネチア人がもはやとつくに来なくなってからだが——駈者を職として広く世間を巡り、一度など貨物を運搬してヴェネチアにさえ行った。すると一軒の店が目にと留まった。この店の飾り窓には黄金やら宝石やらキラキラピカピカ輝いていた。店の主は裕福な宝石商で、テューリンゲン男が店の前に突っ立って、ぽかんと口を開けているのを見ると、ドイツ語で挨拶をしてよこした。他でもない、以前テューリンゲン男が山案内をしてやったあの黄金や宝石の採鉱者だったのである。宝石商は男に向かい、「ここに並べてある黄金やら宝石やらはどれもこれも美し邦テューリンゲンで手に入れたもの

さね、お国の衆はこういった物を探し出したり、石を研磨する方法を知らんからなあ。お国じゃ原石でしか見つからないでな」と言った。それからヴェネチア人はテューリンゲン男にたっぷり贈り物をして別れを告げた。似たような伝説はたくさんある。ほとんど同じ話がレーン山地<sup>⑩</sup>縁辺部のバイアーベルクについても語られている。

#### 四七六 カール五世

インゼルベルクの麓<sup>ふもと</sup>に勤勉な村があつて、その名をプロットローデ<sup>⑪</sup>という。昔ここには城があり、ブルーネヴァルテスローデと呼ばれていた。城山には莫大な財宝が呪封<sup>まじり</sup>されていて、白衣の乙女が守っており、七年に一度姿を現し、低声<sup>こゝろえ</sup>でこんなことを囁く<sup>ささや</sup>。

七つで白髪<sup>しらが</sup>の男の子、

それがわたしを救えるの。

この乙女は以前高慢な伯爵夫人の侍女で、女主人の長い編み毛を梳<sup>くし</sup>らねばならなかつた。そうしている間、伯爵夫人は、櫛<sup>くし</sup>がちよつとでも引つ掛かると、極めて不機嫌になりがみがみ叱りつけた。そこである時乙女は、伯爵夫人や城もろとも地下二十尋<sup>ツワウター</sup><sup>⑫</sup>の深さに沈んでしまいたい、と念じた。願いはすぐさま叶<sup>かな</sup>えられた。

プロットローデの教会には一旒<sup>いどう</sup>の旗が吊<sup>た</sup>られている。これには楔<sup>くさび</sup>と鑿<sup>たがね</sup>、その上に配された王冠、という鉞山紋章<sup>みはた</sup><sup>⑬</sup>が描かれている。土地の人人はこれを「カール五世の御旗」と称し、いやがうえにも崇め奉<sup>たが</sup>っている。すなわち、

伝承によれば、こんなことがあったそう。かつて皇帝カール五世のお妃がプロッテローデで産褥に就いた折、この地で至れり尽くせりのもてなしを受けたので、その返礼として皇帝はこの村に広大な共有林と刑事裁判権、旗にもなう旗幟掲揚権を他の様様の自由特権と併せて下賜した。この旗幟掲揚権なるものはこんなもの。一週間続く教会堂奉獻祭中、鐘楼の全ての鐘が鳴り響く中掲げられたこの旗が靡き続ける。その間は近隣の者はだれでも自家醸造および他所産麦酒を飲むことはもちろん、その気があれば販売することも許される。このように掲揚するものだから、旗の布地はしばしば新調しなければならない。プロッテローデ教会鐘楼の珠飾りにこんな碑銘が刻まれているのも何年も前に見つかった。いわく。

この教会建立が始められしは、ルテルスなる修道士が  
 教皇攻撃の文書を初めて記せる時。されどルテルスの口はすぐさま塞がれたり。

ヘッセン方伯フィリップスは僅か九年後その全所領に——プロッテローデも同様——福音派の教えを導入した。

#### 四七七 プロッテローデ周辺の精たち

プロッテローデ周辺にはいろいろな精どもが出没したし、現在もしかり。これらについて以前はたくさん言いつた。伝えを聴くことができた。すぐ近くに天使祝辞と呼ばれる山が聳え、ここに教会という名の奇妙な窪みを持つ巖がある。説教壇とも称される。土地の人人はこの巖の説教壇の上にはしばしば村塾の師匠みたいのが立っているのを

見掛けた。この先生、顔はさながら蜘蛛くもの巣ものようで、一八四八年組(の議員)同様同様延延と演説をぶった。もつともこの演説、何が何やらとんと訳の分からない代物。もしかすると老師匠のお化けは近代になって救済され、若いのが取って代わったのかも知れない。

ある旅籠屋はたじやの地下室にはきんきら花嫁フリッターブラウトというのが出現した。これは同地の習俗通りの花嫁衣装を着飾った乙女で、莫大な財宝の番をしており、それをこの家の娘に見せた。この宝は娘の立ち会いの下無事に引き揚げられたが、その後間もなく娘は死んだ。というのも、何か宝を掘り出す場合、そこに居合わせた者たちの内、常に一人が死なねばならぬからだ。それゆえハールツ山地麓の葡萄酒園洞窟ヴァインガルテンロッホでは例の異国人どもが同行させた案内人に死の籤くじを擲なめたたしだい(DSB三九四)。

修道士山麓、プロッテローデ近郊の山の草地にはその昔研磨用風車シュウワウマイユレが立っていた。持ち主は大層裕福だった。この男にはひっきりなしに働いて財産を殖やしてくれる家精がいた。この精はしばしば奇妙な装いをした男の小人の恰好かっこうで姿を現し、一種独特な口調で話をした。ある時、この口調を耳にした研磨用風車の持ち主は、ふつとそれを真似る気になった。——するとすぐさま精は黙り込み、それからというもの声も聞かせず姿も見せなくなり、仕事はほっぽらかしたままだったので、風車の持ち主は貧窮の内に死なねばならなかった。現在その家は跡形もない。やはり研磨用風車の所有者だった二人の兄弟に、これまた同様二人の家精が休むことなくせせせせと奉仕してくれた。家精たちが姿を見せることはめつたになかったが、出現した場合はいつも今では廃れた古めかしい衣装を纏まとっていた。ある時兄弟の話がこのことにおよび、こんなに役に立ってくれるありがたい精たちに何か返礼するべきじゃないかな、となり、見積もりで大体寸法を合わせ、綺麗な赤い小さな上着と青い小さな洋袴ズボンを新調し、これらを精たちが夜の内にいつも研いでおいてくれる刃物類の傍に並べた。すると小人たちが現れ、びっくりして立

ち止まり、互いに目を見交わすと、こう言った。

ここにあるのはわしらの労賃、

これじゃわしらはおさらばしなけりや。

衣装を手に取って、いなくなり、二度と戻って来なかった。

ブロットローデ村とフリードリヒスローデ村についてテューリンゲンには意地悪なからかい唄がある。それを聴いてぶん殴られたい、とご希望の向きはこれら両村で訊いてみればよろしい。唄のどの節も問い掛けで始まる。たとえば——「あそこの市壁はどんなもの。あそこのフリッゲローデでは」といった調子。

#### 四七八 綿毛に化けた夢魔

昔その近傍で鉄のテューリンゲン方伯が堅く「厳しく」鍛えられたルーラの町には、伝説、山の財宝譚、それからもろもろの妖精——善良なのやら意地悪なのやら——の話がどっさりある。あるはあるは、獵師のお化け、聖職者のお化け、乙女、魔女、修道士、クロアチア人のお化け、鶯鳥の妖精も出る。あげくの果てはなんと驢馬の妖精すら。これは麦酒驢馬と呼ばれ、夜遅く麦酒酒場から家路を辿る連中に負ぶさったり、頸に抱きついたりする。驢馬に化けて旅人を襲う古代ローマの妖怪エンプーサのごとし。こうした多種多様な変化や魔女のお化けの他にこの土地には夢魔もいる。これは低地諸地方の伝説に登場する男ないし女の夢魔のように眠っている人を夜責め

苛む。もつともこれに対抗する折紙付きの方法がある。すなわち夢魔に苦しめられたら、できるだけ早く起き上がり、部屋の扉の鍵穴を塞がなければいけない。なぜなら夢魔は鍵穴から出入りするからである。かつてこの手を使わざるをえなかった男がいて、それを試したところ、なんとまあ、夢魔の姿が目に見えたのである。夢魔は男の寝台に坐り、白い面紗を被った上玉の女性だった。ルーラの男にとってはまことに悪くない話。彼はこの美人を捉まえたまま、女房同然同棲した。夢魔は物静かで従順だったが、決して笑うことはなく、鍵穴を開けてください、としょっちゅう男に頼んだ。なにしろ夢魔は、扉や窓が開いていてもだめで、ここからしか逃げられないのである。さればこそゲートルも『ファウスト』の中でメフィストフェレスにこう言わせている。

悪魔とか精霊には掟がございましてね。

はいって来たところから、出て行かなくちゃいけないんで。

しかし物静かな女に何度も頼まれて、ある時男はこう考えた。「出て行きたがっているんだから、ひとつさうさせてやろう。だって、まさか鍵穴を抜けられっこあるまい。逃げたくたって、捉まえておけるさ」。そして夢魔に悟られないようにそつと鍵穴の詰め物を取り除いた。すると女はどんどん小さくなり、とうとう綿毛に変わった。男は掴まえようとさつと手を伸ばしたが、男の手の風圧が却って綿毛を押しやっつてしまい、綿毛はふわつと飛び、鍵穴から通り抜け、どこへともなく消え去った。

## 四七九 ヴィットゲン 巖

ルーラ川の河谷、シエーナウ村とファレンローデ村の間に、巖壁がそそり立っていて、その名をヴィットゲン巖シエナイという。昔その上に城があり、姫君が一人暮らしていたが、今はヴィットゲンシユタインの中に棲む。姫君は七年に一度巖から外へ出て来る。その姿を見ても怖じ恐れないでいる者には彼女は何かけっこうな贈り物をくれるが、怯えて逃げ出すと、凶事を覚悟しなければならぬ。——ルーラ教会の聖歌隊指導者たちが夜ヴィットゲンシユタインの傍を通り掛かり、新年を寿ぐ唄を捧げた。すると雪の中に骨が一山見つかった。彼らの内の一人だけが、それで小刀の鞘を一对拵えようと、二本拾った。なにしろルーラには火皿と煙管の製造工場の他に小刀作りがたくさんいたので。この御仁は翌日隠しの中に太い黄金の延べ棒を二錠見つけた。彼が聖歌隊の仲間たちにこの話をする時、一同は憑かれたようにヴィットゲンシユタインへ駆けつけたが、そこには雪しかなく、骨はかけらも見つからなかった。例の幸せな御仁はこの黄金のお蔭で裕福になった。またある者たち——これは楽士連だった——は緑の小枝を授かったのに、投げ捨ててしまった。一人だけが小枝を帽子に挿していると、それが黄金になった。これぞまさしく「緑の小枝に行き当たった」(「幸せになった」)わけ。——ファレンローデの牛飼いが番をしている群れにしばしば見知らぬ綺麗な牝牛がいるのに気付いた。この牝牛、どこから来て、どこへ行くのかさっぱり分からなかった。朝になるといて、夕方にはいなくなるのだ。とうとう牛飼いは牝牛の跡を跟けた。するとなんと、牝牛は榛の木と柳の繁みに姿を消し、ヴィットゲンシユタインの裂け目に入った。牛飼いがやはりその後を追って行くと、扉に行き当たったので、それを叩いた。すぐに乙女が現れて「何の御用」と訊いた。——「わっしやあ、

家畜番のお代をいただきでえと思いやして。あなた様が毎日群れにお遣わしになるこの牝牛のです」と牛飼いは臆面もなく答えたもの。姫君は男に古いターラー銀貨を一枚よこして、こう言った。「さ、これがあなたの手間賃。でもね、あなたがせがんだりしなかったら、いつかずっとたつぷり上げたのに」。綺麗な牝牛はそれきり二度と巖から出ては来ず、牛飼いの牧場に行かなかった。

#### 四八〇 ちつちやな富籤壺

ヴィットゲン巖のある峡谷を低い灰色の塔が見下ろしている。これはかつてここにあつたシャルフェンベルク城の遺構である。周辺の住民はこの塔をその恰好からちつちやな富籤壺と呼んでいる。ここには変化が出る。燃える樽が山からごろごろ転げ落ちることがしばしばだし、山麓のタール村の近くには評判の良い場所がある。そこには巖が一つあり、巖頭には二挺の小刀が埋められている。ここでかつて二人の兄弟がお互いに突き刺し合つたのである。フリードリヒと謹嚴方伯——噛まれ傷のフリードリヒの子息——の時代、シャルフェンベルク城周辺は騒乱状態、いや、流血状態だった。方伯はヘンネベルク伯爵家と私闘を行った。伯爵家は以前からシャルフェンベルクを占拠しており、アイゼナハとゴータに至るまでテューリンゲンの邦に侵攻、一方方伯側は都市ザルツンゲンおよびフランケンシュタインとアルテンシュタインの殿たちを味方に付け、ヘンネベルク領をヴェラ河谷とブーヘンに至るまで蹂躪した。次いで方伯はエアフルト市民と同盟を結び、テューリンゲン諸都市から多くの軍兵を動員、シャルフェンベルクを包囲した。ヘンネベルク伯はというと、大軍を率いフランケンから山地を越えて襲来、テューリンゲン軍に凄まじい攻勢を掛けた。方伯は進退窮まり、すんでのところの間違ひなく殺されるところだつ

た。なにしろ夥しい人数が討ち死にしたのだから。方伯は指揮官の徵も冑飾りも取り捨て、一兵卒に身を棄して騎乗、それからなんとも勇猛果敢な市民兵で、瘦せぎすだが骨太の、フリマールのハンスなる男がやはり同じような馬に乗り、終始方伯の傍を離れず、方伯に近づこうとする敵があるたび、戦斧を振るって叩きのめしたので辛うじて助かった。ただし方伯はとどのつまり甚大な損害を蒙って敗退、シヤルフエンベルク守備隊は欣喜雀躍、ちっちゃな富籤壺に勝利の旗を掲げ、緑なす森また森へと靡かせた。

#### 四八一 麵麩焼き竈洞窟

シヤルフエンベルク城址附近にヴァルトベルクないしマルトベルクという高山が聳えている。これは数数の伝説が付き纏うまことに風変わりな高嶺で、近くの高嶺で、近頃の山へールゼーレンベルクはこれとことん異なっている。あちらの魂哭洞窟に対するに、こちらには麵麩焼き竈洞窟があり、かつては洞内から多量の砂金を産した。これはヴェネチア人どもが持ち去ってしまったが、他にもまだ山の周囲には塞がれた古い縦坑や横坑がたくさんある。なにしろそこには見つける術を心得ている連中がいまだに貴金属をたっぷり隠しているのだ。三位一体の日曜日、夏至、および洗札者聖ヨハネの祝日にはかしこに不思議な花が咲き、これを見つけた者に地下の世界を開示して、裕福にしてくれようとする。それで魂を失うことはない。既に大勢が幸運に恵まれた。麵麩焼き竈洞窟だが、これはだれにでも見つかるとし、深いけれども潜り込んで行ける。ただし黄金は見つからない。森番頭ケーニヒ老は次のように語っているが、この話は彼自身によってルーラの山林資料集にも記録されている。若くて獵師の徒弟だった折、ケーニヒはしばしば広大なルーラ山林管区に足を踏み入れた。家路を辿る途中出逢った見知らぬ男がバック

オーフェンロッホへの行き方を訊ねた。ケーニヒはこの余所者——ヴェネチア人だった——を望みの場所へ案内してやった。男は洞窟に潜り込んで行ったが、やがて袋一杯、洞窟にあった灰黄色の砂を持って出て来た。それから案内人に紙包みの粉をくれて、いわく「この洞穴には莫大な宝がある。洞穴の中で黒褐色の砂粒を探しな。それを罅あひらに入れ、この粉をいくらか加えるんだ」。こうして余所者はケーニヒと別れた。しかしケーニヒは若者のこととてこうした言葉にも粉にも特に注意を払わず、粉をしまつて、家の自分の櫃ひつに抛り込んだ。何年も経ったが、全然思い出しもなかった。ある日のこと、彼はまたしても山林管区で一人の南国者ツァーレに出くわした。南国者は、バックオーフェンロッホはどこか、と訊いた。ケーニヒはこの男も案内してやった。するとこの男もやはり洞窟の財宝のことを話し、黒褐色の砂粒に言及した。そこで改めて気付かされたケーニヒは、自分もちよつと試してみよう、と考え、洞穴に入って件の砂粒を探し、見つけ、持って帰ると、家で例の粉を探した。長いこと探し回ったあげく、ようやく紙包みを発見したものの、紙はもうぼろぼろになっていて、粉は大部分こぼれており、ほんの僅かな量しか残っていなかった。ケーニヒはこれをつまんで、砂粒と一緒に罅あひらに入れ、かつかと火を燃やして溶かすと、大きな黄金の粒が採れた。後に大骨折つてまたいくらか「黒褐色の」砂粒を見つけ、例の粉なしで罅あひらに入れたところ、ほんのちよつぱり、ちつぽけな黄金の粒を得た。

#### 四八二 山羊脚洞窟

大きなヴァルトベルクにあるバックオーフェンロッホの近くに、これまたヴェネチア人に塞ふさがれた(呪封された)ガイสบインロッホがある。宝の山だが、決して見つからない。これは牝山羊めやぎの後ろ脚を用いて塞がれ、見えなく

されているので、山羊脚洞窟(ゴーストフット)と呼ばれている。四年に一度、それも二日間しか開かない。聖ヴァルプルギスの祝日(セントヴァルプルグ)と洗礼者聖ヨハネの祝日である。これらの日であれば洞穴を目にした者は中へ入れる。近世でもあの森番頭(オールドマン)ケーニヒは狩りをしている時洞穴が口を開けているのを発見、洞内で粗金の塊(アーク)——それを元に一ツエントナー三十プフントの黄金と四十五プフントの白銀が抽出される——が燦めいているのを目にした。森番頭は一人つきりだった。彼は、全山林管区を歩めている手袋のごとく知り抜いている自分が過去に数え切れないほど歩き回った場所、洞穴の口を発見したのがなんとも訝しくてならなかった。ともあれ配下の助手たちを呼んだが、だれにも声が聞こえなかったたので、彼らと合流するまでちよつと引き返した。急いで発見を報せたかったものだから。ところがガイスインロツホはその間に後ろ脚を突つ張り「逆らい」、巖も洞窟も霧景色さながら消え失せていた。

#### 四八三 蛇の糞汁(スネ)

ヴァルトベルク山麓にも泉が湧いていて、その名を白銀の泉(シルヴァーホルン)という。ある年の黄金の日曜日(トリニクティヴェイスマズンタグ)、その畔(ほとり)で休んでいたシュメーアバハ村の牛飼いが、異国風の身なりをした男が一人、いろいろな道具を担いで森から出て来て、新緑も鮮やかな日当たりの良い牧場に足を踏み入れるのを目にした。それから近くの巖(いわ)にこれまで一度も気付かなかった洞穴を見つけた。余所者は牛飼いに挨拶して荷物をあげ、傍に来るよう牛飼いを手招きし、迷惑は掛けないからひとつ手伝ってはくれまいか、と頼んだ。そして小さな焚き火を燃やさせ、自分は榛の枝を削って先が二股になった管を拵えた。それから芝生の上に布を一枚広げ、携えていた白い杖で環を三つ描き、小さい笛を取り出し、奇妙な節回しを吹いた。すると巖の裂け目や繁みの中から夥しい数の蛇や地虫がぞろぞろ出現、あげ

くの果てには巨大な無翼龍リントウリュムまでやって来て、これは召喚者の真ん前におみこしを据え、かつ口を開けた。他の連中はいやらしくシユウシユウ音を立てながら、てんでにとぐろを巻いた。ヴェネチア人——というのも蛇の召喚を行ったのはそうだったのである——はがたがた体を震わせた。とどのつまり高い楡ユの梢に全身銀白色で黄金ゴウゴンの冠を被った蛇が姿を見せ、住まいの樹からくねくねと降り、牧場を横切つて、披ヒげられた布に上がった。すると召喚者は素早く跳びつき、布をぱつと折り畳み、冠を奪つて隠してしまい、無翼龍リントウリュムをぐさりと突き留めて殺し、また笛を吹くと、長虫どもは這はい去つて行つた。それからヴェネチア人は捕らえた蛇の女王を殺し、切り刻むと、持つていた小鍋こなべでことごと煮て濃厚な羹汁スープを調理した。そうしてのんびり蛇料理を楽しもうと坐すわり込み、ささ、一緒にどうぞ、と牛飼いを招待した。最初の内牛飼ウチウシいは頑かたくなに断つていたが、とうとう説得され、無理に我慢して汁は一匙味ひとじりわつた。あのテューリンゲン山地ツェルムトの子どもの昔話では、寄つて来た家蛇ウチスナが子どもの乳入り汁ミルクスープと一緒に食べさせてもらいながら、乳う乳しか飲まないでいると、子どもが蛇に向かつて「エス・ネット・ヌー・ニユー、エス・ア・ノツケ」(汁じゆばつか飲のみまにやあで、実みの麵めん麩ふも喰くいな)と言つたわけだが、ヴェネチア人も牛飼ウシいにやはり蛇肉を食べるようしきりに勧めた。牛飼ウシいはこれを徹頭徹尾拒み抜いた。しかしながらそれでも、蛇の目玉のような脂肪の玉が一杯浮いている上等の羹汁スープのお蔭かげで、牛飼ウシい自身みづかの目も明らかになつた。周囲の全てがこの世のものならぬ輝きに照らし出され、口を開けた山の洞窟——これは山羊脚洞窟ザイスイバリスロツホだつた——の中に金銀が満ち溢れているのが見えたのだ。二人は出掛けて行つて、それを我が物にした。それから何もかもさつと風に吹かれたように消え失せた。「おぬしが蛇肉自体も食べていればなあ」と立ち去りがけにヴェネチア人が言つた。「あんたはしよつちゆうあの洞穴が開いているのが目に見えて、何度も何度も中に入つて、宝を持ち出すことができたのに。だが、だめさ。ごさげんよう、いつかヴェネチアにわしを訪ねて来なさい。願ヴンシユいの叶ユエう布切フキれを一枚あげるでな、これを頭に巻まいておく

といい」。その後牛飼いはあちらこちら願ったところへ飛んで行った。一度はヴェネチアへも出掛けた。その時あの蛇の羹汁を拵えた男が、門衛が立っている大理石造りの大邸宅で裕福な貴族の恰好をしているのに逢った。男は牛飼いを愛想良くもてなして、素晴らしい贈り物をくれた。

#### 四八四 ライフシユタイク山の斜面

市場町村であるルーラの向こう側のライフシユタイク山には大きな森林草地のライフシユタイク山の斜面がある。これは日によって見つからないことがある。まだ諸人の思い出の中に生きているかのルール（「ルール」の森番頭ケーニヒ老がそうした体験をした。晩秋のある日のこと、ケーニヒは、ライフシユタイク山の斜面に設けた塩舐め場の一つの傍で何か肥えた猟獣を撃ち留めようと、ライフシユタイク山の山腹を歩いてきた。森の中には切り拓かれた林道があり、これを伝って行けば迷うことはあり得なかった。高みで路は草地を右手に見て過ぎ、それからまた森に入るのである。森番頭ケーニヒは朝九時にルールを出発、初めはぼんやり歩いてきた。すると突然森の真っ只中にいることに気付いた。こりゃあ左に来過ぎちまった、と考え、斜面の近くまで引き返すことにしたのだが、斜面が見つからない。またしても迷って右手に来過ぎちまった、と引き返し、林道に注意し続けた。ところが一向塩舐め場に行き当たらない。ケーニヒは町切つての熟練した山歩き人である上、この路は五百回以上も歩いたのだが、朝九時から午後三時まで森の中をさまよい、結局この日は塩舐め場に辿り着けなかった。翌日——彼自身がしばしば語ったのだが——ケーニヒは一步も迷わずに塩舐め場を見つけた。

## 訳注

- (1) ミュールハウゼン Mülhausen. DSB四四三注参照。
- (2) プライトジュルツェ Breitsulze. この泉源はミュールハウゼンとの落差は僅か二メートル。
- (3) ライフェンシュタイン修道院 Kloster Reifenstein. DSB四四三注参照。
- (4) 鷲塔 Adlerthurm. ミュールハウゼンの市壁に聳える防禦塔の一つ。現存。
- (5) ゴータ Gotha. 現テューリンゲン州で最大の五番目の都市。ゴータ郡郡庁所在地。
- (6) ポッペローデ(廢村)の泉 der Brunnen zu Popperode (Wüstung). ミュールハウゼン西方約四キロ、廢村ポッペローデの端にある。
- (7) 二重祭典 Doppelfest. 未詳。識者の「高教を俟つ。なお泉に感謝する祭は現在も行われている。
- (8) 獰象女らが頭をば光の花冠が飾るよう、/泉の面を差し覗き、汝の面を葉叢で飾れ。Ut Iymphae Nymphas nimbus coronat. / Ad fontem frontem fronde coronas. 噴泉の水面を覗けば、影を映している科の木の葉叢が、さながら花冠のごとくにならう、との呼び掛け。
- (9) ミュールハウゼン戦争当時 Zur Zeit der Mülhäuser Kriege. DSB四四三参照。
- (10) アンメルン Ammern. 現テューリンゲン州ウンシュトルト＝ハイニヒ郡の小さな町ウンシュトルトタールの一部。数世紀に亘りミュールハウゼン管轄下の小村だった。
- (11) 言葉返すと antwortete. 秘められた宝を取り出そうとしている時には、一切口を利いてはいけない。一方宝を守っている魔物はあの手この手で無言の行を破らせようとする。
- (12) ヴインフリート Winfried. ヴインフリート・ポニファチウス(ポニファティウス)。英国ウエセックス生まれ。教皇に依嘱され、ドイツ諸地方のキリスト教化に献身、ために「ドイツ人の使徒」といわれる。これまでのDSBにも再再登場。
- (13) シュトゥルミ Sturmi. ラテン名ストウルミウスSturmias. 八世紀の宣教師。フルダ修道院の創立者で初代院長。
- (14) デイメルラント Diemeland. ヴェーザー川の支流で延長一〇・五キロの河川デイメル——現ヘッセン州と現ノルトライン＝ヴェストファーレン州を流れる——の流域をいう。
- (15) イルミン柱 Irminsäule. DSB一六二二二―一六二二一等参照。
- (16) デーゼン山 Desenberg. スゴシユタインはDSB二八五ではDeesenbergと綴っている。
- (17) 現在のヘアシユテレ行政区 das heutige Amt Herstelle. 現ノルトライン＝ヴェストファーレン州ヘクスター郡の都市ペーフェル

- (18) ングンの南東地区。ヘアシユテレは七九七年カール大帝によって建設された。  
 エッシユヴェーゲとヴァンフリート Eschwege und Wanfried. 共に隣り合った現ヘッセン州ヴェラハマイスナー郡の小都市。な  
 だらから緑豊かなヴェラ河谷にある。
- (19) ゲルンローテ Gerrode. 現ザクセンハールト州ハールツ郡の都市クヴェードリンブルクの一部。  
 悪魔の壁 Teufelsmauer. DSB四〇二参照。
- (20) トレフフルト Trefurt. 現テューリンゲン州ヴァルトブルク郡の小都市。市庁舎を初め美しい木骨建築の数数がある。町をヴェ  
 ラ川が貫流している。
- (21) クロイツブルク Creuzburg. 現テューリンゲン州ヴァルトブルク郡の小さい町。テューリンゲン地方最古の町の一つ。近隣の町  
 にはトレフフルト、ミエラ、クラウトハウゼン、アイゼナハ、ヘアレスハウゼン、イフタ、リングガウがある。
- (22) 騎士タンホイザー Ritter Tannhäuser. DS一七一参照。また、タンホイザーが快楽の日日を過ごしたというヴェーヌスベルク  
 Venusberg、またの名ハールゼルベルクは現テューリンゲン州のゴータとアイゼナハの間に実際に存在する。
- (23) キービヒェンシユタイン城 Giebichenstein. DSB四二六参照。
- (24) ルートヴィヒ跳躍伯 Ludwig der Springer. DSB四二三参照。
- (25) 福音書にあるあの美しい罪の女 jener schönen Sünderin im Evangelio. マグダラのマリアを指す。四福音書、なかんずくルカ伝  
 八章二節、二十四章十節に登場する。カトリック教会、聖公会、東方教会のいずれもが聖女としている。
- (26) ハルシユタル Harstall. テューリンゲン地方の騎士階級の一族。
- (27) ミエラ Miha. 現テューリンゲン州ヴァルトブルク郡の小さい町。
- (28) ベルカ Berka. 現テューリンゲン州ヴァルトブルク郡の町ベルカ/ヴェラ。現ヘッセン州との州境のすぐ近くに位置する。
- (29) エルベル Eibel. ドイツ語・古期英語「エルフ」Elf、elと関係があるのでは、とベヒシユタインは示唆しているのかも知れない。
- (30) ただしその名はマックスでもカスパールでもなく、hiß aber weder Max noch Kaspar. ヴェーバー作曲のオペラ「魔弾の射手」  
 Der Freischützに登場する二人の猟師はマックス(男性主人公)およびカスパール。
- (31) 殿様牡角鹿 Edelhirsch. 学名ケルヴス・エラフス Cervus Elaphus. 体長二・三メートル、体高一・五メートル、体重二五〇キロに  
 も及ぶ堂々たる牡赤鹿 Rothirsch. アナトリア、カフカース地方からヨーロッパ、アフリカに掛けて広く分布する。ヨーロッパの獵  
 人にとつては願ってもない大物獵獣の代表で、すぐ後に記されているように、十六にも枝分かれしているほどの見事な角であれば、  
 狩りの記念品として大いに珍重された。

- (33) 魔弾の射手 Freischütz. 「自在射手」。狙わなくとも必ず的に命中する弾丸の射手。このような弾丸は悪魔と契約して鑄造する。DSB 一七六二七八、三二七参照。
- (34) アイゼナハ Eisenach. 現テューリンゲン州西部の中都市。いわゆるルター・シユタットの二つ(ルターは一四九八―一五一年ここに住んでフランシスコ派修道院に通い、ラテン語を学んだ)。テューリンゲン山地の北縁、ヘールゼル川河畔に位置する。十二世紀末テューリンゲン方伯家の首邑となる。町の上方に聳えるヴァルトブルク城(ルターはこの城で一五二一―二二年新約聖書をギリシア語からドイツ語に翻訳した。DSB 四七七一参照)でとりわけ有名である。ヴァルトブルク城における第四代テューリンゲン方伯ヘルマン一世(在位一一九〇―一二二七)の宮廷は神聖ローマ帝国において宮廷恋愛歌と詩歌道の中心とされた。一二〇六年にはかの伝説的な「ヴァルトブルクの歌合戦」der Sangerkrieg auf der Warburg (DSB 四六二参照)が催された、という。これまでもアイゼナハの名はDSBに再登場。
- (35) フン族の王エッツェル Etzel, der Hunnenkönig. アッテイラ大王。ただし歴史的事実ではなく、「ニーベルンゲンの歌」参照。デイスバルグムの数数 Dispargen. DSB 二八五参照。
- (36) ラインハルトツ泉修道院を建立する das Kloster Reinhardsbrunn gründete. DSB 五五五参照。
- (37) 可憐な薔薇を手折った唄のあの少年と同様 wie dem Kraben im Liede, der das Röslein brach. もとよりゲーテの詩「曠野の薔薇」Haidenrosleinの薔薇と少年のこと。しかしながら苦痛を堪え忍ばねばならなかったのは手折った少年ではなく、手折られた薔薇の
- (38) はずだが。そりゃ可憐な薔薇は、叶わぬまでも、と無体な少年を一刺しはしたけれど……。
- (39) グラープフェルト Grabfeld. 現テューリンゲン州南部シュマールカルデン＝マイニンゲン郡の小都市。なおこの地の飢饉はDB 五八二で語られてゐる。
- (40) ヴァルトブルク Warburg. 元来の意味は「見晴らしの良い城」ないし「監視の城」。
- (41) 宣誓補助人 Eideshelder. ドイツ古代法において宣誓人の信憑性を証明する人。
- (42) 皇帝はこの人をテューリンゲン方伯に任命した den machte der Kaiser zum Landgrafen in Thüringen. 再再注で指摘しているように、名は同じルトヴィヒには違くないが、ベヒシュタインは一代間違えている。「この人」はルトヴィヒ跳躍伯の孫に当たる。「この人」の曾祖父シャウエンブルク伯ルトヴィヒ髭もじや伯 Ludwig der Bärtige, Graf von Schauenburg (DSB 四二四参照)がルトドヴィンゲン家 Ludowinger (存続は一〇四〇―一二四七。往古のテューリンゲンの豪族)の始祖。祖父のシャウエンブルク伯ルトヴィヒ跳躍伯(一〇四二―一一三三)の子息である父ルトヴィヒは一一三一年神聖ローマ皇帝ロタール三世(在位一一二五―一二七)によって初代テューリンゲン方伯 Landgraf von Thüringen (在位一一三一―一四〇)および帝国直属諸侯の

- (46) (45) 位を授けられた。この物語の主人公「鉄のルートヴィヒ」Ludwig der Eiserneは方伯としては第二代でルートヴィヒ二世(生涯一二二八。在位一一四〇—七二)、ルートヴィング家ではルートヴィヒ四世となる。「方伯」はまず第一に神聖ローマ帝国内貴族間の私闘Feideを禁ずる皇帝の国内平和令Landfrieden(日本では豊臣秀吉の「惣無事令」に比されるか)を遵守させる任務を負う。帝国内の小国の君主である公爵、Herzog並の権力があつたようだ。尤も、伯爵Grafではない諸勢力より上位にあるに過ぎず、テューリンゲンの伯爵たち(シユヴァールツブルク、オルラムミュンデ、グライヒェンリトナ、ホーンシユタイン他)は方伯と同等の権利を持っていた、との説もある。しかしJ・K・A・ムゼーウスの物語「メルクザーラ」Johann Karl August Müsauts Melechsala. > *Volksmärchen der Deutschen*. 1783-86. (邦訳。鈴木満訳「メルクザーラ」ドイツ人の民話、国書刊行会、平成十九年、所収)では、主人公グライヒェン伯は第五代テューリンゲン方伯ルートヴィヒ四世に従う身分として描かれている。方伯ルートヴィヒ一世の下で、ルートヴィング家は隣邦ヘッセンにも領土を拡張した(ヘッセンは一二三七年テューリンゲンに帰属)。
- (43) 温良な性格 von mildem Wesen. 初代テューリンゲン方伯ルートヴィヒが一二四〇年に逝去すると、ドイツ王コンラート三世は十二歳の嗣子ルートヴィヒに方伯位を授与した。しかし成年ではなかったから、その後四年間母ヘートヴィヒ(ヘッセンの地域伯にしてグーデンスベルク伯ギン四世の息女)が摂政としてルートヴィヒを後見した。治世中途まで臣下に対し穏和に振る舞ったのはこのことと関係があるか。
- (44) ルール村 Ort Ruhl. 後のDSBにも再「ルール」Ruhlとして登場するが、一般には「ルーラ」Ruhla。現テューリンゲン州西部の山の町。アイゼナハとシユマルカルデンの間にある。テューリンゲン山地北辺、標高四四〇—五三〇メートルに位置する大気清澄な保養地。町の紋章は鉄砧の上で鎚を振るっている鍛冶屋。
- (46) (45) これすなわち金貨のこと nämlich die Goldstücke. しかしながら十二世紀西欧では金貨は一般に流通していなかった。鎖帷子 Panzerrock. 直訳すれば「装甲上着」。別の伝承によれば、方伯は自今常にこれを着用して身を守ったとか。そこで、行住坐臥着用できる上着状の装甲といえは鎖帷子以外にはあるまい、と考え、こう訳した。日本のそれと異なり、西欧の鎖帷子には厚く柔らかな毛織りの裏地が付いていた、というが、それでも皮膚には痕が残ったことであろう。「ハラルト・フォン・アイヒェン——十二世紀後半の一鱗」Herald von Eichen. Eine Skizze aus der 2. Hälfte des 12. Jahrhunderts. (邦訳。鈴木満訳・注・解題。「人文学会雑誌」第三十九巻第四号、平成二十年三月)なるベヒシユタイン処女作の四短編の一つがある。これに、謀叛を起こした貴族たちとの合戦前夜、方伯は天幕で横臥中暗殺者に襲われるが、鎖帷子のお蔭で無疵で済む、という場面がある。なお、この処女作は「テューリンゲンの民話」Thüringische Volksmärchen. 1823.なるタイトルで纏まっており、全て鈴木満の訳・注・解題がある。

- (47) フライブルクを見下ろすヌームブルク Nurnburg über Freiburg. フライブルクとは現ザクセン＝アンハルト州ブルゲンラント郡の小都市フライブルク・アン・デア・ウンシュトルトFreyburg an der Unstrutのこと。ウンシュトルト川はやがてザール川に合流する。「ヌームブルク」と音のよく似たナウムブルク・アン・デア・ザールNaumburg an der Saale——中世、商業・交易都市として大いに栄え、現ザクセン＝アンハルト州ブルゲンラント郡郡庁所在地——はこの合流点近くに位置する。「ヌームブルク」が「ナウムブルク」だとしたら、フライブルクとは七キロ離れているし、ともに河谷にある町なので、「見下ろす」というのはおかしい。後掲注に記すようにベビシュタインはノイエンブルク城Neuenburgを「ヌームブルク」と誤解しているのである。方伯家の元城塞だったノイエンブルクが建つ城山は確かにフライブルクの町の南側背後にあるから、「フライブルクを見下ろすノイエンブルク」なら正しい。ところで、類話のDS五五七「ルートヴィヒ貴族どもを撃いで耕地を犁ぎ返す」Ludwig ackert mit seinen Adligenでは、ルートヴィヒ方伯が叛乱貴族軍と戦った場所が「ナウムブルク・アン・デア・ザール近く」bei der Naumburg an der Saalとなっている。ベビシュタインは「ノイエンブルク」＝「ナウムブルク」＝「ヌームブルク」という複雑な誤解をしているのである。
- (48) 城を見下ろす平地へ über der Burg auf ein flaches Feld. 「城を見下ろす」über der Burgはおかしい。ノイエンブルク城は険しい巖山とはいえないがこんもりした丘の上にある。こういう点からしてもベビシュタインは河谷に位置する町ナウムブルクと混同していることが分かるというもの。更に後に「(貴族の畑は)……古いヌームブルクの近く、背後の開けた丘の上にある」liegt nahebei hinter der alten Nurnburg auf freier Höheとあるのも憶測を補強する。
- (49) 端綱と頭絡 Stränge und Halftern. 牛馬の口に付けて牽く綱と牛馬の頭部に付ける用具。避難所 Asyl. 普通Asylと綴る。フランス語「避難所」asileから。中世ヨーロッパにおいては、教会、修道院、都市では市民の家屋ですらも、罪を犯した——あるいは、犯した、と思ひ込まれた——人人のいわば聖域(神聖な空間として認知され、そこに逃げ込んでいる限り、あるいは定められた期間内なら、だれもその者に手出しできない場所)だった。司直がきちんと機能してゐるとは言えなかつた時代、王侯や領主、さては都市の参事会などによる裁判が開かれるまで、身を隠す場所が必要だったのである。でないと、過失で人を殺した場合でも、被害者の縁者に復讐される可能性があつたし、無実の罪なのに興奮した暴民たちのため私刑を受ける恐れがあつた。こうした避難所は、国家が復讐・私刑を禁止し得るだけの法体制を整え、警察が治安を維持できるようになつて行くに従い、消滅の方向に向かう。
- (51) 貴族の畑 Edlacker. 現在もフライブルク・アン・デア・ウンシュトルト産銘酒である辛口の白ワイン「フライブルガー・エーデルアッカー」Freyburger Edelackerに名を留めている。往時この土地は三圃式農業の休閑地(放牧地)であつた由。

- (52) 鉄<sup>アイゼン</sup>方<sup>Markgraf</sup>伯<sup>von Thüringen</sup> der eiserne Landgraf. テューリンゲン方伯ルートヴィヒ二世、添え名して鉄のルートヴィヒ Ludwig II. Landgraf von Thüringen. Ludwig der Eiserne geheissen. 因みに墓所は殆ど全てのテューリンゲン方伯と同様ラインハルトツプレン修道院にある。
- (53) この方伯の義兄は帝国最高の世俗君主、すなわちフリードリヒ赤髭帝<sup>フリードリヒ</sup>だった。Dieser Landgraf hatte den höchsten irdischen Herrn im Reiche zum Schwager, Kaiser Friedrichen, den Rothbart. テューリンゲン方伯ルートヴィヒ二世の妃エッタ(ユーディト)・クラリチア Jutta (Judith) Clarica (一一三三/三四頃—九一)は、シュヴァーベン公フリードリヒ二世(独眼公)の息女にして、ドイツ王コンラート三世(在位一一五二—一九〇。ローマでの教皇による皇帝戴冠は無かった)の姪。フリードリヒ赤髭帝の異母妹。居城キフハウゼン Kaiserburg Kifhausen. DSB四二八注参照。
- (54) この城にはまだ城壁が残りなかつた die war aber noch ohne Mauern. 城塞なのだから、もとよりそんなはずはない。伝説の伝説たる所以である。
- (55) 「新たな城塞」 niuwe Burg. 中世の幾つもの古文献に「ヌーヴェンブルクの城」castrum Nuwenburgなる名で出て来るのはノイエンブルク城である。前掲DSB四五三注でも言及したが、ベヒシュタインは、テューリンゲン方伯家の最古かつ最も重要な城塞だったノイエンブルクNeuenburgは「ヌームブルク」ともいう、と思ひ込んでいるのである(次の話DSB四五五冒頭でも思ひ込みが続く)。
- (56) フライブルク Freiburg. ノイエンブルク城の建つ城山の北側下方にフライブルクFreiburgの町があるので、「ノイエンブルク城へ向かえ」を「フライブルクへ向かえ」と言っても間違いとは言えない。
- (57) 方旗 Banner. 正方形か長方形の旗幟で、旗幟の面一杯に所有者の紋章が描かれている所有者は王族、諸侯、あるいは平騎士を従えて出陣する高位の騎士に限られる。
- (58) ロープダブルク Lobdaburg. 現テューリンゲン州の大都市イェナにロープデブルクLobdeburgなる城の廃墟がある。これか。
- (59) ノイエンブルク Neuenburg. 現ザクセン・アンハルト州南部、ウンシュトルト川下流東岸を見下ろす台地上にある。前掲注「新たな城塞」参照。建て直され、拡張され、現在ザクセン・アンハルト州で最も美しい城とされているが、そもそもその起りはルートヴィヒ跳躍伯<sup>デアレス</sup>が一〇九〇年頃築城したもので、ヴァルトブルク城の姉妹城である。
- (60) ラインハルトツプレン修道院 Reinhartsbrunn. DSB四三三、DS五五五参照。
- (61) 代理祈願 Fürbitte. 生者であれ死者であれ、その人のために聖母や諸聖人に神への執り成しを求める祈り。長途の旅に出た恋人のために、道中の無事息災を祈って、乙女が司祭に祈禱を依頼するなど代理祈願の一例。

- (63) 若き方伯ルートヴィヒの Ludwigs, des jungen Landgrafen. 第三代テューリンゲン方伯(在位一七二九〇)はルートヴィヒ温良方伯 Ludwig der Milde、あるいは敬虔方伯 der Fromme と添え名された。一五一一/五二一一九〇年。マルガレーテ・フォン・クレーフエとの間に息女一人を儲けたが、後、近縁過ぎる、との理由で離婚(カトリック教会では本来離婚は許されないが、よほどの理由がある、と教皇や大司教などが認めて、宥免状を出すことがあった。もとより王侯の離婚であれば莫大な喜捨と引き替えである。その理由の一つが「近縁過ぎる」。これは最初から分かっていることだけに見え透っている。一方、領土相続の関係上、実の伯・叔父と姪、伯・叔母と甥の結婚が認められるという反対の事例もあった。次いでデンマーク王ヴァルデマー一世の寡婦ソフィアと結婚したが、これは子なしに終わった。ルートヴィヒは第三次十字軍(総司令官はフリードリヒ赤髭王・帝)に参加したが、病に冒され帰国する際、キプロス島への航海中死んだ。従って嗣子のないまま、第四代テューリンゲン方伯には弟のヘルマン(ヘルマン一世)がなった。
- (64) アプリア地方 Land Apulia. 現イタリアのプツリャ州に当たる。長靴の踵の部分。肥沃な平地と丘陵に富む。ホーエンシュタウフェン朝の神聖ローマ皇帝はしばしばここに滞在した。
- (65) ザルツァのある殿 ein Herr von Salza. ザルツァを所領としていた騎士。ザルツァは現テューリンゲン州ノルトハウゼン郡郡庁所在地の都市ノルトハウゼンの一部。
- (66) 主塔と煖房居館 eine Bergfriede und Kemenate. 「ケムナーテ」はDSB三九七の注に記したように「ドイツ中世の城塞の居館(DSB九注参照)にある煖房を備えた居心地の良い部屋」だったが、十四・五世紀には居館そのものを意味するようになった。一般に今日では城塞内の煖房できるとしりした石造建築を指す。「ケメナーテ」Kemenate。
- (67) ヴュルツブルク Würzburg. 現バイエルン州ウンターフランケン地方の美しい都市。マイン川に沿う葡萄山から産出される白ワインはドイツ有数の銘酒である。
- (68) カノッサにおける皇帝ハインリヒ四世 Kaiser Heinrich IV. zu Canossa. 神聖ローマ皇帝ハインリヒ四世は聖職叙任権闘争で一旦教皇グレゴリウス七世に敗れ、破門を解いてもらうため、教皇が滞在していたトスカーナ女伯マティルデのカノッサ城の門前で、修道士の衣に身を包み、裸足で、雪が降る中断食と祈りを続けた。一〇七七年一月二十五日から三日間のこと。「カノッサの屈辱」Umilazione di Canossa。
- (70) 馬巢織りの懺悔襯衣 Büßerhand. 懺悔の苦行をする者が身に着ける馬の毛を織り込んだちくちくと痛い粗毛の肌着。
- (71) 魂哭山 Harseleben. 「魂たちが哭くのを聴け」山。
- 代願 Fürbitte. DSB四五五注参照。

- (72) ゼツテルシユテット Sättestätt. テューリンゲン州ヴァルトブルク郡東部、アイゼナハの十五キロほど東、ヘールゼル川河谷、ヘールゼルベルク南東斜面の麓にある集落。現在はヘールゼルブルク＝ハイニヒ地方自治体の一部。  
 ルートヴィヒ温良方伯 Ludwig der Milde. DSB四五六注参照。
- (73) 妖怪と化し怖いホレの姿となつて als Schreckgespenst und Schauerhölle. 「シャウアーホレ」(怖いホレ) は名高い「ホレ夫人」の一面。ホレ夫人(ホレのおばさん) Frau Holle は日本の山姥にも比せられる女の精だが、働きの少女たちには極めて親切な一方、怠け者には大層恐ろしく、残酷になる。同様の超自然的存在「ベルヒタ」Perchtaにも「美しいベルヒタ」と「醜いベルヒタ」の両相がある。「ベルヒタ」は「ベルヒタ」「ベルタ」とも。DSB一二三注参照。  
 ほほうほいほい Hulloh und Hussa. 狩猟の掛け声。DSB八一をも参照。
- (74) 車輪に「手足を」編み込まれた連中 auf Rader geflochten. 車裂きの刑に処された者たち。「車裂きの刑」についてはDSB一七二注参照。
- (75) イクシオン Ixion. ギリシア神話。人間の分際で女神ヘラに通じようとしてその夫たる主神ゼウスに罰せられ、燃える車輪に縛り付けられて奈落の空中を絶え間なく回転している。
- (76) 忠実なエツカルト der treue Eckart. 'der getreue Eckart' とも。ゲーテの詩「忠実なエツカルト」Der getreue Eckart (1813) やティークの「忠実なエツカルトとタンホイザー」Ludwig Tieck: Der getreue Eckart und der Tamnhäuser (1799) の主要登場形態。歩きづめのユタヤ人 der laufende Jude. DSB一八参照。「永遠のユタヤ人」Ewiger Judeのこと。これも同上参照。
- (77) ヘロデの娘 des Herodes Tochter. サロメのこと。サロメは古代パレスティナの領主ヘロデ・アンティパス(ヘロデ大王の子)の義理の娘かつ姪。その母ヘロデシアはヘロデ・アンティパスの弟の妻だったが、夫の死後サロメを連れ、亡き夫の兄に再嫁した。サロメは義父の前で踊り、なんでも望みの品を、と言われ、母の示唆通り、囚われている洗礼者ヨハネの首を、と答えた。サロメの母は、夫の兄と再婚したことをヨハネに責められ、彼を憎んでいたのである。ただし新約聖書には「サロメ」という名はなく。「ヘロデシアの娘」とあるのみ。マタイ伝十四章一二節、マルコ伝十六章十四―二十九節。
- (78) 第ヘルマン sein Bruder Hermann. 第四代テューリンゲン方伯ヘルマン二世(在位一九〇―二二七)。学芸・芸術の大いなる庇護者として有名。一一八二年ヴェットェイン伯ハインリヒ二世の寡婦ゾフィーエ・フォン・ゾンマーシエンブルク(ザクセン宮中伯フリードリヒ六世の息女)と結婚、二人の息女を儲けた。初婚でマイゼン辺境伯デイトリヒ(一二二一死去)に、次いでヘンネベルク伯ポッポ十三世に嫁いだユッタ(一一八四―一二三五)とオルラミュンデ伯にしてホルシュタイン伯アルブレヒトに嫁いだヘドヴィヒである。一一九六年バイエルン公オットー一世の息女ゾフィーエと再婚、六人の子女を授かった。内四人を挙げる。

- (82) 第五代テューリンゲン方伯ルートヴィヒ四世、第七代(ルードヴィンゲン家としては最後の)テューリンゲン方伯にして対立ドイツ王ハインリヒ・ラスペ、アグネス(DSB四六五注参照)、ドイツ騎士団長コンラート。  
 教皇ウルバヌス Papat Urban. ウルバヌス四世(在位一二六一—一六四)。当時イタリアはホリエンシユタウフェン朝神聖ローマ皇帝と教皇との角逐の場となっており、イタリア諸都市や貴族たちは皇帝党と教皇党に分かれて争っていた。神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世(シチリア王としてはフェデリーコ)の庶子マンフレート(シチリア王マンフレデー)に対抗させようとフランス王ルイ九世の弟アンジュー伯シャルル(シャルル・ダンジュー)を一二六三年七月シチリア王(カルロ一世)に封じたが、シャルルが手取っている内にマンフレデーが中部イタリアに侵攻。ウルバヌスは味方の都市ペルージャに逃亡したが、そこで一二六四年十月に死んだ。
- (83) ご聖体の祝い、das Fronleichnamfest. 三位一体の祝日後の木曜日(復活祭の日曜日後六十日目)に行われるカトリック教会の重要な祝祭。聖体<sup>ホスト</sup>を<sup>ホスト</sup>餅<sup>パン</sup>を入れた<sup>ホスト</sup>聖体<sup>パン</sup>顕<sup>示</sup>台(DSB一一〇注参照)を司祭などの聖職者が捧持して教区を信徒一同と共に巡る。  
 蝗<sup>いも</sup>の王 Heuschreckenkonig. ヴルビウスの『メルゼブルク年代記』が伝えるところによれば、一五四二年夥しい蝗の群れがリトアニア、プロイセン、ポランド方面からマイセンに來襲、巨大な水車のようにぐるぐると空中を旋回して、天日を遮った。聖エギディウスの日(九月一日)にはライプツィヒとドレスデンの間にあるウルツェンの町にまで達し、膝丈ほどにまで地面を埋めた。雀ほどの大きさで、形相<sup>まよう</sup>といい脚<sup>あし</sup>といい鋭爪<sup>とが</sup>といい恐ろしい外観のこやつらの王がここで捕らえられ、描かれ、ライプツィヒに保管された。
- (84) 托鉢修道会 Betelbrüder. 莊園領主化した既存修道会の腐敗に対する反省から生まれた、私有財産を認めず、信徒の善意の布施だけで生活することを宗規とする中世中期以降の修道会。特にフランチェスコ会、ドミニコ会、カルメル会、アウグステイノ修道会をいう。やがて教皇に認知され、カトリック教会の教権<sup>じくけん</sup>制度に組み込まれて行った。しかしながら十四世紀頃には墮落して物議を醸<sup>か</sup>す者たちも少なからず出るようになった。
- (85) ヴアルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ Walter von der Vogelweide. 一一七〇年頃—一二三〇年頃。最も重要なドイツ叙事詩人とされる。ナイトハルト、別名ロイエンタール(十三世紀前半)や女人讚美<sup>フレイグロ</sup>と添え名されたハインリヒ・フォン・マイゼン(DSB六五参照)と並び称される。
- (86) ラインハルト・フォン・ツヴェツェンまたの名ライマール・ツヴェーター Reinhart von Zwetzen, auch Reimar Zweter genannt. 一二〇〇年頃—一二四八年以降。
- (87) ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ Wolfram von Eschenbach. 一一六〇/八〇—一二二〇年頃/以降。

- (89) ハインリヒ・フォン・オプターディングン Heinrich von Ofterdingen 十三世紀の伝説的歌手。これまでのところ実在したと証明しうる典拠は無い。初期ロマン派の文人ノヴァーリス（本名フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク）の断片しか残っていない小説の題名（邦訳『青い花』）にもある。
- (90) 職匠ピテロルフ Meister Biterolf 未詳。
- (91) 徳高き書記と添え名されたハインリヒ・フォン・リスバハ Heinrich von Rissbach der tugendhafte Schreiber genannt. 未詳。
- (92) クリンゾル Kinsor: クリンシヨル Kinschor, クリンクゾル Klingsor, クリンゲンゾル Klingsor, クリンゲンゾル Klingsor によ。ドイツ神話に登場する魔法使い。英国ロンドン神話のマーリン Merlin に似た役割を演ずる。ヴォルフラム・フォン・エツシエンバハ作である十三世紀の長大な韻文物語『Parzival』にはシャステルマルヴェイユ城主テラ・デイ・ラボロ公クリンシヨルとして、また、十四世紀半ば成立とおぼしきマネッセ写本（中世盛期ドイツの代表的宮廷恋愛歌人百四十人の詩歌と歌人を描いた美しい挿絵（細密画））を収めた豪華な彩色写本）にはヴァルトブルクの歌合戦でヴォルフラムに対抗する歌人ハンガリア王クリンゲンゾルとして登場。
- (93) ジーベンビュルゲン Siebenbürgen 現ルーマニア中部、北西部の歴史的地域名。ドイツ語。ルーマニア語ではトランシルヴァニヤないしアルデアル。ハンガリア語エルデーイ。
- (94) ヘレグラーフエン館 Hellegrafenhof. ベヒシュタインは上記のつとく綴っているが、「ヘルグラーフェンホーフ」Hellegrafenhofとも。旧市街の西部、かつての市門である聖ゲオルク門に隣接してヘルグラーフェン館の焼房居館（「ケムナーテ」）が保存されている。アイゼナハ市立図書館本館として使用。ヘルグラーフェ、ないしヘレグラーフエ一族はアイゼナハ市参事の家系の一つだった。聖エルゲン門 Sankt Jurenthor. 物語の整合性としては「聖ゲオルク門」とすべきである。ベヒシュタインは他の資料の記事を用いて、いかにも彼らしくうっかり放置したのである。ただしアイゼナハにはこの名の門もあり、DS五六四に登場する。きざしは無字な物知らず Du bist ein laie snipen snip - 原文は上記の通り。
- (95) ヘルゼル川 die Hørsel. テューリンゲンのヴェラ川の支流の一つ。
- (96) 可愛い小さなエルジューベト ihr liebes Elisabethlein. ハンガリア王エンドレ二世と北イタリアのメラノ公女ジェルトルデーの間に生まれた六人の子女の一人エルジューベト Erzsebet (一二〇七—一二三二) は四歳でルドヴィング家のルートヴィヒと婚約、テューリンゲンにやって来た。エリーザベト・フォン・ウンガレン Elisabeth von Ungarn である。彼女は一二二一年アイゼナハにおいて十四歳で第五代テューリンゲン方伯ルートヴィヒ四世（生誕一二〇〇。在位一二二七—一二七）と結婚、子息ヘルマン（一二二二—一二四二）、息女ゾフィー（一二二四—一二七五）、ゲルトルート（一二二七—一二九七）の三児を儲けた。夫は第六次十字軍に参加

したが、途次、イタリア半島の長靴の踵オトラントで熱病死。子息ヘルマンは第六代テューリングン方伯ヘルマン二世となったが、僅か五歳だったため、叔父ハインリヒ・ラスペの後見を受け、十九歳で死去。叔父がルドヴィンゲン家最後で第七代方伯ハインリヒ・ラスペ四世となる。エリーザベト・フォン・テューリングン Elisabeth von Thüringen は一二二八年、子息ヘルマンを後に残し、二人の息女とともにヴァルトブルク城を出て、アイゼナハで暮らすのが、やがて伯父の居城バンベルクへ移り、更にマールブルクで一二二六年以降の讒悔聴聞師であるコンラート・フォン・マールブルク(異端審問官でもあったこの男は彼が異端告発を行ったさる諸侯の手の者により一二三三年殺された)の厳しい監督の下、自身の資金で建てられた病院で働き、一二三一年二十四歳の若さで逝去。一二三五年列聖される。彼女の墓所の上にドイツ騎士団が教会を建立、この聖エリーザベト教会は一二八三年完成。現在はプロテスタントのエリーザベト教会となり、聖遺物崇拜を防ぐため、柩——「黄金の聖遺物櫃」Goldener Schrein——から遺骨が取り除かれた。遺骨はウイーンの聖エリーザベト修道院その他に祀られている。

(99) かのテューリングン王イルミンフリートなごしヘルミンフリート *der Thüringer=König Irminfried oder Herminfried* D S B 四二二参照。尤もここでは王名はイルメンフリート *Irmentried* なごし。

(100) お妃様はなにもかも恵んでおしまい、*wie sie alles verschenke*。方伯の召使いどもがこうしたことを方伯に訴える筋書き自体には無理がない。饗宴の残り物(壘に残った酒、大皿に残った肉や魚鳥の類)は元来関係下僕一同の役得なのであって、彼らはそうした酒食を自分たちで消費するばかりか、商人に下げ渡して幾らかの金にしていたのだが、方伯妃がそれらを侍女たちに命じて集めさせ、全て貧民に施すとすると、これはもう口惜しい限り。あることないこと、主君に讒言したくなるのも、浮き世の沙汰。しかしながら、妻の施しを咎めようとする方伯といわゆる「薔薇の奇蹟」*Rosenwunder* の伝説は、終始幼馴染みの妻エリーザベトを愛し、その貧民・病人救済事業を支持した若き方伯にはそぐわない。薔薇の奇蹟のモテイフはポルトガル王妃(在位一二八二—一二三二)で後フランチェスコ派修道女となった聖イザベルに纏わる伝説にも見える。

(101) ニウヴェンブルク *Niuenburg*。D S B 四五四、四五五で似寄りの名称で出るテューリングン方伯の根拠地の一つノイエンブルク城のこと。

(102) 方伯ルートヴィヒの妹アグネス *Agnes Landgraf Ludwigs Schwester*。一二二五年オーストリア公レオポルト六世の子息ハインリヒ(一二二八死)と結婚。一二二九年ザクセン公アルブレヒト一世と再婚。

(103) 方伯ルートヴィヒ *Landgraf Ludwig*。テューリングン方伯ルートヴィヒ六世。方伯位継承当初マインツ大司教との間に由しい葛藤が生じたものの、神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世に調停され、彼の治世下でテューリングンにおけるルドヴィンゲン家の支配の栄華は存続した。しかし同時にその死によって衰退を迎えたわけである。前掲注「可愛い小さなエルジューベト」で記し

たように、十六、七で第五代テューリングン方伯となり、二十七歳になつたばかりで病死。「ルートヴィヒ 聖者方伯」 Ludwig der Heiligeとも添え名されるが、教会から列聖されたわけではない。彼の十字軍参加はエリーザベットの懺悔聴聞師コンラートの従惠があつたためとやら。コンラート・フォン・マールブルクなるこの坊主が方伯夫妻の人生に介入しなかつたら、二人はずつとずっと幸せだったろうに。

(104) 自由通行権 *freies Geleit*. 「自由通行権」(「安全通行権」 *sicheres Geleit*とも) は現代用語では外交官などに与えられる通行権。「護送権」 *Geleit*とは中世の用語で、しかるべき金額と引き替えに君侯領土内の安全通行が護衛兵により保証されること。

(105) 関税免除 *Zollfreiheit*. 中近世のドイツでは、都市に貨物を搬入する場合、市門で税関吏がこれを改めて、品目により関税を課した。これをどこでも免除されれば商人はまことにありがたい。

(106) シリング *Schilling*. 七九四年カール大帝の貨幣改革時の銀貨の価。一カロリング銀ブフント(ほぼ四〇六・五グラム) ≡ 二〇シリング ≡ 二四〇ブフェニヒ。近世ドイツのシリング銀貨(グロッツシエン銀貨と同等)も十二ブフェニヒ。一三〇〇年頃のケルンでは卵百箇が一三二ブフェニヒ。林檎百箇が七二ブフェニヒ。

(107) ヴュルツブルク *Würzburg*. *DSB*四五六注参照。今日も司教座が置かれている。一一六八年同市で開かれた帝国議会において神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世(赤髭帝 ≡ バルバロッサ)は当時の司教ハロルトに公爵位を授けた。以来ヴュルツブルク司教は「領主司教」 *Fürstbischof*と名乗り、「フランケン公」 *Herzog in Franken*と称することができるようになった。この伝説でテューリングン方伯ルートヴィヒが略奪行為に及んだフランケンの騎士たちは、はかりか、ヴュルツブルク司教にも私闘を宣言しているのは、こうした背景があつたからか。

(108) 以前この連中の先駆けともいべきあの御仁がルートヴィヒの伯父に葡萄酒を返却したように *wie jener ihr Vorgänger an Ludwigs Ohm den Wein*. *DSB*四五六参照。「ルートヴィヒの伯父」とは鉄方伯 *アイゼンハルト* 方伯。

(109) ルフシユ城 *Schloß Lebus*. *レプスLebus* (ポーランド名 *ルブシユLubusz*) なる町は現在ブランデンブルク州メルキシユ ≡ オーダーラント地方南東部の小さい町。これか。また *ルブシユLubusz* はポーランド西部の歴史的な地名でもある。温暖肥沃、ポーランド唯一のワイン生産地。このいづれを指すにせよ、これらとテューリングンとの間にはザクセン諸邦などが挟まっているので、こうした遠征はまず不可能と思われる。

(110) ハインリヒ・ラスベ *Heinrich Raspe*. 兄の第五代テューリングン方伯ルートヴィヒ四世が十字軍に参加、パレスティナに赴く途次、一二二七年オトラントで病死すると、兄と兄の妻エリーザベトの子息ヘルマン二世(第六代テューリングン方伯。一二二七年には漸く五歳)の摂政となる。一二四一年十九歳で急死した甥の後を襲い、第七代にしてルードヴィング家最後のテューリング

ン方伯(在位一二二七—四七) ハインリヒ・ラスベ四世(一二〇四—四七)。神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世およびその息子コンラート四世の対立王(一二四六—四七)でもあった。兄の寡婦エリーザベトとの関係は明らかに緊張していたが、彼女と娘たちをヴァルトブルク城から追い出したとか、彼女の子息第六代テューリングン方伯ヘルマン二世を毒殺したとかいう伝説は根拠に乏しい。ブランデンブルク辺境伯アルブレヒト二世の息女エリーザベト、オーストリア公フリードリヒ二世の妹ゲルトルト・フォン・バーベンベルク、ブラバント公ハインリヒ二世の息女ベアトリクスと結婚したが、いずれも子に恵まれなかった。そこで甥に当たるヴェッティン家のハインリヒ三世——腹違いの長姉ユッタとその初婚の夫マイセン辺境伯ディートリヒの子息——を後継者として指名しておいたが、姪——兄とエリーザベトの長女でヘルマン二世の妹——のゾフィー(ブラバント公ハインリヒ二世と結婚。彼女の息子ハインリヒは初代ヘッセン方伯)はこれを承知しなかった。そこで従姉弟(ゾフィーは一二二四生、ハインリヒは一二一五生)同士が奇烈な内戦、テューリングン⇨ヘッセン継承戦争を開始する。

ユッタ Jutta. DSB四六〇注参照。

- (112) (111) マイセン辺境伯ハインリヒ高貴伯 Heinrich der Erlauchte, Markgraf von Meißen. 一二一五頃—一二八八年。その公正、高貴な振る舞いにより、高貴伯と添え名された。マイセン辺境伯ディートリヒ(苦境伯 der Bedrängte)と第四代テューリングン方伯ヘルマン一世の長女ユッタの子息。六歳の折父が死んだため母方の叔父第五代テューリングン方伯ルートヴィヒ四世の後見の下マイセン辺境伯(在位一二二一—八)。やはり母方の叔父第七代テューリングン方伯ハインリヒ・ラスベ四世の没後、かねてのその指名通り、テューリングン方伯領を領有、ヴェッティン家初代テューリングン方伯ハインリヒ三世(在位一二四七—六五)となった。子息はアルブレヒトとディートリヒ。従姉ゾフィー(ゾフィーア)との間で戦われたテューリングン⇨ヘッセン継承戦争 Thüringisch-hessischer Erbfolgekrieg (テューリングンの大部分とヘッセン伯爵領の支配権を繞る戦争。一二四七—五〇/一二五四—六四)の結果テューリングン方伯領領有が確立すると、方伯領とザクセン宮中伯領を長男アルブレヒトに、ラウジッツ辺境伯領およびランツベルク辺境伯領を次男ディートリヒに支配させた。

- (113) ……: マイセン辺境伯ハインリヒ高貴伯を配偶としていた ……: hatte zum Gemahl Heinrich den Erlauchten, Markgrafen von Meißen. 誤り。ユッタの夫は前掲注およびDSB四六〇注に記したようにディートリヒである。ここに記されているハインリヒは前掲注にあるようにユッタの子息である。

- (114) 加えて神聖ローマ皇帝空位時代であり zudem war die kaiserlose Zeit. フリードリヒ二世(在位一二一五—五〇)、その息子コンラート四世(在位一二五〇—五四)に対立してハインリヒ・ラスベは少数の選帝侯によりドイツ王に選出され、対立王(在位一二四六—四七)となり、またハインリヒ・ラスベが死ぬと、ホラント伯ウイレム(在位一二四七—五四)が新たに対立王と

- なつたので混乱が続いた。ドイツ王が二重に選出されて対立、神聖ローマ帝国君主の位が極めて不安定になった「大空位時代」  
 Interregnum (一二五〇／五四／五六―七三)の始まりである。一二七三年ハプスブルク伯ルートドルフ一世がドイツ王に選出されるまで続く。彼も皇帝戴冠はしていないが、神聖ローマ帝国君主である。
- (115) 主馬頭ヘルヴェイク・フォン・シュロートハイム der Marschall Helwig von Schlotheim. 主馬頭は宮内大臣格で主君側近の官職。テューリンゲンの下級貴族だったシュロートハイムの殿たちは古くからその地位と封土によりかなり重んじられていたようである。
- (116) 宣誓補助人 Eideshelfer. DSB四五―注参照。
- (117) この手袋を取れ nimm diesen Handschuh. 決闘の申込みである。
- (118) 市門は開かれなかった das Thor ward ihr aber nicht aufgethan. この時アイゼナハはマイセン辺境伯ハインリヒ高貴伯側に属し、この後の叙述の時にはブラバント公妃に加担していたわけ。終局的には一二六四年ハインリヒ高貴伯の手に帰した。
- (119) ハインリヒ・フェルスバハ Heinrich Velsbach. アイゼナハ市参事の一人。伝説によれば以下のごとし。アイゼナハの市参事会はゾフィーア(ゾフィー)とその子息「ブラバントの子ども」(後掲注参照)に味方して、マイセン辺境伯をヴァルトブルク城から追い出そうとしたが、辺境伯側は逆にアイゼナハを急襲、内通者の助けもあって、アイゼナハを占拠した。市参事会員は全員捕虜となり、いくらかは斬首されたが、最も熱心なゾフィー党だったハインリヒ・フェルスバハは極刑として投石機でヴァルトブルク城から下方の草地目掛けて射出された。
- (120) テューリンゲンはどうしたってブラバントの子どものもんだあ Thüringen gehört doch dem Kinde von Brabant! 「ブラバントの子ども」das Kind von Brabantとはブラバント公妃ゾフィーの子息ハインリヒ(一二四四―一三〇八)のこと。開戦時僅か三歳。初代ヘッセン方伯になっても添え名して「子どものハインリヒ」Heinrich das Kindといわれた。
- (121) 戦役は九年間にも亘って続いた Neun Jahre lang dauerte der Krieg. テューリンゲン⇨ヘッセン継承戦争は一二四七年から一二六四年(同年九月十一日「ランクスドルフの和約」Langsdorfer Frieden)まで十七年間掛かった(一二五〇年一旦和睦したが、一二五四年再度開戦)。ブラバント公妃ゾフィーは子息ハインリヒのために全遺領を獲得することはできなかったが、ヘッセン伯爵領の支配権は確保した。かくしてヘッセン方伯ハインリヒ二世が誕生。マイセン辺境伯はテューリンゲン方伯領を得て、以降テューリンゲン方伯の称号をも帯びた。
- (122) 何人もの子息 mehrere Söhne. 二人。
- (123) ハインリヒ高貴伯の子息アルブレヒト Albrecht, Heinrich des Erlauchten Sohn. その所業から、アルブレヒトろくでなし伯 Albrecht der Entarteteと綽名された。テューリンゲン方伯(在位一二六五―一九四)、父の死後マイセン辺境伯(一二八八―九二)

をも継ぐ。女官クニグンデ(クンネ)・フォン・アイゼンベルク(一二四五―一八六)を愛人としたので、三男一女を産んでいた正妻マルガレーテは一二七〇年ヴァルトブルク城から逃亡し、最終的にはフランクフルト・アム・マインへ向かい、六週間後死亡。そこでクニグンデを後妻とし、彼女との間にできた子息アルブレヒト(アピッツ)にテューリッゲン方伯領を継がせようとしたが、ためにマルガレーテの子息たちハインリヒ、フリードリヒ、デイツマンと紛争が起こる。最終的にはフリードリヒがテューリッゲン方伯・マイセン辺境伯となり、アルブレヒトは子息から年金を受け取って暮らし、一三二四年エアフルトで死す。なおクニグンデ(クンネ)の死後アルブレヒトはアルンスハウク伯爵家出身のエリーザベトと三度目の結婚をした。この女性がアルブレヒトとその子息フリードリヒの間を調停したものでらしい。

(124) マルガレーテ Margarethe. マルガレーテ・フォン・シユタウフェン(一二三七―七〇)。神聖ローマ皇帝フリードリヒ二世とその四番目の妃イザベラ・フォン・エングラントの娘。一二五四年ないし五六年テューリッゲン方伯アルブレヒト二世と結婚。二人の間にハインリヒ(一二五六―八二)。シレジアで行方不明)、フリードリヒ(添え名として「噛まれ傷」*der Gebissene*。一二五七―一三三三)、デイトリヒ(一二六〇―一三〇七)、アグネス(一二六四以前―一三三二・九以後)が生まれた。一二七〇年フランクフルト・アム・マインのヴァイスフラウエン修道院で死去。

(125) 献酌侍従 Schenk. 酌人。酌頭。中世王侯の宮内職の一つ。酒蔵やワイン畑を管理する役職。王侯の側近に仕える。信頼される下級貴族が任命された。やがて貴族の位ともなり、世襲されるようになった。

(126) 騎士の館 Rittershaus. 現存。ヴァルトブルク城への入口の西側にある。十五世紀後期に建てられた木骨建築で、おそらく召使いや衛兵の宿舎として用いられた。ここには虜囚とされた騎士たちの牢獄もあった。

(127) クラインベルク城 Burg Kraiberg. クライエンブルク Kraiburgは現テューリッゲン州ヴァルトブルク郡の城の廃墟。一一五五年ヘルスフェルト修道院の城砦としてその名が出る。フランケンシュタイン一族が同修道院から封土として与えられた。帝国内で高い評価を受け、避難所だった。一一七〇年テューリッゲン方伯妃マルガレーテ・フォン・シユタウフェンを匿ったのは有名。

(128) 尚書長官 Erzkanzler. 中世神聖ローマ帝国におけるマインツ、ケルン、トリリア大司教の称号。  
アピッツ Apiz. DSB四六八注参照。

(130) 皇帝アードルフ・フォン・ナッサウ Kaiser Adolf von Nassau. ナッサウ伯。ローマ王・ドイツ王(在位一二九二―九八)。神聖ローマ皇帝ルードルフ・フォン・ハプスブルクの死後、その子息アルブレヒト一世の対立王として選帝侯らから推戴されたが、領土拡張を推進、ドイツ諸侯の反感を買い、一二九八年廃位された上、対立王に選挙されたアルブレヒト一世(在位一二九八―

- 一三〇八。DSB六注参照)と戦って敗死。
- (131) クンネ・フォン・アイゼンベルク Kunne von Eisenberg。クニゲンデ・フォン・アイゼンベルク。DSB四六八注参照。類に噛まれ傷のあるフリードリヒ Friedrich mit dem Wangenbiß。DSB四六八にあるように、フリードリヒは幼時母マルガレーテに片頬を噛まれ、その傷が残った由——尤も真偽は不明——で、「噛まれ傷のフリードリヒ」Friedrich der Gebisseneと綽名された。また向こう見ずのフリードリヒFriedrich der Freidgeとも。マイセン辺境伯(在位一二九二—一二三三)、テューリンゲン方伯(在位一二九八—一二三三)フリードリヒ一世。一三二一年——一三二七年生まれなのでこの時六十四歳——脳卒中を起こして肉体が麻痺、一三三三年十一月十六日ヴァルトブルク城で没。いずれの所領・称号もその子息フリードリヒ(二世)が継いだ。
- (133) アイゼナハの抑え城クレンメ die Zwingsburg Klemme zu Eisenach。現存(ただし荒廢)。十三世紀半ばアイゼナハ現旧市街北端にアイゼナハ市民への抑えとして築かれた水城。築城者はブラバント公妃ゾフィーないしその敵対者マイセン辺境伯ハインリヒ。アイゼナハ市民に対する威嚇および力の象徴としての軍事拠点だった。一三〇六年アイゼナハ市に買い取られ、破却されたが、後再建された。
- (134) ガウルアンガー Gaulanger。アイゼナハ市外の地名だったようだ。ファウルアンガーとかゲールアンガーと記した伝説もあるらしい。「ガウルアンガー」は「馬の皮剥場」。かつて廢馬を殺して皮を剥く作業場があったに違いない。
- (135) テンネベルク Tenneberg。テンネベルク城Burg/Schloß Tennebergはテューリンゲン方伯家の中世の城塞の一つ。方伯家にとっての重要性はヴァルトブルク城に次いだ。テューリンゲン方伯家の菩提修道院ラインハルツプルン(DSB四三三、四五五、四五六、五五五など参照)は直線距離で五キロしか離れておらず、温良方伯ルートヴィヒ(三世)の時代、同修道院の防禦拠点となった。小さい側対歩馬 Zelterlein。側対歩馬とは、側対歩Zelt(バスPaßとも)——同じ側の両脚を片側ずつほぼ同時に上げる歩調——で進むように仕込まれた馬。これだと静かな騎行になるので聖職者や女性の乗用馬として好まれた。パレードや旅行の場合は、王侯貴族であれ商人であれ、婦人でなくともこの方が快適だったことは勿論である。
- (137) 彼の全ての意図が実の甥シユヴァーベン公ヨーハンの弑逆の凶手によって挫かれるという不測の事態が起こった Da geschah es, daß all seinem Willen ein Ziel gesetzt ward durch seines Neffen, Herzog Johanns von Schwaben, meuchelmörderische Hand。神聖ローマ皇帝アルブレヒト・フォン・ハプスブルクは、叛乱を起こしたスイスの所領に軍を進めようとした途次、一三〇八年五月一日ヴィンディシユ(現スイスのアールガウカントン)近郊で実の甥(アルブレヒトの弟、オーストリア公にしてシユヴァーベン公だったルードルフ二世の子息)シユヴァーベン公ヨーハン(一二九〇—一二三三?)により殺害される。DSB六および注参照。楽天方伯との添え名もある den man auch den Freudigen nennt。ベヒシユタインは上記のごとく記しているが誤り。またの添え
- (138)

- (139) 名は「向こう見ず」「勇者」der Freidigeであつてder Freidigeではない。  
 主の憐れみの日曜日 Sonntag Misericordias. 復活祭後の第二日曜日であるSonntag Misericordias Dominiのこと。復活祭後の第一日曜日から聖霊降臨祭の前の日曜日まで六回の日曜日にはそれぞれ聖書に由来するラテン語名称が付けられている。これは旧約聖書詩篇八十九篇二節「われエホバの憐憫を乞ひしへにうたはん」Misericordias Domini in aeternum cantabo.から。  
 聖書詩篇八十九篇二節「われエホバの憐憫を乞ひしへにうたはん」Misericordias Domini in aeternum cantabo.から。  
 洗足修道士 Barfüßer. フランチェスコ会、ドミニコ会、カルメル会、アウグステイノ修道会など托鉢修道会の修道士。清貧を旨とし、裸足、あるいは靴下無しサンダル履きで歩いたので、この呼称がある。ここではドミニコ会の修道士を指している。  
 楽天方伯フリードリヒ der Landgraf Friedrich der Freidige. DS B四六九の二箇所の注参照。  
 (142) (141) 十人の乙女たち Die zehn Jungfrauen. 新約聖書マタイ伝二十五章一―十三節。灯火を持って花婿を迎えに出るよう命じられた十人の乙女と天国の譬え。五人は利巧で灯火の油をきちんと用意していたが、五人は愚かで油の用意をしていなかった。夜中に花婿が来ると、眠っていた乙女たちは皆起きたが、内愚かな五人は慌てて油を買いに外へ出て行った。帰った時には邸の門は閉ざされていて、開けてください、と頼んでも、返辞は「まことに汝らに告ぐ、我は汝らを知らず」だった。
- (144) (143) 「まことの信仰のために燃える洋灯を携えるもの」bornte Lampeln tragen czu eime rechten bekenntnisse. 原文は上記の通り。  
 見ヨ、花婿来タレリ Ecce sponsus venit. ラテン語。  
 エッ、ホレンス、ウェネト。ニ云。Sit willekom ir vzerwelten kinder mynl usw. 原文は上記の通り。  
 選ばれし我が子らよ、ごきげんよう。ニ云。Sit willekom ir vzerwelten kinder mynl usw. 原文は上記の通り。  
 (146) (145) 聖ナルカナ、聖ナルカナ、聖ナルカナ Sanctus, sanctus, sanctus! ラテン語。  
 (147) 栄光ト誉レノアランコトラ Gloria et honor. ラテン語。  
 (148) キリストの苦難の死を介して乞ひ求める durch seinen bitern Tod ihn bitend. あなたはわたくしは罪人のために十字架に上り、苦難の死を遂げられたのではないか。ですから、なにとぞわたくしは罪人をお救しください、との意味であろう。  
 (149) 我らの愚かしさを赦したまえ。／我らを汝の大いなる恵みに与らしめたまえ。／汝の御母マリヤムが／我ら憐れなる者らをして汝の尊厳に加わらしめんことを。Vns hat vorsumit unse tumpheyt / nu laz vns genize dyner grozen barmherczigkeyt / ymme Mariam, die liben mutir dyn. / vn laz vns armen czu dyner wertschaft inl. 原文は上記の通り。  
 (150) 然り、然り、汝ヲニ告グ、我ハ汝ヲラ知ラズ Amen amen dico vobis nescio vos! ラテン語。「アーメン」を除けば、新約聖書マタイ伝二十五章十二節。  
 (151) わたしはそなたらが何者なるや知らぬ。Ich entweiz nht. wy ir sit. 原文は上記の通り。  
 (152) 憐レミタマエ、憐レミタマエ、憐レミタマエ、ソナタノ民草ヲ Miserere, miserere, miserere populo tuo. ラテン語。

- (153) 天地ハ移ロイ行クトモ、我ヨリ出シ詞ハ永久ニ続カシク  
 原文ラテン語は上記の通りだが、*coelum* は *caelum* の誤り。新約聖書ルカ伝二十一章二十三節に同義の文がある。  
 (154) ベールゼブブとルシフェル *Beelzebub und Lucifer* 「ベールゼブブ」はキリスト教神話における魔物で、民衆の間では悪魔の別名。旧約聖書列王紀下第一章二節、三節に「エクロンの神バアルゼブブ」として出る。「バアルゼブブ」*Baal Zebub* は「蠅の王」と訳されるが、おそらく本来の名は「バール・ゼブル」*Baal Zebul* (崇高なる主) で、これをヘブライ人が卑小化したものであろう。エクロン *Ecron* はパレスティナの海岸平野に定住していた「ペリシテ人」(フィリスティア人)の五市連合を構成する自治都市の一つで、バール・ゼブルはそこの都市神だったわけ。初期ユダヤ時代にこのカナン人の神は偽神、偶像神の呼称とされた、と考えられる。「ルシフェル」(この片仮名表記はイスパニア語 *Lucifer* ないしポルトガル語 *Lucifer* の発音近似値) は、ローマ神話においては暁の明星(金星)の人格化「ルーキフェル」*Lucifer* であり、「光明を齎す者」の意。キリスト教会では、かつて大天使だったが、思いついて神と対立し、天界から追放された墮天使長とされ、従ってサタン(の別名)である。  
 (155) 正しき裁きは行われねはならぬ。／呪われたる者どもは我が許より去り、／深き地獄に落ち、／悪魔どもの仲間となるがよい。  
*Recht gerichte sal gesche. / Die vorvluchten muzzen von my ge / in dy tifen helle / vn werde der tufele geselle.* 原文は上記の通り。  
 (156) プレレ、ヘレ、プレレ！ *Prelle here prelle!* 原文は上記の通り。  
 (157) お母上様、お黙りあれ *Swigite vrowe mutir myn.* 原文は上記の通り。  
 (158) 「怒りの日」*Dies irae* カトリック教会で鎮魂歌として歌われる聖歌の一つ。  
 (159) イカナル庇護者ヲ捜シ求メルベキヤ *quen patronum rogaturus.* ラテン語。この歌詞はケーテの『ファウスト』第一部「大聖堂」*Dom*の場面で苦しみ嘆くグレートヒェンの科白と平行して歌われる合唱の一節でもある(三八二六行)。  
 (160) 哀しいかな、哀しいかな！ *O we vn o we!* 原文は上記の通り。  
 (161) いでや諸人よ、我らがイエスの見張り(「大天使聖ミカエル」の忘れざりしことを、憐れなる者らのために悼め。／我らの罪は我らが大いなる心痛に陥れ、／我らは地獄で大いなる苦しみを耐え忍ばねはならぬ。／汝ら女たちは我らの不幸を泣き、善事を行うよよく注意せよ。 *Nu claght armen alle. daz vnser je wart gedacht. / Vns haben vnsre sunde in groz herzeleit gebracht. / Wy muzzen in der helle grozen kummer dol (dulden) / yr vrowen weynet vnsre vngewelle vnd hutit vch, so tut ir wol.* 原文は上記の通り。  
 (162) 死人の方がむしろ教会への寄進の役に立つのではないか。／我らが神の怒りを受けるのは当然！ *Eyn tot baz hulde dem eyn*

- (164) (163) selgerete? / My verdinent gotis czorn! 原文は上記の通り。  
かくて我らは／おまえらは永遠に破滅ぞ！ Des sint wy / syt ir ewiglichen vortorn! 原文は上記の通り。  
選帝侯 Kurfürst. ヴォルムスの帝国議会におけるマルティン・ルターの言明の結果、神聖ローマ皇帝カール五世は、ルターを法律の保護外に置き、帝国から追放する、と宣告した(一五二二年五月二十五日)が、ルターの主君であるザクセン選帝侯フリードリヒ賢明侯——フリードリヒ三世(在位一四八六—一五二五)——はあらかじめ、一五二二年五月四日から一五二二年三月一日まで約十箇月に亘つて、秘かにルターをヴァルトブルク城に匿わせた。ルターはこのやむを得ざる休息を、新約聖書をドイツ語に翻訳するかねてからの計画を実行するのに用いた。
- (165) メーラ Mohra. 現テューリンゲン州ヴァルトブルク郡の小村。かつてマルティン・ルターの両親——ハンスとマルガレテー——はメーラに住んでいた(ただし一四八三年——ルターの生まれた年——ハンスは家族を連れてメーラを去っている)。一五二一年ルターはヴォルムスの帝国議会からウィッテンベルク(ルターは同地の大学で教えていた。一五〇二年ウィッテンベルク大学を創立したのはフリードリヒ賢明侯である)へ帰る途中、メーラへ寄り道して村の広場で説教した。
- (166) 郷士イェルク Junker Jörg. ルターのヴァルトブルク城滞在は極秘にしておかねばならなかったもので、この時期「郷士イェルク」との仮名を使った。イェルクはゲオルクの短縮形の一つ(北ドイツではユルゲン Jürgen、スイスではユルク Jurg が現在一般)で、十五・十六世紀のドイツで男子名として大いに好まれた。ベヒシュタインが龍を引き合いに出しているのは、龍退治で名高い聖ゲオルクを示唆しているわけ。
- (167) Ritterhaus. D S B 四六八注参照。  
騎士の館 Ritterhaus. D S B 四六八注参照。  
あいさ、あたしはまだ若くつて、／やさしく素直できりようのええ／あまっこだったもんだから、／だれもがあたしに惚れたんざ。  
Ja dieweil ech noch jüngk war. / da ech en zoartes, nettes, schiens Fräuchen war. / hat' mech jiedemoan liep! 原文は上記の通り。
- (170) (169) ああ、主イエス様、こいつあ噛むだべか ach Herr Jehohen! bieb! hä dann? 原文は上記の通り。  
神様がお助けくださるよう、Gott helf. Helf! Gott! とも。傍にいるだれかがくしゃみをしたり、しそうになったりした時、親切に唱えてやる縁起直しの言葉。現在では「お大事に」Gesundheit が普通。「徒然草」四十七段の「くさめ」(おそらく「糞食め」なる呪い)に相当する。
- (171) マリーエン谷 Marienthal. 現在アイゼナハを南北に貫く国道一九号線の一部、かつアイゼナハの通りの名称。アイゼナハの北部に位置する。

- (172) インゼルベルク Inselberg. インゼルベルク (標高九一六・五)。中部テューリングン山地北西半の最高峰。
- (173) (172) レンシユタイク、レンシユテーク、レンヴェーク、リンネヴェーク der Rennsteig, Rennsteg, Rennweg, Rinneweg, テューリングン山地、テューリングン片岩山脈、フランケン山地に亘るほほ一七〇キロに及ぶ尾根道にして境界道。アイゼナハを起点とし小村ブランケンシユタインが終点。
- (174) タバルツ Tabarz. 現テューリングン州ゴータ郡の小さな町。保養地。テューリングン山地北西部に位置し、大インゼルベルクとは四二〇メートルほどしか隔たっていない。
- (175) ザバルツ Sabarz. どうやら存在しないようだ。
- (176) ヴェネチア人 Venetianer. DSB三九四後半および注参照。
- (177) 粗金ちびすけ Erzmannerchen. 「粗金(金屬の粗鉱)を探すちびすけいやつら」くらいの蔑称。
- (178) 南国者 Wahle. ロン(ラテン語系)民族、特にフランス人、イタリア人に対する呼称。
- (179) ラウハ谷 Lauchthal. ラウハは現テューリングン州ゴータ郡ヘールゼル町の一部。近くにテンネベルク城があった。タバルツはラウハのすぐ南、ルーラ(DSB四五二)はラウハの西方に位置する。
- (180) レーン山地 Rhon. 現バイエルン州、ヘッセン州、テューリングン州の州境に跨る広大な中級山岳地帯。およそ一五〇〇平方キロ。
- (181) プロッテローデ Broterode. 現テューリングン州シユマルカルデン・マイニンゲン郡の小さな町プロッテローデ・トウルゼ・タール Broterode-Trusetalの一部。因みに「ローデ」は中部ドイツ、北ドイツの地名に多く含まれる。「ローデン」*roden* (開墾) によって得た土地の意。DSB四九〇「アゾルフフェロート」も、アゾルフなる男が開墾したのでこの名になった、とある。
- (182) 尋 Kafter. 約十六フィート。
- (183) 「カール五世の御旗」*Funn von Karles quintes*. 原文は上記の通り。
- (184) 皇帝カール五世 Kaiser Karl V. DSB八五および注参照。
- (185) 刑事裁判権 Blutgericht. 史的詳細は不明。識者のご高教を俟つ。
- (186) 旗幟掲揚権 Fahnenrecht. 史的詳細は不明。識者のご高教を俟つ。
- (187) この教会建立が始められしは、ルテルスなる修道士が、教皇攻撃の文書を初めて記せる時。されどルテルスの口はすぐさま塞がれたり。Diese kirche ist angefangen worden zu bauen als ein münch namen Lutherus wider die papisten angefangen zu schreiben, deme aber das mau bald gestopft werden sol. 原文は上記の通り。「教皇攻撃の文書を初めて記せる時」とはルターが、一五一七

- 年、いわゆる「九十五箇条の論題」95 Thesen をヴィッテンベルク城附属教会の門扉に貼り出したことを指すのであろう。
- (188) ヘッセン方伯フィリップス Landgraf Philippus von Hessen. ヘッセン方伯フィリップ一世(寛大方伯。在位一五〇九/一八一五—一五六七)。神聖ローマ帝国における宗教改革と文芸復興時代の最も重要な諸侯にして政治指導者の一人。一五二四年いち早くプロテスタント(福音派)の主張に賛意を表し、一五二六年には方伯領内をプロテスタントで統一する。
- (189) 一八四八年組(の議員)同様 trotz einem 1848er. 一八四八年フランクフルト・アム・マインに召集された国民議会の議員たちに対する保守派ベヒシュタインの諷刺。
- (190) Flitterbraut. 原文は上記の通り。  
さんざら花嫁 Schiefmühle. こゝでは「風車」としたが、「水車」の場合もある。風力ないし水力を利用して、石材、ガラスなどの研磨用風車 Schleifmühle. こゝでは「風車」としたが、「水車」の場合もある。風力ないし水力を利用して、石材、ガラスなどの材料・原料を研磨したり、切断したりする施設。
- (191) 衣装を手を取って、いなくなり、二度と戻って来なかった。Nahmen die Kleider führen von darinnen, kamen nie zurück. 民間信仰では、家精は報酬を貰えば奉仕を止めてよい、とされている。KHM三九「家の精」Die Wichtelänner-Erstes Märchenもその一例。スコットランドの褐色小人 Brownie もしかり。
- (192) クロアチア人 Croaten. 現バルカン半島北西部に居住するクロアチア語を話す南スラブ族。十五世紀後半にはオスマントルコ帝国の支配下に置かれる。祖国を追われ、剽悍な騎兵として傭兵稼業を営む者も少なくなかった。遠隔のドイツの地に彼らに纏わる伝説があっても不思議はない。フランス王国にも仕えている。
- (193) 驢馬に化けて旅人を襲う古代ローマの妖怪エンブーサ das römische Empusa in Eselgestalt die Reisenden. ギリシア神話の女怪である。冥府の女神ヘカテーと妖精モルモの美しい娘で、男と交わったあとその肉を喰らったり、眠っている青年を誘惑して、その血を頂戴したりする。変身に長け、犬、驢馬、牡牛、美女に化けたりするという。
- (194) 低地諸地方の伝説に登場する男ないし女の夢魔のように ähnlich dem oder der Mahr in den Sagen des Niederlands. D S B 一五〇および注参照。
- (195) 悪魔とか精霊には掟がいろいろありますね。／はいって来たところから、出て行かなくちゃいけないんです。'S ist ein Gesetz der Geister und Gespenster: / Wo sie hereingeschlüpf, da müssen sie hinaus. 『ファウスト』第一部一四一〇—一四一一行。
- (196) ルーラ川 Ruhlawasser. ルーラの町の上部を貫流する細流ルーラ川 Rola のことであろう。ルーラ川はエルベに注ぐ。
- (197) 聖歌隊指導者たち Choradivanten. 教会聖歌隊首席歌手の歴史的呼び名。一般に教会からその仕事に対しながしかの謝礼を受けていた。こゝで複数になっているのは疑問。
- (198)

- (199) 「緑の小枝に行き当たった」 kann …… auf einen grünen Zweig. 「緑の小枝に行き当たる」 auf einen grünen Zweig kommen は「出世する」「成功する」の意の慣用語。
- (200) フリードリヒ謹厳方伯 Landgraf Friedrich der Ernste. マイセン辺境伯（在位一三三三—一四九）にしてテューリンゲン方伯（在位同）フリードリヒ二世。謹厳侯と添え名された。「噛まれ傷のフリードリヒ」、すなわちマイセン辺境伯にしてテューリンゲン方伯フリードリヒ一世の子息。
- (201) ヘンネベルク伯爵家 die Grafen von Henneberg. テューリンゲン山地とマイン川の間を所領とした伯爵一門。十一世紀末から一六六〇年まで存在。十六世紀後半にはマイニンゲンを支配している。ザクセン・マイニンゲン公ベルンハルト・エーリヒ・フロイントに仕えたベヒシュタインは一八二三年「ヘンネベルク古代研究協会」を創設、死の三年前までその初代協会長の座にあった。
- (202) ブーヘン Buchen. 現バーテン＝ヴウルテンベルク州ネカール＝オーデンワルト郡の都市か。  
三位一体の日曜日 Trinitatissonntag. 聖霊降臨祭後の最初の日曜日。
- (203) 洗礼者聖ヨハネの祝日 Johannistag. 洗礼者聖ヨハネの生誕を祝う大祭。六月二十四日。
- (204) 聖ヴァルブルギスの祝日 Walpurgistag. 五月一日。
- (205) 一ツェントナー三十プフント ein Centner 30 Pfund. 一ツェントナーZentner＝一〇〇プフント。一プフントはカール大帝（＝シャルルマーニユ）の時代四〇六・五グラムと定められた。現ドイツでは一プフント＝五〇〇グラム。
- (206) それを元に一ツェントナー三十プフントの黄金と四十五プフントの白銀が抽出される von dem ein Centner 30 Pfund Gold und 45 Pfund Silber ausgiebt. この文の脈絡は不明。実際には粗鉱は掘り出されなかつたはずなので、こゝも詳しい数値が得られるわけではない。
- (207) シュメーアバハ村 Schmerbach. 現テューリンゲン州ゴータ郡の村だったが、二〇一三年以降小都市ヴァルタースハウゼン（北東のテューリンゲンと南西のテューリンゲン山地の中間に位置する）の一部。
- (208) あのテューリンゲン山地の子どもの昔話では wie bei jedem Kinde auf dem Thüringer Waide. この昔話はKHM一〇五「ウンケの話」第一話Märchen von der Unke. Iとして類話がある。古高ドイツ語・中高ドイツ語「ウンク」uncは蛇（ラテン語anguis〈蛇〉と関係あり）。また「ウンケ」は地方により「リンゲルナッター」Ringelnatter（頭部に冠のような環状文様のある無毒の蛇）を指す。この他に「アウク」aukから由来する「ウンケ」があり、これは蟻蛙。
- (209) 乳入り汁 Milchsuppe. ニンゴはごく素朴な、パン（できれば白パン）を刻むか砕くかして、温めたミルクに入れたもの。現代では単純なレシビによるものでも、ヌーデルやシユベッツレのような種類、卵入り団子等等、実とするものは多様な上、砂糖を入れ

- たり、酸乳を使ったり色々。老人子ども向きではあるが、寒い朝にはだれにも喜ばれよう。
- (21) エス・ネット・ヌー・ニユー、エス・ア・ノッケ *es nett nu Nu, es a Nocke!* 原文は上記の通り。
- (22) 市場町村 *Marktflecken*。市場を開く権利を持っている町村。
- (23) 塩舐め場 *Salzecke*。Leckeとも。猟獣のお気に入り入りの場所となるように、草食獣が大いに好む塩を置いておく場所。岩塩の大きな塊や、塩と粘土を混ぜて団子状にしたものを雨に当たらないよう工夫して設置する。

### 結びに一言

DSB四四五でベヒシュタインが、泉を讚える素晴らしい碑文として記しているラテン語では、いつもながら青山学院大学文学部西村哲一教授——親愛なる元同僚西村淳子教授のご配偶——からご懇篤なご説明と、あるいはこゝうもあろうか、とのご解釈を戴いた。二行目が言葉足らずなため至極分かり難いことをご教示くださったのである。訳者の推量であるが、このラテン語の詩句、ベヒシュタインの創作で、分かり難いのもそれに帰せられるのかも知れない。ご多忙な時期にかような瑣事をご相談したのは申し訳ない限りではあるが、拙訳が頓挫しないで済んだのは、ひとえにご寛容の賜物である。

また龍谷大学名誉教授中山淳子先生は、分載試訳(その八)(その九) 目次の誤りを克明に指摘してくださいました。訳者の杜撰をお詫びするとともに、ありがたいご好意に心から御礼申し上げるしです。

### 訂正

分載試訳(その四)

一九五ページ 後ろから三行目。「||ビール莫迦」を削除。

二六〇ページ注86 テューリンゲンのちっぽけな町ルーラのずぶろくどもが彼らの「麦酒驢馬」(「ビール莫迦」)を担がなければならぬように wie die Vollzapfen im thüringischen Städten Ruhla ihren Bieresel. 未詳。しかし、多分、昔この町でへべれけに酔って迷惑行為に及んだ者は、罰として、町が制定した「麦酒驢馬」と呼ばれる重荷のある距離背中に乗せて運ばなければならぬのであろう。このようにベヒシュタインはしばしば故郷テューリンゲンに言及する。なおルーラはテューリンゲン山地ツェルトに現存。↓「ビール莫迦」を削除。更に「未詳。しかし……ならなかったであろう。」を削除。代わりに「DSB四七八参照。ルーラで夜遅くビールをたらふく飲んで酒場から帰宅する連中は、時折驢馬の恰好をした妖精に負ぶされたり、頸に抱きつかれたりする。」を補う。

分載試訳(その六)

二二二ページ(目次)に以下を補う。二六五 クリストブルクの亡霊たち Die Geister auf Christburg.

\*DS535. Andreas von Sangerwitz. Komtur auf Christburg.

分載試訳(その八)

五ページ(目次) 三八一 緑の科リンデの木と枯れた科リンデの木 の次に Die grüne und die dürre Linde. を補う。

六ページ(目次) 三九二 \*DS134 → \*DS98

分載試訳(その九)

一〇一ページ(目次) 三九七 \*DS35 → \*DS355

一〇三ページ(目次) 四二五 \*DS552 Das Jagen im fenden Walde. → \*DS552 Das Jagen im fremden Walde.